

熊本県本渡市文化財調査報告書 第6集

浜崎遺跡

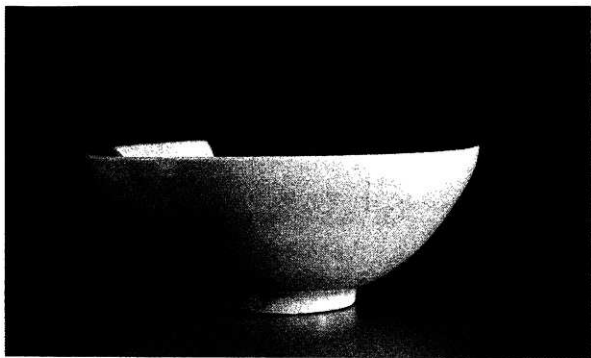
(平成2~3年度 本渡北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)

1993年

熊本県本渡市教育委員会



上 平成2年工事前の区画整理区域
下 平成5年工事中の区画整理区域（中央の左下が浜崎遺跡）



上 SD8 出土青磁碗
下 SD8 出土青磁碗

序 文

私たちの本渡市には、幾世代もの人々が生活してきたことを示す数多くの文化財が点在しています。これらの文化遺産に接するとき、永年の歴史を想起すると同時に、『文化財に学ぶ』ことの大切さを感じます。現在を支え、未来への道標となる過去、その証人としての文化財の保存と保護は、私たちの責務でもあります。

このたび、本渡北土地区画整理事業にともない、区域内の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。調査につきましては、熊本県教育庁文化課の調査結果に基づき平成2年度～3年度に事業の進捗にあわせて、本渡市文化課が調査を実施しました。

特に、浜崎地区におきましては、中世の遺跡が確認されました。13世紀～14世紀に輸入された青磁、白磁、中国銭や土師器、黒色土器、石鍋、木製品の出土は、天草の歴史の一端を解明する貴重な資料を提供してくれました。また、当時の人々が食した貝類や動物遺体などの出土は、祖先の生活の息づかいを感じることができました。

溝状遺構に囲まれた約4haの中世集落を想像するとき、郷土の歴史を認識すると共に、新たな郷土発展を心から願う気持ちが湧き出てまいります。

このたびの調査報告書刊行にあたり、調査にご理解とご協力を賜りました地権者の方々や区画整理組合、炎天下から雪の降る時期までの間、発掘から遺物整理作業までご苦勞をおかけしました皆様、調査指導をいただきました熊本県教育庁文化課、そして、ご指導賜りました調査関係者の皆様に感謝申し上げますと共に、遺物調査と玉穂を賜りました、九州大学菊池泰二、熊本大学大迫靖雄、鹿児島大学西中川駿、京都産業大学山田治、新日本製鉄大沢正己、前本渡市史編集委員鶴田倉造の各先生方に厚くお礼申し上げます。

今後、本報告書が広く教育の場や学術研究に役立ち、文化財保護の一助になることを心から願って止みません。

平成6年3月31日

本渡市教育委員会

教育長 小田原 満

発刊に寄せて

本渡市は、天草の上島・下島に広がる市として、現在、天草の政治、経済、教育、文化、産業等の中心都市としての機能を果たしています。近年、目ざましく発展する本市において、本渡北地区での土地の有効利用と整備が求められ、区画整理事業を実施するはこびとなりました。

事業区域内には、文化財が点在し、古くからの人々の営みを伝えています。事業の開始にあたり、本渡市教育委員会文化課、熊本県教育庁文化課の踏査結果に基づき、埋蔵文化財所在地のなかで、工事により影響を受ける箇所の、発掘調査を実施して、記録保存に努めることといたしました。

浜崎地区には、中世の寺院の伝承と金石資料がありますが、それを裏付けるように、調査により様々な遺物が出土し、地中に埋もれた歴史を証明してくれました。また、この地で生活していた、祖先の様子を思い起こさせてくれました。

一帯は盛上され、新たな町造りが始まっていますが、地中に眠る郷土の歴史を認識し、これからの発展の基本としたいと考えております。

調査報告書刊行にあたり、ご指導賜りました熊本県教育庁、並びに調査を担当頂きました本渡市教育委員会に対し深く感謝申し上げます。また、地権者の方々には調査にあたりご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

ここに、関係者の皆様に対し深く感謝申し上げますと共に、本報告書が広く文化財保護及び教育、学術研究のため活用されることを期待する次第でございます。

本渡北上地区画整理組合

理事長 鶴田 隆 春

例 言

1. 本書は本渡北土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は熊本県教育庁文化課の指導を受けて、本渡市教育委員会がこれにあたった。
3. 調査は平成2年度・3年度に実施した。
4. 本書は平田豊弘が執筆、編集した。
5. 調査における遺構・遺物の実測および整図、写真は平田が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	2
II. 地理的・歴史的環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 周辺の歴史と遺跡	4
3. 土地区画整理区域内の試掘状況	6
III. 遺跡の調査	8
1. 調査の概要	8
IV. 遺構	10
1. 溝状遺構	11
2. G-4・5区の遺構	20
3. K-6区の遺構	21
4. L-5区、M-6区の遺構	21
5. H-11・12区、I-11・12区の遺構	22
V. 遺物	30
1. 遺物の概要と分類	30
VI. おわりに	35
出土遺物観察表	37
出土遺物実測図	61
浜崎遺跡出土遺物の調査	85
1. 浜崎遺跡出土の貝類について	菊池 泰二 87
2. 浜崎遺跡出土の動物遺体	西中川 駿 92
3. 浜崎遺跡出土の木材について	大迫 靖雄 97
4. 浜崎遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	大澤 正己 109
5. 浜崎遺跡出土遺物の ¹⁴ C年代測定	山田 治 129
6. 中世本渡と天草・志岐両氏	鶴田 倉造 1~10
図版	141
あとがき	185

挿 図 目 次

Fig 1	本渡市位置図	1
Fig 2	浜崎遺跡位置図	3
Fig 3	本渡市中世遺跡分布図	5
Fig 4	本渡北土地区画整理区域の文化財分布図	7
Fig 5	浜崎遺跡調査区域図	9
Fig 6	井戸遺構 実測図	11
Fig 7	SD1・SD2 実測図	13
Fig 8	SD3・SD4・SD5・SD6・SD7 地層断面図	15
Fig 9	SD8-2 出土遺物実測図	17
Fig 10	SD8・SD8-2 実測図	18
Fig 11	G-4・5区 SX1・2 SX3 SX5 SX7 地層断面図	20
Fig 12	G-4・5区 平面図	21
Fig 13	出土カメ棺 実測図	22
Fig 14	SK1~SK10 地層断面図	24
Fig 15	鍛冶炉 平面図・断面図	25
Fig 16	H-11・12区、I-11・12区 平面図	27
Fig 17	建物柱穴実測図(1群)	29
Fig 18	建物柱穴実測図(2群)	29
○出土遺物実測図		
第1図	SD1 I層・II層・III層・IV層出土遺物実測図①(1~29)	61
第2図	SD1 I層・II層・III層・IV層出土遺物実測図②(30~52)	62
第3図	SD2 II層出土遺物実測図(1~25)	63
第4図	SD2 III層出土遺物実測図(1~29)	64
第5図	SD2拡張 II層出土遺物実測図(1~43)	65
第6図	SD2拡張 III層出土遺物実測図(1~35)	66
第7図	SD2拡張 III層出土遺物実測図(36~47)	67
第8図	SD3 IV層出土遺物実測図(1~4)	68
	SD4 III層出土遺物実測図(1~16)	
	SD5 III層出土遺物実測図(1~2)	
	SD6 I層・II層・III層・V層出土遺物実測図(1~12)	
第9図	SD8 II層出土遺物実測図(1~17)	69

第10図	SD 8	IV層出土遺物実測図 (1~11)	70
		Ⅶ層出土遺物実測図 (1~10)	
		Ⅷ層出土遺物実測図 (1~5)	
第11図	SD 8	Ⅱ層出土土師器実測図 (1~43)	71
第12図	SD 8	IV層出土土師器実測図 (1~44)	72
第13図	SD 8	Ⅶ層出土土師器実測図 (1~28)	73
第14図	SD 1	出土白磁・青磁実測図 (1~29)	74
第15図	SD 2	出土白磁実測図 (1~11)	75
		SD 2 拡張 出土白磁・青磁実測図 (1~18)	
第16図	SD 4	出土白磁・青磁実測図 (1~6)	76
	SD 6	出土白磁・青磁実測図 (1~8)	
	SD 8	出土白磁・青磁実測図① (1~6)	
第17図	SD 8	出土白磁・青磁実測図② (7~26)	77
第18図	SD 8	出土白磁・青磁実測図③ (27~32)	78
	SD 8	出土輸入陶器実測図 (33)	
	SD 2・4・6・8	出土墨書・刻印のある白磁・青磁実測図	
第19図	SD 1・2・4	出土木製品実測図 (1~10)	79
第20図	G-4・5区 SX 1	出土遺物実測図 (1~23)	80
第21図	SK 1	出土遺物実測図 (1~7)	81
	SK 2	出土遺物実測図 (1~14)	
第22図	SK 3	出土遺物実測図 (1~22)	82
第23図	SK 4	出土遺物実測図 (1~11)	83
	SK 5	出土遺物実測図 (1~7)	
	SK 6	出土遺物実測図 (1~3)	
	SK 8	出土遺物実測図 (1~11)	
第24図	SK 9	出土遺物実測図 (1~21)	84
	SK 10	出土遺物実測図 (1~5)	
Na 1	SD 8-2	出土遺物写真	17
Na 2		出土カメラ箱写真	22
Na 3		鍛冶炉 Na 1~Na 6 出土鍛造剥片・粒状滓写真	26
Na 4		中国銭「天聖元寶」写真・拓影	34
		出土遺物観察表	37

図 版 目 次

第1図版	SD 1 調査状況	143
第2図版	SD 2 拡張 調査状況	144
第3図版	SD 2 拡張 井戸調査状況 SD 5・SD 6 調査状況	145
第4図版	SD 8 調査状況	146
第5図版	G-4・G-5区 調査状況	147
第6図版	H-11・12、I-11・12区 調査状況①	148
第7図版	H-11・12、I-11・12区 調査状況②	149
第8図版	H-11・12、I-11・12区 調査状況③	150
第9図版	遺物 SD 1 (I層・II層・III層・IV層) ①	151
第10図版	遺物 SD 1 (I層・II層・III層・IV層) ②	152
第11図版	遺物 SD 2 (II層)	153
第12図版	遺物 SD 2 (III層)	154
第13図版	遺物 SD 2 拡張 (II層) ①	155
第14図版	遺物 SD 2 拡張 (II層) ②	156
第15図版	遺物 SD 2 拡張 (III層) ①	157
第16図版	遺物 SD 2 拡張 (III層) ②	158
第17図版	遺物 SD 3、SD 4、SD 5	159
第18図版	遺物 SD 6	160
第19図版	遺物 SD 8 (II層)	161
第20図版	遺物 SD 8 (IV層、VII層、VIII層)	162
第21図版	遺物 SD 8 (II層) 土師器	163
第22図版	遺物 SD 8 (II層) 土師器	164
第23図版	遺物 SD 8 (II層) 土師器	165
第24図版	遺物 SD 8 (IV層) 土師器	166
第25図版	遺物 SD 8 (IV層) 土師器	167
第26図版	遺物 SD 8 (IV層) 土師器	168
第27図版	遺物 SD 8 (VII層) 土師器	169
第28図版	遺物 SD 8 (VII層) 土師器	170
第29図版	遺物 SD 1 白磁・青磁	171
第30図版	遺物 SD 2 白磁・青磁 SD 2 拡張 白磁・青磁	172
第31図版	遺物 SD 2 拡張 白磁・青磁 SD 4 白磁・青磁 SD 6 白磁・青磁 SD 8 白磁・青磁	173
第32図版	遺物 SD 8 白磁・青磁	174
第33図版	遺物 SD 8 白磁・青磁・輸入陶器	175
第34図版	遺物 SD 2、4、6、8 出土墨書・刻印のある白磁・青磁	176
第35図版	遺物 木製品 No①~No⑤	177
第36図版	遺物 木製品 No⑥~No⑩	178
第37図版	遺物 G-4・5区 SX 1	179
第38図版	遺物 SK 1、SK 2	180
第39図版	遺物 SK 2、SK 3	181
第40図版	遺物 SK 4、SK 5、SK 6	182
第41図版	遺物 SK 8、SK 9	183
第42図版	遺物 SK 9、SK 10	184

I. はじめに

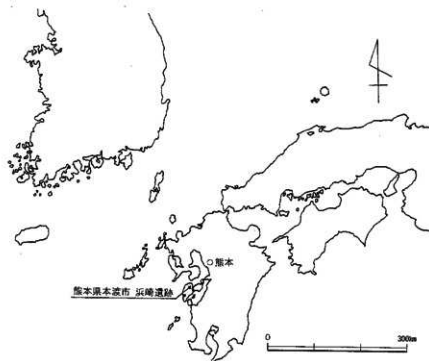
1. 調査に至る経過

天草は熊本県南西部に位置し、大小120余りの島々よりなる。西海に浮かぶこの島々の気候は温暖で、植生は暖帯の照葉樹林帯である。行政区は2市13町に区分され、本渡市は、この天草群島の中で最大の天草下島と二番目に大きい上島を結ぶ要の地点に位置する。

現在、本渡市の北部地域においては土地区画整理事業が進行中であるが、区域内には文化庁が発行する「全国遺跡地図・熊本県」に記載されている周知の遺跡が存在し、平成元年3月1日～3日の日程で、熊本県文化課、本渡市教育委員会による踏査を実施した。踏査結果に基づき、平成元年12月13日～翌1月14日の日程で、試掘調査を実施したが、中世の溝状遺構、青磁、白磁、土師器などが出土した。これらの経過を踏まえ、土地区画整理区域内に所在する、浜崎遺跡、川原田遺跡の発掘調査および浜崎神社に埋納されていると伝えられる礫石経の確認をすることとした。調査は、平成2年7月より土地区画整理事業の計画に従い、道路予定地を発掘し、一部公共用地以外の区域については、本渡市教育委員会の事業として発掘した。

なお、遺跡周辺は盛土造成されている。

Fig 1 本渡市位置図



2. 調査組織

浜崎遺跡の発掘調査は、熊本県教育庁文化課の指導のもと木渡市教育委員会が主体となり、土地区画整理事業との調整を木渡市都市計画課、事務局を木渡北上地区区画整理組合が担当して実施したものである。

組 織

組合長理事	御奈良崎正一	御田島満佐久	御越田 隆春		
都市計画課	課 長	御佐藤和十三	御永野 幸信	御中村 孝	
区画整理係	参 事	御鬼塚 悟	御平田 一國		
		金沢 末喜	酒井 秀則	田中 耕三	吉永 眞二
		松川 安英	倉田 信幸	鎌田 正治	船島 哲子
		御小島 秀典	御寺下 高志	御松木ヤヨイ	
教育委員会	教育長(御)	吉野 隆三	御小田原 満		
文化課	課 長(御)	松本 守	御山本 忠雄		
文化財係	係 長(御)	山下 洋右	御森山 滝夫		
学芸員		平田 豊弘 (調査担当)			
作業員	山下 一七	原 源一	田中 虎之	島崎 修	荒木 禎爾
	山口ツヤコ	原田三代子	駿河 都代	山下 幸子	谷川 陽子
	江崎フクヨ				
遺物整理	柳本 敦子	大塚 真紀	岡村みさお	島崎 修	荒木 禎爾
	北川 篤	柴田 稔和	山口由加里	福島 忍	井芹 千穂
	内田三千代				
調査指導	熊本県教育庁	文化課	松本 健郎		
遺物判定	九州大学		菊池 泰二		
	鹿児島大学		西中川 駿		
	熊本大学		大迫 靖雄		
	京都産業大学		山田 治		
	新日本製鉄		人澤 正己		
	前木渡市史編纂委員		鶴田 倉造		

II. 地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置

浜崎遺跡は、熊本県本渡市浜崎町・本渡町本戸馬場字北原に所在する。

本渡市は、九州西方の東シナ海、有明海および不知火海に囲まれた天草諸島の中央部に位置する。市域は、本渡瀬戸海峡を挟んで天草上島の西部と天草下島の東部に広がり、総面積は144.57km²で、天草諸島874.93km²のおよそ6分の1である。市の東は、上島の志柿、下浦地区東部の標高250m程の低山地を境界に有明町および栖本町、西は下島中央部の柱枿(517.7m)、角山(525.9m)、矢筈岳(480.6m)など、標高500m前後の山地を境界に、苓北町および天草町、河浦町、南は大宮地山麓で新和町、北は標高100m以下の低丘陵で五和町と接している。天草の地形は、ほとんどが低山性山地で、山がすぐに海に迫るリアス式海岸であり、河川に沿って小平野が海沿いに点在している。近世以前の天草では、この河川ごとに形成された小平野がそれぞれ独立した村落を形成していたと考えられる。本渡市内には、広瀬川、町山口川、亀川、方原川、小手川、江川などの小河川が流れるが、この河川に沿って集落が営まれている。また、江戸時代より遠浅の海岸を干拓して農地利用がなされたが、現在の市街地は、この上に形成されたものである。

浜崎遺跡は、市街地から北に1kmほど離れた、標高7mほどの水田が営まれる平坦地に位置する。遺跡の北側は広瀬川が流れ、小平野は農地として利用されている。南側は町山口川が流れ、商店街、住宅地として市街地を形成している。東側は標高3mほどの干拓地で、農地の中に住宅地が虫喰状に点在する。遺跡と干拓地の間には、小松原川が流れるが、満潮時には海水が上がり、元来の地形を考える参考となる。西側は、築岳をはじめとした低山地が連なっている。遺跡は、これらの小河川の流域に形成される小規模な沖積地にあり、広瀬川右岸の独立丘陵である丸尾ヶ丘から延びる段丘先端に位置する。

Fig 2 遺跡位置図



2. 周辺の歴史と遺跡

本渡では、旧石器時代より連続と人々の生活が営まれている。この時代の遺跡としては、九尾ヶ丘遺跡、妻の鼻遺跡の2遺跡が確認されているが、いずれも表面採集の遺物によって確認されたものであり、詳細については不明な点が多い。

縄文時代になると、遺跡数を増し現在44カ所の遺跡が確認されている。遺跡分布をみると、海岸まで追った山地を流れる小河川流域の段丘上に分布する遺跡群と、内湾した海岸部の低地や海底に分布する遺跡群に大別される。この分布パターンは、天草諸島における遺跡分布の状況と一致している。特に広瀬川流域では、川口近くの下流域に遺跡が集中し、今回調査した浜崎遺跡も、この地域に含まれる。

弥生時代の遺跡は、縄文時代遺跡に比較して非常に少ない。これは、天草の基本的地形である、山が海まで迫り、小河川の流域に小規模な沖積平野が開けるということが、沖積地を生産の重要な場とする弥生時代において、適していない点が大きき原因であろう。現在、市内に存在する弥生遺跡は6カ所が確認されているが、いずれも断片的に遺物が確認されているにすぎない。

古墳時代になると、本渡市内でも海に面した岬状の丘陵に種々の墳墓群、古墳が造営されることになる。現在、15カ所が確認されているが、地下式板石積石室墓、箱式石棺、横穴式石室を内部主体とする円墳、横穴古墳と多彩である。地下式板石積石室墓と箱式石棺の関係については明確ではないが、地下式板石積石室の構造を持つ妻の鼻墳墓群は5世紀代の築造である。また、横穴式石室を内部主体とする円墳の築造は、6世紀中頃より始まり、後半に入るとその数が増している。7世紀代になると横穴式石室墳の築造が終わり、横穴墓が築造される。本渡市内には、6基の横穴墓が存在し分布の西限となっている。

平安時代の「和名類聚抄」には、天草の「波太、天草、志記、恵家、高屋」の5つの郷名が記されている。このうち志記は、現在の葦北町志岐であることは確実である。波太については、現在の宇土郡三角町波多に比定する説もあるが、大矢野島周辺との考え方もきょう。そして、現在の本渡市周辺か、天草に比定されるものと思われる。恵家、高屋については、現在のところ不明である。

鎌倉時代の天草島で中心的役割を果たすのが、志岐氏と天草氏である。志岐氏はその祖、藤原光弘が建暦2年(1212)、天草郡内6カ浦の地頭職に補任されたことに始まる。一方の天草氏は大蔵氏を祖とし、平安時代末期には筑前国(福岡県)原田を拠点とした。この一族が天草に移り、積極的に開墾を進め私領の開発と拡大化を図ったのである。天草氏は、在地化した開発領主であり、地頭として補任された志岐氏と私領拡張をめぐる、抗争することになる。その争いの中心が「木紙島」をめぐるものであった。浜崎遺跡は、この時代の遺跡であり、天草の中世史研究の上で重要な位置をしめるものである。

Fig 3 本渡市中世遺跡分布地図



- ①浜崎遺跡 ②本渡城跡 ③金浜城跡 ④存郷城跡 ⑤広瀬城跡 ⑥川原田遺跡
 ⑦舟ノ尾尾越の板碑 ⑧本渡南の板碑 ⑨染岳の霊場 ⑩亀川古寺古塔群
 ⑪伊賀倉権現古塔群 ⑫立浦の板碑 ⑬藤ノ瀬遺跡 ⑭崎野の板碑 ⑮志柿城跡

3. 土地区画整理区域内の試掘状況

今回の土地区画整理区域内については、踏査に基づき平成元年12月13日～翌1月14日まで試掘調査を実施した。

○ 江羅地域

江羅地域では、これまでの遺跡の所在は報告されていないが、踏査により少量の土師器、須恵器の散布がみられた。このため、7地点で試掘を実施したが、土師器、青磁片が極く少量出土するにすぎなかった。また、明確な遺物包含層は確認されず、一帯が湿地帯であることが推察された。

○ 川原田遺跡

川原田遺跡は、これまで周知の遺跡として報告されていなかったが、踏査により弥生式土器、土師器、黒燐石等の散布がみられた。このため、11地点で試掘を実施したが、2地点で土師器、青磁片、黒燐石が出土し、落ち込み状の遺構に包含層を確認した。しかし、遺跡としては極めて小規模であり、また、すでに実施された道路工事により大半が消滅したものと考えられた。

なお、この地域には、積石塚状の塚が3基存在するが、時代や性格については不明であった。このうち1基を試掘したが、褐色粘土層に茶褐色土を盛り、頭大の礎を積んでいた。塚の内部、ならびに基盤層への掘り込みもなかった。一帯は、字名が示すとおり耕作土の下は、礫層であり、北側を流れる広瀬川の氾濫源であったことがうかがえる。

○ 牛の首日遺跡

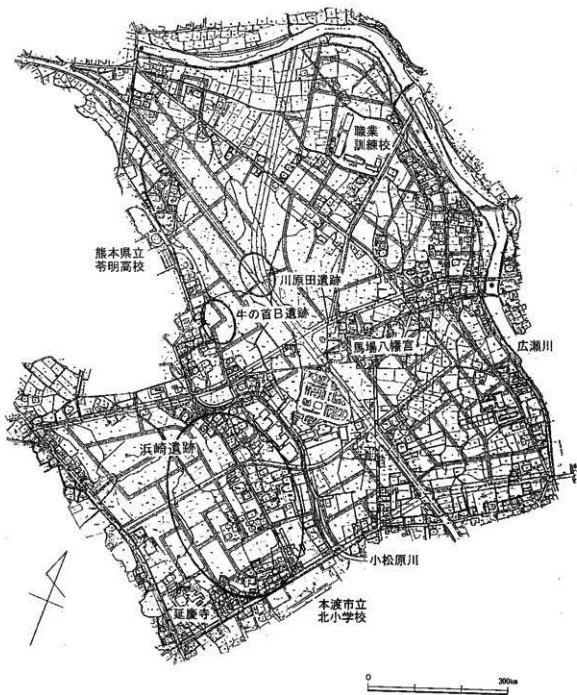
牛の首日地域においては、これまで磨製石斧、打製石斧、スクレイパー、石鏃などが点々と散布していることが知られている。踏査でも天草農業高校（現吾明高校）の東南部、段丘と平野部とが接するテラス状地で、土師器、須恵器、黒燐石の散布が確認され、3地点を試掘した。試掘の結果、多量の遺物が表面採集できるが遺構は確認できず、周辺は焼物用粘土として採土されていた。なお、段丘上付近では、縄文土器が採集されているが、宅地化のため試掘できなかった。

○ 浜崎遺跡

浜崎遺跡は、周知の遺跡である。中世寺院跡として登録されており、地元では「極楽寺跡」との伝承がある。現存する堂宇には、五輪塔、宝篋印塔の残欠が残り、周辺の民家でも奉られている。また、一帯からは縄文式土器、土師器、須恵器、石鏃等の散布がみられ、散布地と寺院跡が重複するものと考えられた。6地点を試掘したが、いずれも、土師器、青磁、黒燐石、須恵器が出土し、遺構が確認された。なお、隣接する浜崎貝塚との関連のため、本渡北小学校北側の6地点を試掘したが、土師器、青磁、黒燐石が出土した。

以上のことにより、区画整理区域内では、浜崎遺跡が最も広範囲で保存状況の良い遺跡と考えられた。今回、本調査を実施した浜崎遺跡について報告する。

Fig 4 本渡北土地区画整理事業区域内の文化財分布図



Ⅲ. 遺跡の調査

1. 調査の概要

浜崎遺跡の調査は、土地区画整理事業に伴う工事計画に従い平成2年7月17日より開始された。また、調査箇所は、作付等の関係でトレンチが点在する形となりながらも、継続して実施したが、用地交渉等の問題から平成3年3月30日に調査を中断した。その後、平成3年5月22日より再開し、途中の中断があったものの、最終的に平成3年12月20日をもって事業区域内の調査を完了した。

調査は、一帯が盛土されることもあり道路部分のみを行い、一部拡張部分については、教育委員会の負担で実施した。踏査および試掘により、縄文時代の遺物、中世遺物を採集していたが、本遺跡の中心は中世遺構であった。また、縄文時代の遺物と中世遺物が共存して出土し、縄文遺構が削平されている可能性が高い。加えて、水田造成と、付近が良好の粘土層のため、焼物用の粘土として採土された地点もあり、隣接する水田でありながら、地質が大きく変化している場所もあった。

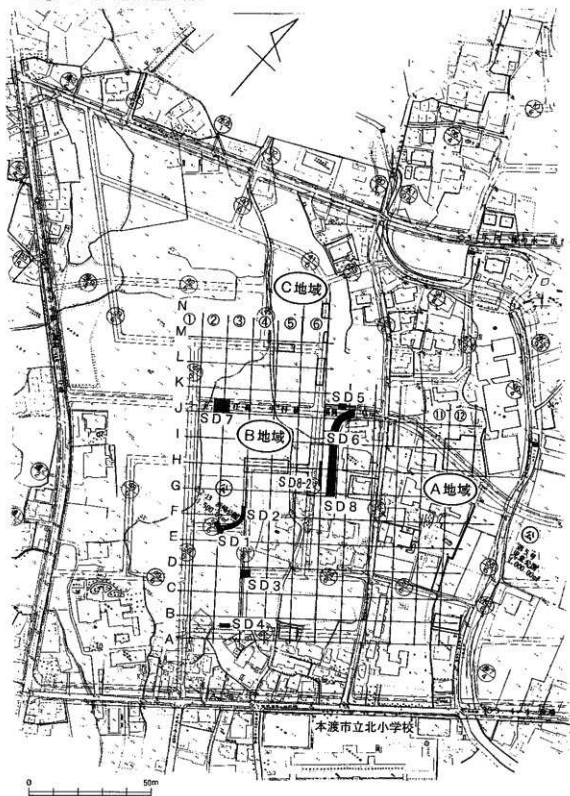
本遺跡の中で、主体となった遺構として東西に流れる2本の溝状遺構がある。その全容については、調査範囲の制限があり解明されなかったが、SD4-SD1-SD7の流れで、200mを測り、SD6-SD8の流れで60mにおよんだ。また、建物跡、土壌、かじ伊関遺遺構を確認した。遺物は、12世紀後半から13世紀、14世紀の中国産陶磁器、国内産の土師器、石鍋の破片や木製品が出土した。これら中世遺物と共伴し、縄文時代の土器、石器が若干出土した。縄文時代の遺跡が、中世の削平や近代の造成で攪乱を受けるなか、小児用カメラを確認できたことは幸いであった。

試掘調査において確認した川原田遺跡は、2m×5m程の極めて小区域のみが残存していたが、土壌の確認と土師器の出土をみた。これまで周知されていない遺跡であり、その中心はすでに道路工事の時点で消滅していた。小規模な遺跡であったと考えられるが、本市の中世を考えると参考にとなる。

また、区画整理事業により移転する浜崎神社には、礫石径の埋納が伝承されており、地区の方により、4,249個が掘り出された。これらの個体数の確認と写真撮影を実施したが、近世の民間信仰を考える資料となった。なお、確認後これらの礫石径は移転地に再び埋納され、地蔵尊が奉られている。

以上の調査について、熊本県教育庁文化課の指導を受けて本渡市教育委員会が実施し、遺物整理作業を進めた。

Fig 5 浜崎遺跡調査区域図



IV. 遺構

浜崎遺跡の調査は、工事との関連で道路予定箇所を実施した。この結果、8地点において溝状遺構を確認したが、2本の流れに区分できる。まず、遺跡の西側を北から南に流れる、SD7～SD1の溝に、SD2が合流し、SD3～SD4へ続く流れである。この流れの西側は、ゆるやかな山すその傾斜地であり県道本渡～五和線が通る。現在、この道路横には、北から南に流れる溝があり、山からの湧水を流しており、付近の試掘でも一帯が湿地であることが確認された。なお、SD2には、西側からの廃棄による粘土貝層が堆積するが、遺構の確認はできなかった。このため、一応の目安としてSD7～SD4の流れを、遺跡の西端として考える。SD7の北側での溝状遺構は確認されなかったが、青磁、白磁、土師器が少量出土している。SD4の南側、本渡北小学校正門前の道路は、溝川を埋めて設置されたもので、工事中多数の五輪塔が発見されている。このため、SD4は、北小学校前で東に流れを変え、小松原川に流れ込むものと推定される。次に、SD5、SD6～SD8の流れも、北側を上流に南に流れるが、調査区が限定されているため、様相の把握が困難である。なお、SD8の東側溝縁には、東側より廃棄された土師器、青磁、白磁等が列をなし出土しており、H-11・12、I-11・12区で確認された土壌や柱穴より出土した遺物と同時期である。

G-4・5区は、粘土採集が行われ削平されているが、8個の土壌が確認された。SX1、SX2、SX3は、10m×13mの長方形の掘り込みに、さらに掘り込み、礫、炭化物がまどまっている。特にSX1、SX2からは、多量の鉄滓、焼石が出土し、精錬鍛冶と鍛練鍛冶の遺構かと思われるが、土師器、青磁、白磁が出土し、上層では近世磁器が出土する。SX8も、同様の状況であった。SX4～SX7は、近世土壌である。

H-11・12、I-11・12区では、10個の土壌と柱穴を確認した。土壌はSK5、SK9より粘土貝層が確認された。SK3、SK5、SK8、SK9からは、床面を中心に30cm×50cm程の自然石や掌人の焼石が出土するが、鍛冶がに伴う作業用の石材と考えられる。また、柱穴は231個を確認したが、床面プランは確認されず建物7棟が確認されたにすぎない。

特に、この地区からは鍛冶炉6基が確認されている。No1、2、3は、互いに接する状態で検出され、形態が確認できた。また、No4～6も、10m以内の所に点在するが、かじに関する一連の工程の炉として理解できるが、残存状態は悪い。地区内のSK8より鉄滓が中世遺物と相伴しており、初も同時期の遺構と考えられる。

他に、縄文時代のカメラ棺1基が、調査を中断している間に掘り出されており、周辺に散布する土器、石器等より有力な集落が形成されていたことがうかがえる。

K-6区は、地山層に掘り込んだピットを確認したが、プラン等は不明である。

L-5区、M-6区は、攪乱を受けており、中世遺物、近世遺物が出土する。周辺では、少量の遺物が採集され、浜崎遺跡の北端にあたると考えられる。

1. 溝状遺構

(1) SD 1

SD 1は、北から南に流れる溝で、下部下端幅2.60m、下部上端幅3.60m、中央部深さ52cm、溝中標高5.20mを測る。溝内は5層に区分され、Ⅱ層、Ⅳ層が遺物包含層である。Ⅱ層は、黒色混土只層で溝の西側より投棄され、貝類、獣骨、青磁、白磁、土師器、瓦器などが出土する。Ⅲ層は、灰色砂層で平坦に堆積するが、溝の流水を示すものである。Ⅳ層は、暗黒色泥炭層で厚く堆積する。Ⅴ層は青灰色砂礫層で溝の最下部となり流水を示す。この溝の西側は二段に落ち、段落ち部には、木杭列が残る。木杭は、約60cm間隔（推定）に8本確認されたが、先端は尖り30cm程打ち込まれて垂直に立っており、溝縁を補強するためのものと考えられる。東側は、一段の段落ちが確認されるが、上段はゆるやかな傾斜の地山層となり、溝上部の東端は明確に確認することはできない。SD 1は、南側でSD 2と合流し、下部下端幅5.26m、下部上端幅6.60m、中央部深さ60cm、溝中標高5.05mを測る。合流地点で溝幅は広がり、溝中標高も低くなり南へ流れ、SD 3と合流してSD 4へと流れていく。

(2) SD 2

SD 2は、北から南に流れる溝で、途中より西に湾曲してSD 1と合流する。下端幅2.80m、上端幅3.60m、中央部深さ46cm、溝中標高5.00mを測る。溝内は3層に区分され、Ⅱ層、Ⅲ層が遺物包含層である。Ⅱ層は、暗黒色泥炭層で、SD 1との合流地点近くでは、この下に灰色砂質層が薄く確認されるが、北側では明確に確認できない。Ⅲ層は、暗黒色泥炭層である。Ⅳ層は、青灰色砂質層で最下部となり流水を示す。この溝は、地山層に明確に掘り込み、中世遺物を中心に、ふいごの羽口、石鍋、木製品などが出土する。遺物の出土状況は、SD 1が溝の西側に集中するのに対し、SD 2では溝合流地点では少なく、湾曲地点から北側にかけて溝全域より出土する。なお、北側の状況については、調査区域が限定されているため確認されない。

SD 2-井戸状遺構

SD 2-井戸状遺構は、SD 2東側の溝縁に位置し、上端幅N S150cm×EW140cm、底幅N S104cm×EW94cmの正方形を呈し、井戸底標高4.80mを測る。東側は地山層で、西側は溝より高く区切り井戸縁となる。井戸の構造は、4本の木杭をやや内斜気味に打ち立て、下部より板を重ね上げている。特に最下部は、2枚の板を重ね、内部より頭大の礫と小礫で

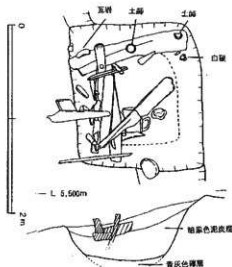


Fig6 井戸状遺構

固定し底にも礫を敷く。板は手斧（ちょうな）で丁寧に加工され、井戸枠はホゾ穴に角材を組み構成する。井戸内は暗黒色泥炭層で、土師器、白磁が出土した。

(3) SD3

SD3は、東から西に流れSD1～SD4を結ぶ溝に合流すると推定される。下端幅3.10m、上端幅4.10m、中央部深さ50cm、溝中標高4.90mを測る。溝内は5層に区分され、IV層が遺物包含層で極めて少量の出土である。付近はすでに削平され、溝の北側、東側は攪乱されている。II層は、灰色砂層で流水を示す。III層は、IV層を攪乱する茶色粘土層である。IV層は、暗黒色泥炭層で厚く堆積する。V層は、青灰色砂質層で溝の最下部で流水を示す。

(4) SD4

SD4は、北から南に流れる溝の南端で、下端幅8.70m、上端幅18.30m、中央部深さ54cm、溝中標高4.11cmを測る。溝内は3層に区分され、III層下部が遺物包含層である。III層は、暗黒色泥炭層で中世遺物と、黒燧石、石器、土器片等の縄文時代遺物が、他の溝に比較して多量であった。IV層は、青灰色砂礫層で流水を示す。一帯は湧水が激しく、周辺の水が集まる地点である。この後、この溝は東に湾曲しながら本渡北小学校前から小松原川に流れ込むと推定される。試掘では、北小学校道路付近は1.50m以上の暗黒色泥炭層が堆積している。

(5) SD5

SD5は、北に延びると推定される溝で、下端幅2.74m、上端幅3.60m、中央部深さ42cm、溝中標高6.28mを測る。溝内は3層に区分されるが、I層、II層は粘土採集のため攪乱した層である。III層は灰黒色粘土層で、遺物は出土しない。SD6と接するが、溝底は幅50cm、高さ30cmの橋を隔てて合流する。溝の東側は、茶褐色砂礫層が平坦に整地されている。

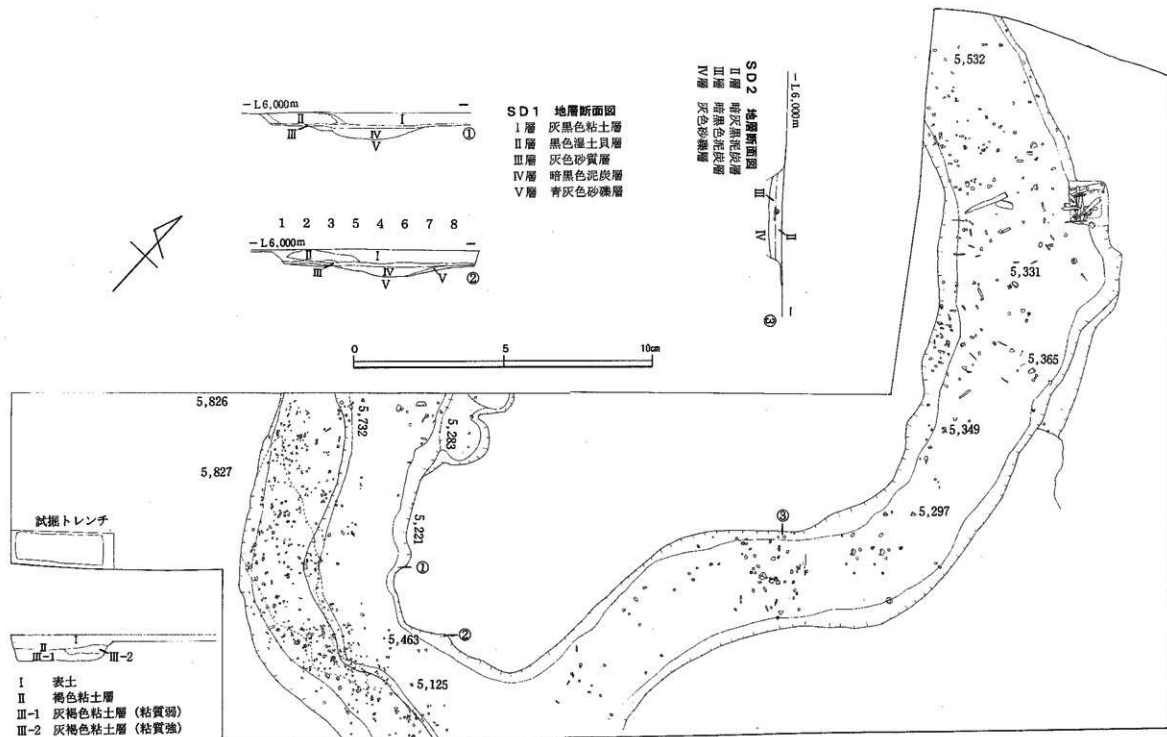
(6) SD6

SD6は、東から南に湾曲する溝で、南側下端幅2.90m、上端幅3.70m、中央部深さ47cm、溝中標高6.07cmを測る。溝内は5層に区分され、II層、III層、V層が遺物包含層である。II層は、灰色粘土層、III層は、灰色砂層が厚く堆積し、標高6.14mである。IV層は、茶色粘土層が溝縁より堆積する。V層は、灰黒色粘土層（泥炭質）である。なお、SD6の中程は、溝中標高6.00m、III層下部標高6.20mである。

(7) SD7

SD7は、遺跡の西側に位置し、SD1～SD4の流れになると推定される。一帯は粘土採集と整理が実施され、大きな攪乱を受けている。溝中は6層に区分され、遺物はII層の暗黒色泥炭層より土師器片が極少量確認された。溝の下端幅10.90m、上端幅14.00m、中央部深さ50cm、溝中標高5.80mを測る。

Fig 7 SD1・SD2 実測図



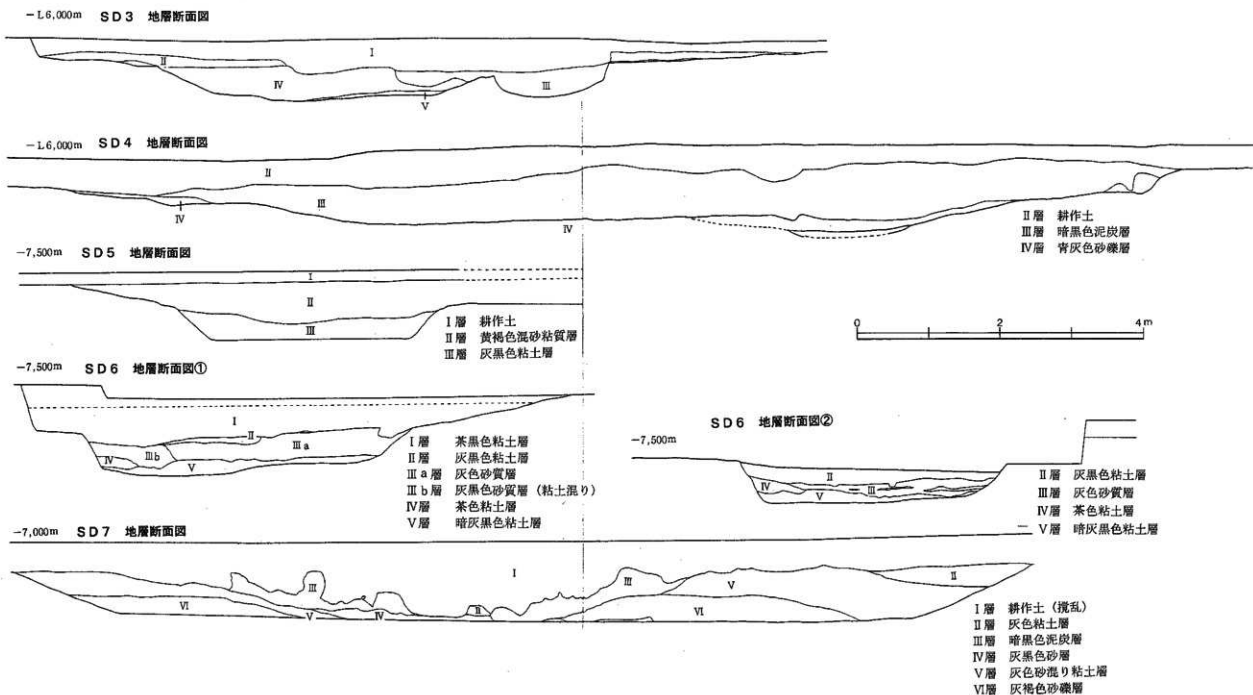


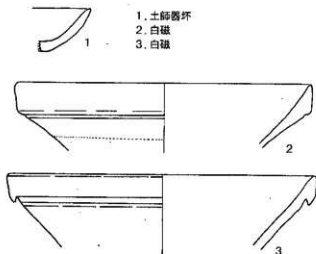
Fig 8 SD3・SD4・SD5・SD6・SD7 地層断面図

(8) SD8

SD8は、試掘において多量の遺物が出土しているため、南北に30mの調査区を設定した。溝は北から南に流れ、南側の状況は調査区が制限されているため確認できない。形状は直線的で、下端幅4.40m、上端幅6.20m、中央部深さ80cmを測る。溝内は8層に区分され、自然堆積と流水堆積が繰り返している。耕作土直下に地山層が表われるが、これに掘り込みI層灰褐色砂質層が検出され、遺構が明確となる。II層灰黒色粘土層（褐色粘土混じり）は、溝の東側から廃棄された多量の土師器を中心に遺物を包含する。III層灰色砂質層は、溝中くらいから西にかけて厚く堆積する。IV層灰黒色粘土層は上層がしまりのある層で、下層が砂粒混じりとなり、土師器、青磁、白磁などが出土する。V層赤褐色粘土層は、溝西側より流れ込むように中くらいまで厚く堆積する。VI層灰黒色砂質層。VII層黒色粘上層、VIII層黒色泥炭層は溝の最下層となり、中世遺物の他に流木など出土する。I層、III層、VI層の砂質層、V層の赤褐色粘土層からの遺物出土はない。また、遺物は、溝東側より投棄されたもので、中程から西側にかけては上上しない。溝の標高は北側で5.86m、中部5.76m、南側で5.60m。出土状況の特色として、溝の東側に整然と列をなし上上し、完形品に復元できる遺物が多いことが挙げられる。これは、各包含層に共通している。溝の東側における住居遺構等の集落の存在が確実である。なお、この地点は30m～40mの粘上採集を行い整地したものである。

SD8-2

SD8-2は、SD8より西側に3m程の地点を北から南に延びる掘り込みである。下端幅1.50m、上端幅2.00m、中央部深さ30cmを測る。内部は、I層灰褐色粘土層（砂粒混じり）、II層灰色粘土層（ややしまる）で、I層より糸切り底の上師器、白磁IV類が出土する。SD8のI層とIII層にあたり、SD8の後期に築かれた溝と考えられる。



№1 SD8-2 出土遺物写真

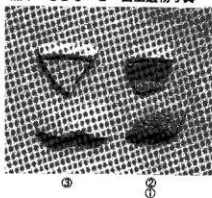
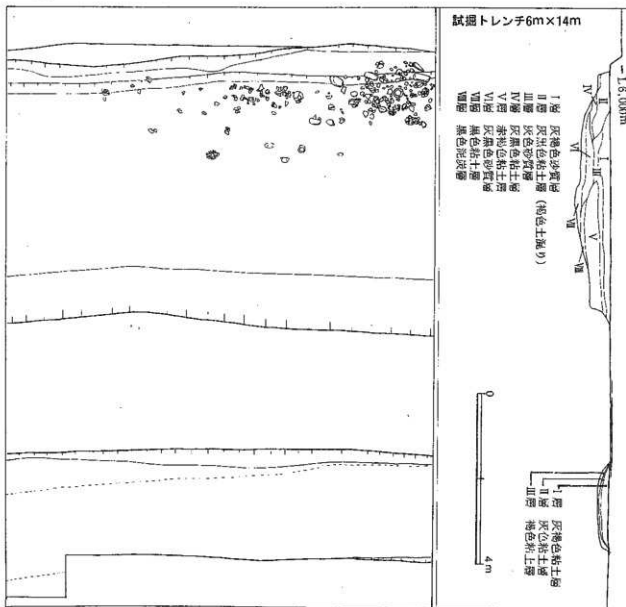
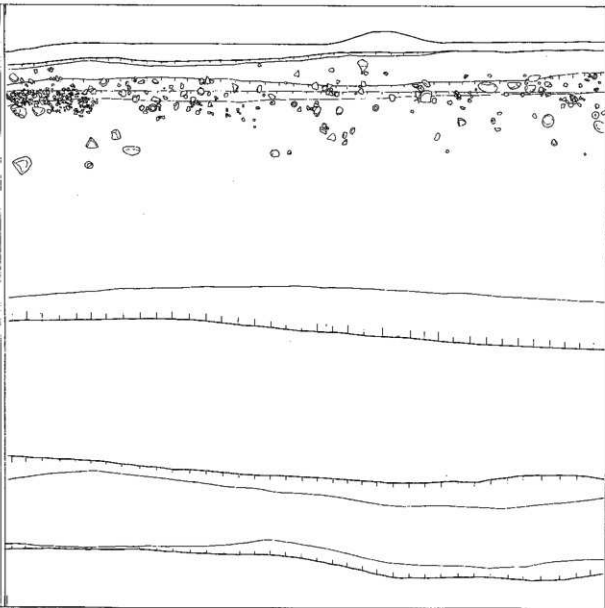


Fig 9 SD8-2 出土遺物実測図

Fig 10 SD8・SD8-2 実測図



SD8 地震断面图



SD8-2 地震断面图

2. G-4・5区の遺構

G-4・5区では、道路工事区で土壌を確認し、南側を一部拡張して調査した。一帯は粘土採集のため、土層が攪乱されている。SX1は、3層に区分され、II層の茶褐色粘土層にブロック状に入る黒色炭化物混土層を中心に遺物が出土した。II層遺物は、掌大の流石、鉄滓、土師器、青磁、白磁、備前焼、常滑焼の陶片等が混在する。SX2は、4層に区分され、土壌内の状況はSX1と同じであるが、多量の鉄滓が出土する。なお、II層上部では、近世染付磁器片、唐津焼片など出土する。SX3は、3層に区分され、遺物の出土は少ない。SX5は、浅い掘り込みで11m×10mの台形状を呈し、3層に区分される。II層より、少量の近世染付磁器片、土師器、青磁、白磁が出土する。SX4、SX6、SX7からの遺物の出土はない。G-4・5区は削平のため明確ではないが、SX1・2・3・5の土壌は鍛冶関連遺構と考えられる。

Fig 11 G-4・5区 SX1・2、SX3、SX5、SX7 地層断面図

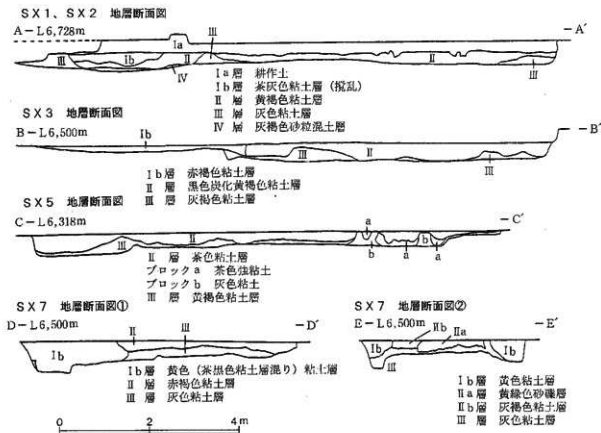
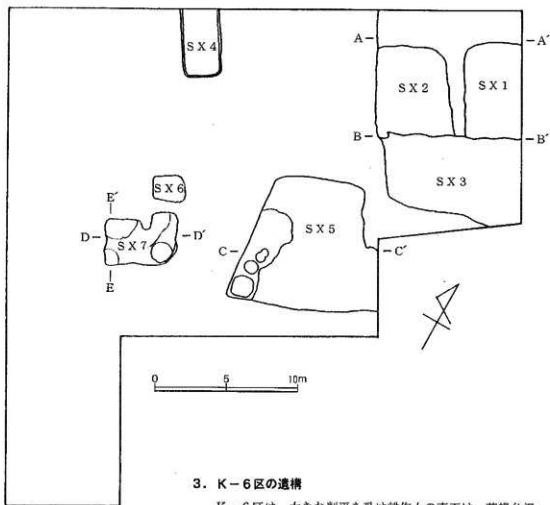


Fig 12 G-4・5区 平面図



3. K-6区の遺構

K-6区は、大きな削平を受け耕作土の直下は、茶褐色混土小礫層である。この小礫層に、浅く掘り込むビット19個を確認した。削平によりビット下部の残存と考えられが、ビット内からは土師器が出土する。調査区が限定され、ビットの並びも不規則であるため、その性格については把握できない。

4. L-5区、M-6区の遺構

L-5区は、表土直下の地山層が平坦に堆積するが、調査区の半分程が攪乱されている。攪乱層より、近世染付磁器片、青磁片、土師器片等が出土する。

M-6区は、表土直下の地山層の一部を残し、全般に渡り攪乱される。攪乱層より、近代染付磁器片、青磁片、土師器片等が出土する。この区域は遺跡の北部にあたり、周辺からは少量の遺物が採集されるが、すでに整地をされている所が多い。

5. H-11・12区、I-11・12区の遺構

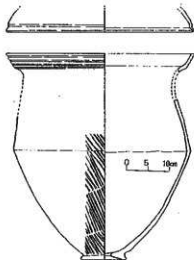
この地区は、縄文時代の遺物が表採されており、浜崎遺跡散布地として周知されている。また、隣接地では、粘土採集のおり石造、石蔵などが採集されている。このため、道路工事区調査終了後、周辺を本波市教育委員会が調査した。今回の調査で縄文時代の遺物包含層は確認することはできなかったが、表土直下の中世の土層中に混在して縄文遺物が出土している。こうした状況の中、平成3年に安田峰義氏により縄文時代後期のカメ棺1基が耕作中に掘り出されている。周辺に有力な集落が形成されていたことは確実であるが、調査では確認されなかった。縄文時代の遺構は、中世の開発等により削平された可能性がある。また、遺物中に8世紀～9世紀の須恵器が確認されるが、これらの遺物も中世遺物と共存する。地区内の遺構として、中世の土壇、柱穴、かじ炉、近世土壇を検出した。

(1) カメ棺墓

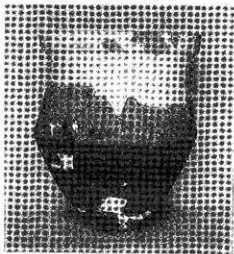
縄文時代後期のカメ棺は、「墓壇の中に、やや傾斜をもって立てた状態にあり、土器の中は土が詰まっていた。完全な形だったが、掘り出す際に割れてしまった。」(安田談)の状況で出土する。カメ棺は下に深鉢形土器、上蓋に浅鉢形土器を使用した合わせ口のもので、浅鉢形土器は、下の深鉢形土器内に落ち込んだ小破片があるのみである。

カメ棺に使用されている浅鉢形土器は少破片であるが、内面は良く研磨され、外面は貝殻条痕が残る。復元径44.5cmで底部の形状は不明。深鉢形土器は口縁部を欠いているが、ほぼ完全に復元できる。口縁部はタガ状に立ち上がり、その部分に4条の沈線がめぐる。胴部は、ゆるやかにくの字状に屈曲している。底部には、打ち欠きにより孔が穿たれている。胎土は精良で、焼成は良く灰黄色である。復元口径44.5cm、器高50cmを測るが、大きさから小児用のカメ棺であろうと思われる。

Fig 13 出土カメ棺 実測図



No.2 出土カメ棺写真



(2) 土壌

- SK1 SK1は、NS280cm×EW200cmの不規則な方形を呈し、深さ13cmを測る。内部は黒茶色粘土層で、上部より8世紀代の須恵器、こしき、下部より土師器、白磁が出土する中世土壌である。
- SK2 SK2は、NS330cm×EW390cmの不規則な方形を呈し、深さ22cmを測る。内部は黒茶色粘土層、茶色粘土層で、土師器、青磁、白磁が出土する中世土壌である。
- SK3 SK3は、NS204cm×EW368cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。内部は茶黒色粘土層で、中世遺物の他に大量の自然石が床面より出土し、かじり使用石を廃棄した土壌である。
- SK4 SK4は、NS260cm×EW140cmの細長い楕円形を呈し、深さ38cmを測る。内部は茶黒色粘土層で、ブロック状の炭化物、自然石、焼石と中世遺物を出土する土壌である。
- SK5 SK5は、段状でNS168cm×EW150cmの細長い楕円形の半分で、深さ36cmを測る。内部は茶黒色粘土層で、ブロック状の炭化物、自然石、焼石、中世遺物を出土する土壌である。
- SK6 SK6は、NS140cm×EW120cmの細長い楕円形を呈し、深さ14cmを測る。内部は茶黒色粘土層で、少量の炭化物が混じる。瓦器、土師器、白磁など少量の中世遺物が出土する土壌である。
- SK7 SK7は、NS194cm×EW140cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。内部は濃い茶色粘土層で、近世の染付磁器と中世遺物が出土し、他の土壌と時代を異にする。
- SK8 SK8は、NS230cm×EW290cmの不規則な楕円形を呈し、深さ26cmを測る。内部は茶黒色粘土層で、炭化物が混じる。自然石、焼石、中世遺物を出土する土壌である。
- SK9 SK9は、NS360cm×EW146cmの細長い楕円形を呈し、深さ46cmを測る。内部はI層が茶黒色粘土層で、炭化物が混じり、II層が黒色混土貝層である。I層より自然石、焼石、多量の中世遺物を出土し、II層からは、貝類、獣骨、魚骨が出土する。
- SK10 SK10は、調査区西端に位置し、深さ20cmを測る。内部は茶黒色粘土層で、多量の炭化物が混じる。
- 近世土壌 調査区北側で近世土壌が確認された。内部は茶色混土礫層で、近世染付磁器、唐津焼、すり鉢等が出土する。この地点より、次第に地山層が礫層へと変化している。

(3) 鍛冶炉

鍛冶炉跡はH-11区西側で、基底部が明確な炉5基、形態不明の焼土残存の炉1基を確認した。炉は、No.1・No.2・No.3が接し、隣接してNo.4・No.6とNo.5が位置する。調査区外の畑でも「耕作中、鉄クズや焼土が鋸に当たる」(安田談)とのことで、他に1～

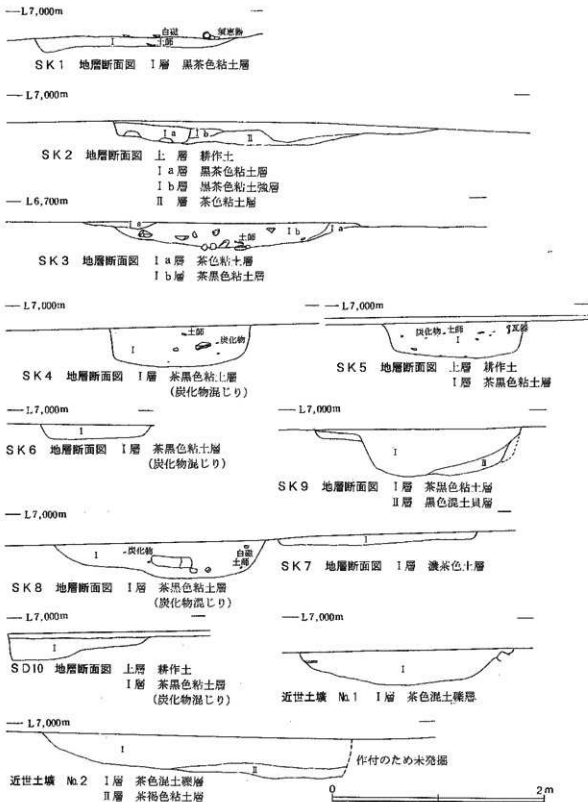


Fig 14 SK1~SK10 地層断面図

2基存在する。鍛冶工程に伴う炉と考えられ、周辺土壌からも中世遺物と鉄滓、自然石、焼石が出土する。

鍛冶炉No.1

No.1は、長軸約172cm、短軸約128cmを測る楕円形を呈する。炉は地山粘土層を掘り込み、粘土を貼り基底部を構築する。基底部外側は、約15cm～20cm程の幅で紫茶色粘土が廻る。内側は、114cm×80cmの楕円形で西側には床面から立ち上がる椀状滓が良好に確認される。調査した鍛冶炉では、最も良好に残存するため、掘り上げて保存する。

鍛冶炉No.2

No.2は、長軸約86.0cm、短軸約66.0cmを測る円形を呈し、構築方法はNo.1と同じである。基底部外側は15cm程の幅で紫茶色粘土が廻る。内側は60cm×50cmの円形で、北側には床面から立ち上がる椀状滓が確認される。床面は赤褐色の粘土で一部赤色化するが、ブロック状のかたまりとして確認される。

鍛冶炉No.3

No.3は、長軸約90.0cm、短軸約64.0cmを測る楕円形を呈し、構築方法はNo.1と同じである。基底部外側は12cm程の幅で紫茶色粘土が廻る。内側は、58cm×40cmの楕円形で、すでに鉄滓はない。床面は炉中心部がくぼみ、褐色の粘土となっている。

鍛冶炉No.4

No.4は、長軸約60.0cm、短軸約55.0cmを測る円形を呈し、構築方法はNo.1と同じである。基底部は削平を受け、床面は赤褐色の粘土で一部赤色化し、40cm×36cmの円形である。

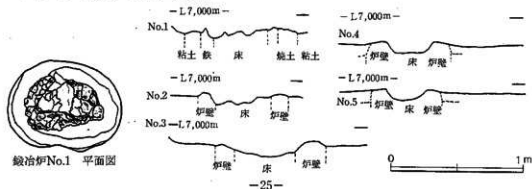
鍛冶炉No.5

No.5は、長軸約54.0cm、短軸約44.0cmを測る楕円形を呈し、構築方法はNo.1と同じである。約8cm幅で赤色粘土が残り、床からは炭化物が出土する。

鍛冶炉No.6

No.6は、大きく削平を受け、長軸約80.0cm、短軸約66.0cmを測る楕円形状に焼土が分布している。また、焼土内に炭化物がブロック状に混じり、鍛造剥片が確認され鍛冶炉と認定した。

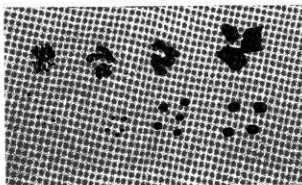
FIG 15 鍛冶炉平面図、断面図



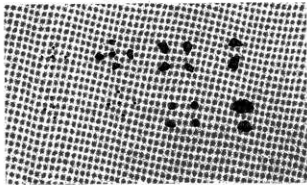
鍛冶炉No.1 平面図

№3 鍛冶炉№1~№6 出土鍛造剥片、粒状滓写真

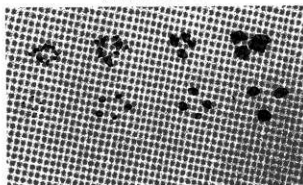
鍛冶炉№1 鍛造剥片 0.71 1.4 2.8 4
粒状滓 0.71 1.4 2.8 4 (mm)



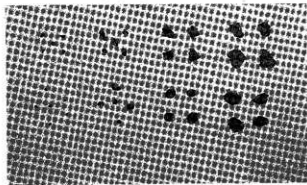
鍛冶炉№4 鍛造剥片 0.71 1.4 2.8 4
粒状滓 0.71 1.4 2.8 4 (mm)



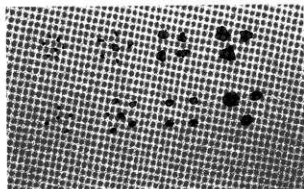
鍛冶炉№2 鍛造剥片 0.71 1.4 2.8 4
粒状滓 0.71 1.4 2.8 4 (mm)



鍛冶炉№5 鍛造剥片 0.71 1.4 2.8 4
粒状滓 0.71 1.4 2.8 4 (mm)



鍛冶炉№3 鍛造剥片 0.71 1.4 2.8 4
粒状滓 0.71 1.4 2.8 4 (mm)



鍛冶炉№6 鍛造剥片 0.71 1.4 2.8 4
粒状滓 0.71 1.4 2.8 4 (mm)

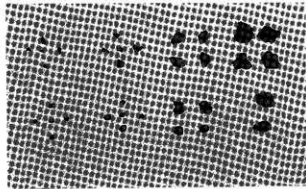
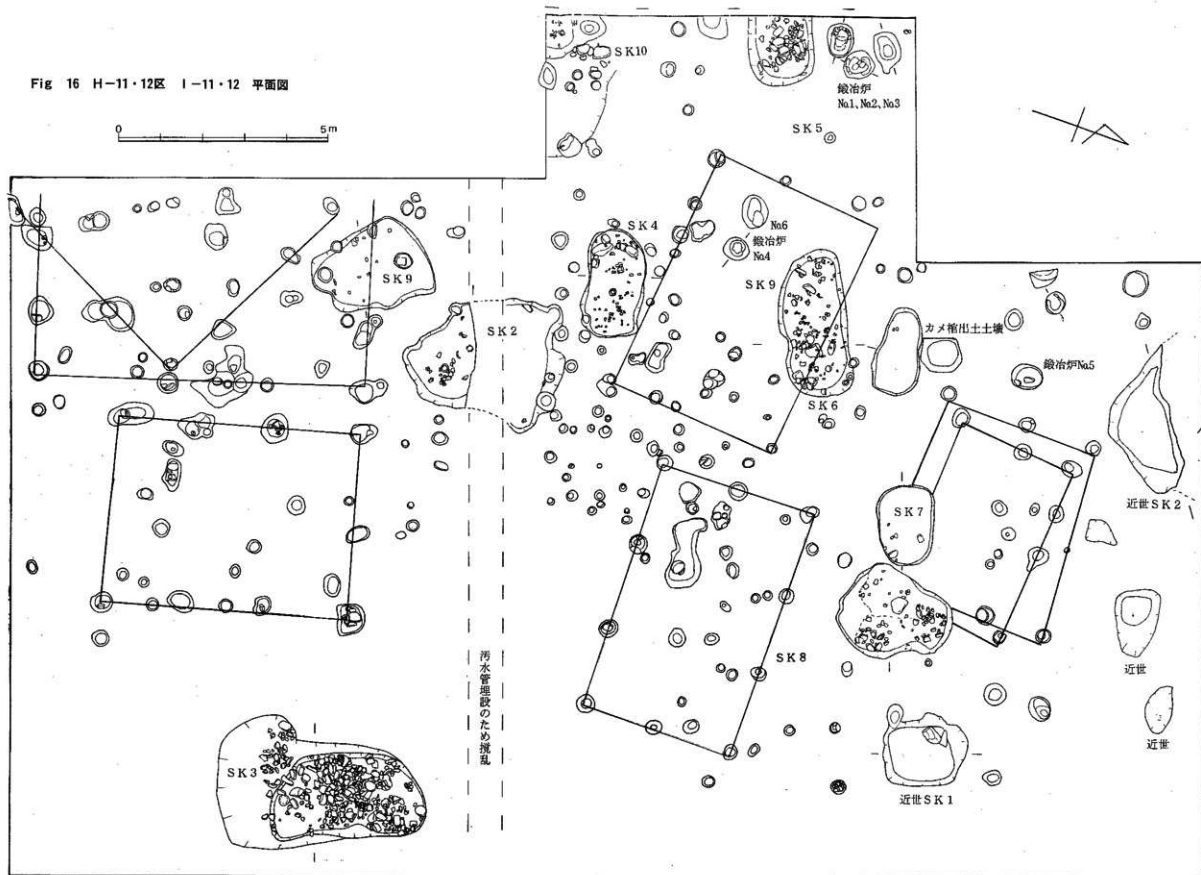


Fig 16 H-11・12区 I-11・12 平面図

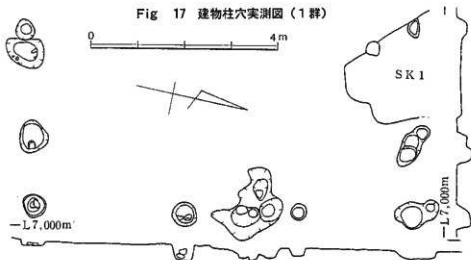


(4) 掘建柱遺構

調査区は、遺跡中央東端の4m程段落ちして海岸部に移る地点に位置する。柱穴群は、この中世の海岸線（推定）に対し、主軸を平行（または直角）にするものと、主軸を斜めに振る2群として捉えられる。柱穴は、後世に削平を受け全体のプランを知ることができない。

第1柱穴群

第1柱穴群は、海岸線に対し主軸を平行（直角）にするものである。模式的に線引きを行った状況では、東西4.20m、南北8.00mの最大プランを見ることができる。このプランの柱穴は、大形で掘り込みが明確であり、柱穴下部に礫を敷いたり、柱根を礫で固定している。最小プランは、東西4.30m、南北3.00mである。2棟が確認される。

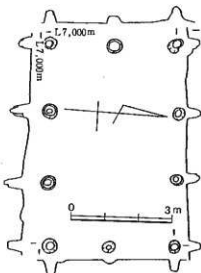


第2柱穴群

第2柱穴群は、海岸線に対し主軸を斜めに振るものである。ここでは、東西6.20m、南北3.80mのプランを見ることができる。第1柱穴群と比較して、やや小規模になるものの、数的には多く見受けられる。

これらの柱穴群は、先のSD 8の遺物出土状況から、西に80m、南に80mほど広がるものと推定される。位置的には、遺跡西側湿地帯よりゆるやかに盛り上がった海岸線に接する地点の1.2ha程である。中世の浜筒遺跡を形成する集団の、中心地を形成したものと考えられる。5棟が確認される。

Fig 18 建物柱穴実測図（2群）



V. 遺物

浜崎遺跡より出土した遺物は、縄文時代の土器片、石斧・石鏃などの石器や古墳時代から平安時代の須恵器が少量あるが、中世遺構より出土している。中世以降の遺物としては、唐津系陶器、有田系磁器が出土する。本稿では、出土遺構ごとに中世遺物を中心に記すこととする。

中世の遺物は、国内産の遺物として糸切り底をもつ土師器を中心に瓦器、須恵質土器、東播系須恵質控鉢、陶器、滑石製の石鍋片、石鏢、土鏢、木製品などがある。この内、須恵質土器（備前亀山系）、東播系須恵質控鉢（魚住系）、陶器（常滑、備前）、滑石製の石鍋片などは搬入遺物である。鉄関係では、轆の羽口と鍛冶炉に伴う鍛造薄片、粒状滓、多数の鉄滓や形態不明の鉄器が出土している。輸入陶磁器では白磁が多く、続いて青磁、青白磁と続く。白磁、青磁とも、碗の出土が多く皿は少ない。青磁では、龍泉窯系青磁と同安窯系青磁が出土し、青白磁の合子も少量出土している。また、明時代の青磁も極少量出土している。

1. 遺物の概要と分類

(1) 土師器

土師器は全て糸切り磨りで、坏が主体で皿は少量である。皿は、大形のもの和小形のものに区分される。坏は、大形の坏、中形の坏、小形の坏に区分され、形態より細分される。なお、土師器はSD8において、完形に復元できる遺物が多量に出土する。

- 坏 I-1類 大形の坏で体部が内湾する
I-2類 大形の坏で体部が直線的に立つ
I-3類 大形の坏で体部が外湾する
II-1類 中形の坏で体部が内湾する
II-2類 中形の坏で体部が直線的に立つ
II-3類 中形の坏で体部が外湾する
III-1類 小形の坏で体部が内湾する
III-2類 小形の坏で体部が直線的に立つ
III-3類 小形の坏で体部が外湾する
- 皿 I-1類 大形の皿で体部が内湾する
I-2類 大形の皿で体部が直線的に立つ
I-3類 大形の皿で体部が外湾する
II-1類 小形の皿で体部が内湾する
II-2類 小形の皿で体部が直線的に立つ
II-3類 小形の皿で体部が外湾する

(2) 瓦器（須恵質・土師質・内黒土器・黒色土器）

中世土器は、瓦質・須恵質・土師質・内黒土器・黒色土器などがあるが、ここでは便宜的にまとめて述べる。瓦器は、椀が主体で皿は少量である。なお、瓦器類の出土はSD2において、小破片の状態で出土するが、他の地区での出土は少なかった。

また、口縁部から底部まで遺存する例が少ないが、形態より浅椀、深椀、小椀、および小皿も出土しており、器種は豊富である。ここでは高台部の器形変化に重点を置いて分類する。

- 椀 I-1類 肥前型 底部から斜外方向に大きく開いて立ち上がる。
高台は細くやや高い。断面逆三角形の外方向に踏み出す形態
- I-2類 肥前型 底部から斜外方向に大きく開いて立ち上がり、底部・体部の器肉厚い。
高台は細くやや高い。断面逆三角形で小さく外方向に踏み出す形態。
- II-1類 肥後型 平坦な底部より体部が強く内弯して立ち上がる。
高台は厚く低い。内傾する断面逆台形の形態。
- II-2類 肥後型 平坦な底部より体部が強く内弯して立ち上がる。
高台は厚く低い。外傾する断面逆台形の形態。
- II-3類 肥後型 平坦な底部より体部は浅く大きく開き、強く内弯して立ち上がる。
口縁部は小さく外反し、高台は厚く低い内傾する断面逆台形の形態。
- III-1類 天草型 高脚の貼付け高台を有する形態。
- III-2類 天草型 厚い断面逆三角形の貼付け高台を有する形態。
- III-3類 天草型 細い貼付け高台を上より押しつけ、高台先端を内に倒れ込ませる。
高台は低く、潰れた形態。
- 皿 I類 小形の皿で体部が内弯する。
- II類 小形の皿で体部が直線的に立つ。
- III類 小形の皿で体部が外弯する。

(3) 東播系須恵質埴鉢

東播系須恵質埴鉢は、破片の状態で溝状遺構、土壌より出土する。口縁部の成形より3類に分類する。

- I類 口縁端部が垂直状に立つ形態。
- II類 口縁端部を上方向、あるいは下方向につまみ出す形態。つまみ出しの成形によりに3つに分類できる。
- II-1類 口縁端部を上方向につまみ出す。
- II-2類 口縁端部を下方向につまみ出す。
- II-3類 口縁端部を上下両方向につまみ出す。

Ⅲ類 体部と口縁部にきわだった差がなく、内面体部と口縁部とはほぼ直角をなす。

(4) 土師質・瓦質土器の鉢

土師質・瓦質土器の鉢は、破片の状態では溝状遺構、土壌より出土する。口縁部の成形より2類に分類する。

I類 口縁部と体部にきわだった差がない形態。

II類 口縁端部を上方向、あるいは下方向につまみ出す形態。つまみ出しの成形により2つに分類できる。

II-1類 口縁端部を上方向につまみ出す。

II-2類 口縁端部を下方向につまみ出す。

須恵質土器

須恵質土器は、壺と甕が出土する。いずれも小破片で形状は不明である。

(5) 貿易陶磁器

浜崎遺跡出土の白磁は、大多数が破片であるが、同一型式のものでも、釉色、胎土に違いが認められる。白磁は、器形によって碗、皿、壺に分類できるが、碗の出土点数が多量である。ついで、皿となり、壺の出土は非常に少なく、実測可能な遺物はない。太宰府分類を基準に、碗、皿について分類する。青磁は、器形によって碗、皿、壺、水差し、四耳壺に分類できるが、碗、皿以外は非常に少なく実測可能な遺物はない。龍泉窯系が同安窯系より多い。

白磁

碗 II類 高台は外面を垂直にし内面を斜めに削り出し、体部は内弯気味に立ち上がる。

口縁部に小さい玉縁をもつものと、玉縁のないものがある。

IV類 II類に比べ口縁部の玉縁が大きく、体部が厚い。

V類 高台は直立し、細く高い形態。

VI類 高台はやや低く、体部は開いている。内面体部上位に一条の沈線があり、内面見込に櫛目描きの花文を有する。

VII類 体部は内弯気味に立ち上がり、体部上位で外反する。口縁部に輪花がある。

VIII類 体部内面の見込部の軸を輪状にカキ取る。

IX類 口縁部の軸をカキ取る、いわゆる「口禿」のもの。

皿 II類 口縁が断面逆三角形形状を呈する。

III類 体部内面の見込部の軸を輪状にカキ取る。

IV類 内面体部を隆線で分割し、器肉は厚く、口縁部は外反する。全面に施釉

後に、底部の軸をカキ取る。

- VI類 底部をやや上げ底状にし、体部中位で屈曲し上位で内弯する。
VII類 内面見込に草花文様があり、体部中位で内弯する。
IX類 口縁部の軸をカキ取る、いわゆる「口禿」のもの。

龍泉窯系青磁

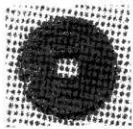
- 椀 I類 高台が断面四角形で、底部の器肉が厚い。軸は青味をおびた緑色を主体とする。
I-1類 内外面とも無文。
I-2類 内面に草花文を有する。
I-4類 内面を2本の沈線によって区切り、飛雲状文を描く。
I-5類 外面体部に蓮弁文を有する。
III類 小さい高台を持ち、全面に施釉した後に疊付部分の軸をカキ取る。
皿 I類 体部中位で屈曲し、内面見込に櫛状の施文具で花文を描く。

同安窯系青磁

- 椀 I類 台形状の厚い高台を有し、体部は高台部からやや内弯気味に立ち上がる。内面には、ヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を描く。
III類 体部外面にヘラ状の施文具で片彫り風の沈線を有する。内面にはヘラ状と櫛状による花文を描く。
青白磁 合子の身、および蓋でセットなる2点が出土。
陶器 黄釉盤で1点出土。

(6) その他の遺物

- 石鍋 石鍋は、口縁部に耳を縦に付すもの、横に付すもの、突帯状になるものがある。また、滑石製品には穿孔を持つ不明品など、多量の製品片があるが石鍋からの転用品とみられ、煤の付着、石鍋の整形加工時に外面削り痕を残すものや、鉄片が穿孔部に付着したものがある。また、転用途中の石鏝、穿孔したもの、石鍋の鏝の部分に削りを入れたもの、切り取ろうとしたものなどが認められた。
土鏝 土鏝は9点出土しているが、いずれも管状土鏝である。形態より、細身の形と長径に対し胴部が大きくなり寸づまり気味の形の、2類に分類される。
中国銭 中国の北宋で1023年より鑄造が始まる。「天聖元寶」が、SD2拡張より出土。
日本銭 近世の銭は、SD2拡張の表土層より江戸時代の「寛永通寶」が出土。



表



裏

0 3 cm

№4 中国銭「天聖元寶」写真、拓影

(7) 木製品・種子

木製品 溝状遺構より、多量の木製品、流木などが出土する。特に、SD1、SD2、SD2拡張、SD4からの出土が多い。しかし、加工痕は認められるが、用途については不明なものが多い。材質は、天草に自生する樹木である。

種子 溝状遺構より出土し、桃と梅が確認される。特に桃の種子の出土が多い。

(8) 鍛冶関連遺物

鍛冶遺物 鍛冶関連の遺構として、鍛冶炉6基を確認した。採集した土を選別した結果、鍛造剥片、粒状滓をそれぞれ確認した。また、鍛冶関連の遺構として、多量の鉄滓を出土する土壌を確認する。隣接する溝状遺構SD1、SD2では、鑪の羽口が出土しており、一定の広がりの中で鍛冶関連作業が実施されていたことが推察される。

(9) 貝類・魚骨・獣骨

貝類 浜崎遺跡では、溝状遺構SD1・2および土壌より貝類が出土している。層的には、黒色の混土層で明瞭である。魚骨、獣骨も中世遺物とともに出土する。貝類は25種類であるが、ハイガイとマガキが90%以上におよび主体となる。

魚骨 魚骨としては、タイ科とハタ科の魚骨が出土している。

獣骨 獣骨として、イノシシ、シカなどが出土する。

以上、浜崎遺跡より出土した遺物の概要と分類について述べたが、貝類については九州大学の菊地泰二先生、動物遺体については鹿児島大学の西中川駿先生、木製品については熊本大学の大迫靖雄先生、鍛冶関連遺物については新日本製鉄の大澤正己先生の各先生より遺物についての玉稿を賜り、本報告書に掲載している。また、溝状遺構と土壌より出土した炭化遺物を基に京都産業大学の山田治先生に年代測定をお願いした。前本渡市史編纂委員の鶴田倉造先生には中世本渡と天草・志岐両氏についての歴史的背景の解説を頂いている。輸入陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏、瓦器については滋賀県野洲町教育委員会の森陸氏のご教示による。

本報告書では、浜崎遺跡より出土した中世遺物について記しているが、詳細な分類や遺物の検討がなお必要であり、今後、関係諸氏のご指導とご教示を願うものである。

VI. おわりに

浜崎遺跡の置かれた環境は、有明海が入り込む遺浅の海岸に面する海岸段丘上にあり、この地形が浜崎遺跡の成立に大きな影響を与えている。出土遺物は、縄文時代から近世まで得られているが、今回の調査の主体は12世紀～14世紀、なかでも13世紀を中心とした中世の遺構と遺物である。

遺構として、遺跡を南北に縦断する溝状遺構が2本ある。中世の遺跡では検出される遺構であるが、浜崎遺跡の場合、西側が山裾から湿地帯にあたり、集落を形成するなかで必要となり構築されたのであろう。なお、2本の溝は、中程に灰色砂質層が堆積しており、出土遺物についても時代的な差はなく、同じ時期に構築されたものと考えられる。また、溝内の堆積状況より周辺に生活遺構が存在することは確実であるが、調査区域が限定されているため、今回の調査では確認することができなかった。このような中、遺跡の東側の海岸に面する地域で柱穴群、土坑、鍛冶関連遺構が検出された。柱穴は231個程であるが、掘立柱遺構は規格性のある建物であることがうかがえる。土坑からは、土師器、瓦器、白磁、青磁、貝類、獣骨、魚骨などが出土し、生活遺構がさらに広がって存在することは明らかである。鍛冶炉も6基確認されたが、隣接する性格不明遺構からは、鉄滓が多量に出土しており、まとまりのある鍛冶関連の作業が実施されていたと考えられる。

遺物としては、土師器、瓦器、白磁、青磁、石鍋、土錘、須恵器、甕の把手、木製品などが出土している。なかでも注目すべきは、中国製の白磁・青磁や東播系須恵器など遠隔地からの搬入品が多いことである。また、瓦器は「肥後型」や「肥前型」といった他地域の瓦器碗が、在地産の瓦器碗とともに出土しており、海上経由の交易ルートにより持ち込まれたものと考えられる。また、合子、鼓といった遺物は、浜崎遺跡が単なる中世の農村集落ではなかったことを示すものと理解される。

中世の浜崎遺跡の概要や性格については、「本渡市史」でも述べているが、ここに整理して記したい。

まず、遺跡の西側にある溝状遺構の位置する地域と掘立柱遺構が位置する東側地域の比較であるが、旧地形は東側がやや高く、南側より緩やかに北側にむけ高くなっていたことが確認されている。このため、浜崎遺跡は東側の微高地より、湿地帯である西側に広がって行ったと考えられる。このことは、年代測定により、掘立柱遺構周辺のSK4が溝状遺構SD2・8の炭化物より古いことと符合する。また、出土遺物では、古墳時代や9世紀代の須恵器が東側で出土することとも符合し、遺跡の中心が東側であると考えられる。

次に中世の浜崎遺跡の性格であるが、先に述べたとおり単なる中世の農村集落ではなく、出土遺物より広範囲の交易を行っていることは確実で、在地豪族の存在がうかがえるのである。ここで、志岐文書の「天草種有贖状案」を見ると、天草種有が本砥島地頭職に命ぜられ

た時期は不明であるが、貞永2年(1233)には現在の本渡から河内浦、平浦、産島、大江、高浜にいたる天草下島南部一帯を領していたことは確かである。浜崎遺跡は13世紀をピークに12世紀～14世紀にかけての遺物が出土しており、天草氏との関係を推定することができよう。また、浜崎地区には、中世の「極楽寺跡」の伝承があり、周辺には五輪塔、宝篋印塔が多数残っている。今回の調査では、寺院跡を裏付ける資料はなかったが、SD8の最下層において五輪塔の火輪が出土している。また、東側の水道工事では空風輪2基、火輪1基、道路工事では空風輪3基、火輪2基、宅地の造成では空風輪2基、火輪1基、水輪1基、土輪1基が出土していることを確認している。この他、以前の道路工事では、多数の五輪塔、宝篋印塔が出土し、道路に埋め戻したことを確認している。特に、天草種有の法名は「極楽」であり、「極楽寺跡」の伝承と一致するのである。

現在まで、天草氏と浜崎遺跡を結ぶ積極的な資料は出土していないが、浜崎遺跡の出土遺物の中心は13世紀であり、当時の有力な豪族の存在を示している。極楽寺の伝承、古文書と天草種有の法名、金石資料の出土と密集、遺跡より出土した遺構と遺物、遺跡の立地条件と交易を考え合わせた場合、天草氏と本遺跡との関係が示唆されるのである。

浜崎遺跡の調査は、これまで不明な点が多かった。天草の中世初期の楳柄の一端を解明する貴重な資料を提供してくれた。

最後に、浜崎遺跡は約4ヘクタールにおよぶ中世遺跡であるが、今回、発掘調査を実施したのは、道路工事部分を中心とした4,300㎡である。しかも、道路部分という極めて制限のある範囲の調査であり、遺跡の全体を把握するには困難であった。周辺は盛土され、新しい町づくりが進行中であるが、遺跡の中心部の造成はこれからであり、可能な限り足運びたい。また将来の大規模な工事に対しては、今回の調査を踏まえ、対応したいと考えている。

浜崎遺跡の調査にあたり、ご指導、ご協力賜りました関係者の方々に深く御礼申し上げます。また、報告書作成については、途中で体調を崩し、多くの方々にご迷惑をおかけしましたが、心よりお詫び申し上げます。今後、本報告書に十分に掲載できなかった遺物や遺構等の検討、川原田遺跡、浜崎神社、区域内の金石資料についても整理を進め、調査担当者としての任を果たしたいと思っている。

(平岡)

出土遺物観察表

SD1 I層、II層、IV層出土遺物

番号	種類	器種	層	寸法	高・内径	形態	調査	備考		
1	土器	杯	I層	口径4.3 底径3.5	高4.0 30°	体面は内面的で立ち上がり口縁部で内寄する。体面最大径4mm 底径2.4mm	内外体面 内面 外面	横ナデ 均整した凹線あり 未切り磨し	色調 灰土 物成	黄褐色 良好
2	土器	杯	I層	口径5.0 底径3.0	高2.3 45°	体面は内面的で立ち上がり口縁部で外寄する。体面最大径4mm 底径2.4mm	内外体面 内面 外面	横ナデ 色白が微しい 未切り磨し	色調 灰土 物成	褐色 少量砂粒入り やや多い
3	土器	皿	I層	口径1.2 底径1.1	高1.1 30°	体面は内面的で立ち上がり口縁部で内寄する。体面最大径4mm 底径2.4mm	内外体面 内面 外面	横ナデ 平面で中央やや内寄 未切り磨し	色調 灰土 物成	灰黄色 少量砂粒入り 良好
4	土器	杯	II層	口径1.8 底径1.0	高3.0 30°	体面は内面的で内面的に立ち上がる。体面最大径4mm 底径2.4mm	内外体面 内面 外面	横ナデ 平面で中央やや内寄 未切り磨し	色調 灰土 物成	褐色 少量砂粒入り 良好
5	土器	皿	II層	口径0.5 底径0.3	高1.5 30°	体面は内面的で立ち上がり口縁部で内寄する。体面最大径4mm 底径2.4mm	内外体面 内面 外面	横ナデ 凹色があり中央で微凸 未切り磨し	色調 灰土 物成	灰黄色 少量砂粒入り 良好
6	瓦器 (須恵瓦)	板	II層	口径5.4 台径5.3	高4.8	体面は大きく大きく開き内寄して立ち上がる。体面径7mm 高台は低く、電付高台で台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	横方向の丁字なへう磨き 凹線へう磨り、横方向のへう磨き 凹線へう磨き	色調 灰土 物成	灰黄色 良好 物成
7	瓦器 (須恵瓦)	板	II層	口径5.6	高-	体面は大きく大きく開き内寄して立ち上がる。体面径7mm 高台は低く、電付高台で台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	凹線へう磨き 凹線へう磨り、横方向のへう磨き 凹線へう磨き	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
8	瓦器 (土師製もの)	板	II層	口径5.4	高-	体面は大きく大きく開き内寄して立ち上がる。体面径7mm 高台は低く、電付高台で粗雑な台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	横方向の丁字なへう磨き 凹線へう磨り、へう磨き 凹線へう磨き	色調 灰土 物成	灰黄色 良好 物成
9	瓦器 (土師製もの)	板	II層	口径5.6	高-	体面は大きく大きく開き内寄して立ち上がる。体面径7mm 高台は低く、電付高台で粗雑な台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	へう磨き 凹線へう磨り、横方向のへう磨き へう磨き	色調 灰土 物成	灰黄色 少量砂粒入り 物成
10	瓦器 (土師製もの)	板	II層	口径5.4	高-	体面は大きく大きく開き内寄して立ち上がる。体面径7mm 高台は低く、電付高台で粗雑な台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	へう磨き 凹線へう磨り、横方向のへう磨き 凹線へう磨き	色調 灰土 物成	灰黄色 少量砂粒入り 物成
11	瓦器 (土師製黄褐色)	板	II層	口径5.6	高-	体面は大きく大きく開き立ち上がる。底面がへたる体面径7mm 高台は低く、電付高台で前面進三角	内外体面 内面 外面	凹線へう磨き 凹線へう磨り、粗雑なへう磨き 凹線へう磨き	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
12	瓦器 (須恵瓦)	板高台	II層	口径-	高-	断面は平円 高台は低く、電付高台で前面進三角	内外体面 内面 外面	へう磨き 凹線へう磨り	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
13	瓦器 (須恵瓦)	板高台	II層	口径-	高-	断面は平円 高台は低く、電付高台で台先が円に開け込む。高台外側、隅は少しもぎった形	内外体面 内面 外面	凹線へう磨き 凹線へう磨り	色調 灰土 物成	灰色 良好 物成
14	瓦器 (土師製)	板高台	II層	口径-	高-	断面は平円 高台は低く、電付高台で台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	へう磨き 凹線へう磨り、へう磨き	色調 灰土 物成	灰色 良好 物成
15	瓦器 (土師製)	板高台	II層	口径5.5	高-	断面は平円 高台は低く、電付高台で台先が円に開け込む。隅は少しもぎ込む	内外体面 内面 外面	凹色が微しい 凹線へう磨り、磨滅する	色調 灰土 物成	灰黄色 良好 物成
16	瓦器 (土師製赤褐色)	板高台	II層	口径5.7	高-	断面は平円 高台は低く、電付高台で台先が円に開け込む	内外体面 内面 外面	へう磨き 凹線へう磨り	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
17	黒色土器	板高台	II層	口径5.8	高-	断面は平円 高台は低く、電付高台で前面進三角	内外体面 内面 外面	磨滅なへう磨き 凹線へう磨り	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
18	瓦器 (土師製)	板	II層	口径14.0 台径-	高-	体面は内面的で立ち上がり口縁部が外寄する 体面径7mm	内外体面 内面 外面	磨滅なへう磨き 口縁部まで磨滅なへう磨き	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
19	瓦器 (土師製)	板	II層	口径15.0 台径-	高-	体面が内寄して立ち上がる 体面径5mm	内外体面 内面 外面	磨滅なへう磨き 凹線へう磨り、磨滅なへう磨き	色調 灰土 物成	灰黄色 良好 物成
20	黒色土器	皿	II層	口径3.5 台径3.9	高1.9 30°	体面は内面的で立ち上がり口縁部で内寄する。体面最大径5mm 底径2.4mm	内外体面 内面 外面	磨滅なへう磨き 磨滅なへう磨き 磨滅なへう磨き	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
21	東洋系須恵瓦土器 貝口縁	I層				口縁部を下方につつま出す	内面 外面	横ナデ成形 横ナデ成形	色調 灰土 物成	灰黄色 砂粒入り 良好
22	東洋系須恵瓦土器 貝口縁	II層				口縁部が垂直に立つ	内面 外面	丁字な横ナデ成形 丁字な横ナデ成形	色調 灰土 物成	褐色 砂粒入り 良好
23	東洋系須恵瓦土器 貝口縁	II層				口縁部を下方につつま出す	内面 外面	丁字な横ナデ成形 丁字な横ナデ成形	色調 灰土 物成	褐色 砂粒入り 良好
24	須恵瓦土器	口縁	II層			口縁部を左方向につつま出す	内面 外面	粗雑な横方向のへう磨り 粗雑な横方向のへう磨り	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
25	須恵瓦土器 器底部	II層				器底部付近	内面 外面	ハケ目調整 横ナデ文様	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
26	須恵瓦土器 器底部	II層				器底部付近	内面 外面	ハケ目調整 横ナデ文様	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
27	須恵瓦土器 器底部	II層				器底部付近	内面 外面	ハケ目調整 横ナデ文様	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
28	須恵瓦土器 器底部	II層				器底部付近	内面 外面	横ナデ文様 ハケ目 横ナデ文様	色調 灰土 物成	褐色 良好 物成
29	輪郭地	器底	II層			器底	内面 外面		色調 灰土 物成	褐色 良好 物成

30	土塊	瓦器	口径 3.8 底径 0.8	口径 0.3 底径 2.2	色調 赤褐色 粘土 良好 焼成 良 丁家の形状			
31	石鍋 (帯石)	口縁部	II型	口径 -	厚 1.4 底 0.4	内外面 丁家な割り調整、縁縁も丁家な割り調整 口縁部ニス付着		
32	石鍋	口縁部	II型	口径 -	厚 1.2 底 0.2	内外面 丁家な割り調整、縁縁も丁家な割り調整 裏面ニス付着あり 口縁部ニス付着		
33	石鍋	口縁部	II型	口径 0.0	厚 2.5 底 0.2	内面 遊楽な割り調整、外面 丁家な割り調整 縁縁も丁家な割り調整		
34	石鍋	底部	II型	口径 1.3 底 1.0	厚 1.3 底 0.2	内外面 丁家な割り調整 2次加工あり 底面ニス付着		
35	不明	瓦器			厚 200 g			
36	不明	瓦器			厚 179 g			
37	瓦器 (土師貨)	筒口縁	IV型	口径 0.4 口径 0.4	高 -	体面が内傾して立ち上がる。 体厚 4 mm	内外面 赤褐色へう巻き 筒縁へう割り・へう巻き	色調 黒色 灰褐色 粘土 褐色 良
38	瓦器 (土師貨 赤褐色)	筒口縁	IV型	口径 0.4 口径 0.4	高 -	断面は平型で中央部やや窪む 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 赤褐色へう巻き 筒縁へう割り	色調 黄褐色 粘土 良 褐色 あり
39	土師器 杯	IV型	口径 0.4 口径 0.4	高 3.0 口径 0.4	体面は内傾して中央部立ち上がる 体厚 0.5 mm	内外面 断面が窪しい 筒口が中央で窪む 底面が傾斜	色調 黒色 粘土 少量の粉状物 物灰 あり	
40	瓦器 筒	IV型	口径 0.0 口径 0.4	高 4.3	体面は内傾して立ち上がり口縁部が外傾する 体厚 4 mm	内外面 丁家なへう巻き 筒縁へう割り・横方向へう巻き 傾斜する	色調 黒色 粘土 良好 物灰 良好	
41	瓦器 (土師貨) 筒	IV型	口径 0.8 口径 0.2	高 6.0	体面は大きく傾き内傾して立ち上がる 体厚 7 mm	内外面 丁家なへう巻き 筒縁へう割り・横方向へう巻き 傾斜する	色調 黒色 粘土 良好 物灰 良好	
42	瓦器 筒口縁 (土師貨 赤褐色)	IV型	口径 - 口径 6.3	高 -	体面が大きく傾き立ち上がる 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 断面が窪しい 筒縁へう割り・縦断面へう巻き 遊楽なへう巻き	色調 灰褐色 粘土 良 物灰 良	
43	瓦器 (土師貨) 筒高台	IV型	口径 0.4 口径 0.4	高 -	断面は平型で中央部やや窪む 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 傾斜する 筒縁	色調 黒色 粘土 灰褐色 物灰 良	
44	瓦器 (土師貨) 筒高台	IV型	口径 - 口径 0.4	高 -	断面は平型 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 断面へう巻き 筒縁へう割り・横断面へう巻き	色調 黒色 粘土 灰褐色 物灰 良	
45	東洋系須恵土器 土師器	IV型			口縁部が垂直に立つ	内外面 横十字成形 丁家な横十字成形	色調 暗灰色 褐色 良 粘土 砂状物	
46	須恵系土器 筒口縁	IV型			口縁部を上方につまみ出す	内外面 横十字成形 横十字成形	色調 暗灰色 褐色 良 粘土 多数の粉状物	
47	須恵器 筒口縁	IV型			筒口縁部 くの字状	内外面 ハット型 筒口縁部	色調 灰褐色 褐色 良 粘土 良好	
48	石鍋 (帯石)	口縁部	IV型	口径 -	厚 1.7 底 1.0	内面 丁家な巻き調整、外面は丁家な割り調整 口縁部ニス付着		
49	石鍋 把手部	IV型	口径 -	厚 73 g		内面 丁家な巻き調整、外面は丁家な割り調整 把手部は孔を穿つ		
50	石鍋 底部	IV型	口径 -	厚 2.4 底 2.0		内面 丁家な割り調整、外面 丁家な割り調整		
51	紡錘車	IV型	口径 0.3 口径 0.8	厚 1.3 底 0.4		外面 全体に傾斜する 丁家孔を穿つ		
52	不明 (帯石部か)	IV型		厚 2.0 底 1.2				

SD2 II層出土遺物

番号	種別	器種	型	口径	高・角度	形制	調整	備考
1	土師器	杯	II型	口径 1.4 底径 0.4	高 3.0 2°	体面は内傾して立ち上がり内傾する。 体厚は大きく 5 mm 底面は平型	内外面 横十字 形 断面が窪しい 米切り難し	色調 黄褐色 粘土 少量の粉状物 物灰 無し
2	土師器	筒	II型	口径 0.3 口径 0.2	高 1.5 30°	体面は内傾して立ち上がり口縁部が内傾する。 体厚は大きく 4 mm 底面は平型	内外面 横十字 形 断面が窪しい 米切り難し	色調 黄褐色 粘土 少量の粉状物 物灰 無し
3	瓦器 (土師貨)	筒	II型	口径 0.4 口径 0.4	高 5.4+	体面は内傾して立ち上がる。口縁部が傾 体厚は大きく 5 mm 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 断面へう巻き 筒縁へう割り・横断面へう巻き 傾斜する	色調 黒色 赤褐色 粘土 良好 物灰 良好
4	瓦器 (土師貨)	筒高台	II型	口径 0.4 口径 0.4	高 -	体面は大きく傾き内傾して立ち上がる。 体厚は 6 mm 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 丁家なへう巻き 筒縁へう割り・横断面へう巻き 傾斜する	色調 灰褐色 粘土 少量の粉状物 物灰 無し
5	瓦器	筒高台	II型	口径 0.3 口径 0.4	高 -	体面は大きく傾き内傾して立ち上がる。 体厚は 8 mm 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 筒縁へう割り・横断面へう巻き 筒縁へう割り	色調 灰褐色 粘土 少量の粉状物 物灰 無し
6	瓦器 (赤色)	筒高台	II型	口径 0.4 口径 0.4	高 -	体面は内傾して立ち上がる。 体厚は 6 mm 高台は深く 幅付高台で傾斜	内外面 横断面へう巻き 筒縁へう割り・横断面へう巻き 傾斜する	色調 黒色 粘土 褐色 物灰 良好

7	瓦葺 (土葺)	栴台台	瓦葺	口径 直径 7.6	高 -	体面は強く内寄して立ち上がる。 体面厚 5 mm 高台は5mm・栴付高台で外に踏み出す	内体面 外体面 内瓦葺	密着する 密着する へう巻き・密着する	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
8	瓦葺 (土葺)	栴台台	瓦葺	口径 直径 7.2	高 -	体面は大きく開き内寄して立ち上がる。 体面厚 6 mm 高台は5mm・栴付高台で外に踏み出す	内体面 外体面 内瓦葺	密着なへう巻き 密着なへう巻き 横方向の密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
9	瓦葺 (土葺)	栴台台 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面は強く内寄して立ち上がる。 体面厚 7 mm 高台は5mm・栴付高台で前面は三角形	内体面 外体面 内瓦葺	丁寧なへう巻き 密着なへう巻き 丁寧なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
10	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で大きく外傾する 体面厚 7 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
11	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で短く外傾する 体面厚 4 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
12	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で短く外傾する 体面厚 4 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
13	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で直線的となる 体面厚 4 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
14	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で直線的となる 体面厚 9 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
15	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で短く内傾する 体面厚 6 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
16	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で短く内傾する 体面厚 6 mm	内体面 外体面	へう巻き・密着する 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
17	瓦葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	口縁部が半面直立立つ	内面 外面	横ナテ成り 横ナテ成り	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
18	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	横断面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で鋭く 下まがる。内面は直径 1 cmの平座となる	内面 外体面	先端部は丸みがあり鋭角な形状 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
19	土葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 -	高 -	横断面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で鋭く 下まがる。内面は直径 1 cmの平座となる	内面 外体面	先端部は丸みがあり鋭角な形状 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
20	石葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 1.8 直径 131	高 1.8	内面 丁寧な密着調整 外面 丁寧な密着調整 密着なへう巻き	内面 外体面	丁寧な密着調整 丁寧な密着調整	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
21	石葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 1.5 直径 165	高 1.5	内面 丁寧な密着調整 外面 丁寧な密着調整 孔を穿つ	内面 外体面	丁寧な密着調整 丁寧な密着調整 孔を穿つ	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
22	石葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 36	高 36	内外面 密着な密着し、孔を穿つ 孔には赤色の砂粒が付着する	内面 外体面	密着な密着し、孔を穿つ 密着な密着し、孔を穿つ	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
23	不明	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 1.4 直径 79	高 1.4	内面 丁寧な密着調整 外面 密着な密着し、 内面は平座で2次加工あり	内面 外体面	丁寧な密着調整 密着な密着し、 密着な密着し	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
24	石葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 8 不明	高 8					
25	石葺 (土葺)	口縁 (土葺)	瓦葺	口径 直径 7	高 7					

SD2 Ⅲ層出土遺物

番号	種類	器種	器 径	高・角度	形状	調整	備考		
1	土葺	瓦	口径 8.5 直径 6.4	高 1.4 50°	体面は角度90度で直線的に立ち上がる。 体面厚 3 mm 底面は平座	内体面 内体面 外瓦葺	横ナテ ナデ、凹凸がある 水切り無し	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
2	土葺	瓦	口径 9.4 直径 7.2	高 1.1 41°	体面は角度71度で直線的に立ち上がる。 体面厚 4 mm 底面は平座	内体面 内体面 外瓦葺	横ナテ 密着な密着し、 水切り無し	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり、 ややもろい
3	土葺	瓦	口径 10.8 直径 8.8	高 1.1 40°	体面は角度90度で直線的に立ち上がる。 体面厚 3 mm 底面は平座	内体面 外体面 内瓦葺	密着なへう巻き 密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり ややもろい
4	瓦葺 (土葺)	栴台	口径 直径 -	高 -	体面は大きく開き内寄して立ち上がる。 体面厚 5 mm 高台は5mm・栴付高台で台先がやや内側に倒れこむ	内体面 外体面 内瓦葺	密着する 密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良好
5	瓦葺	栴台	口径 直径 6.3	高 -	体面は大きく開き内寄して立ち上がる。 体面厚 5 mm 高台は5mm・栴付高台で前面は三角形	内体面 外体面 内瓦葺	密着する 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
6	黄褐色土葺 (土葺)	栴台 (内瓦)	口径 直径 -	高 -	体面は強く内寄して立ち上がる。 体面厚 7 mm 高台は5mm・栴付高台で前面は三角形	内体面 外体面 内瓦葺	丁寧なへう巻き 密着なへう巻き 丁寧なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
7	黄褐色土葺 (土葺)	栴台 (内瓦)	口径 直径 6.4	高 -	内体面が内寄して口縁部で短く外傾する 高台は5mm・栴付高台で前面は三角形	内体面	丁寧なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
8	瓦葺	栴台	口径 直径 -	高 -	体面が内寄して口縁部で短く外傾する 体面厚 8 mm	内体面 外体面	密着なへう巻き 密着なへう巻き	色調 粘土 土成	黄褐色 黄褐色 良好
9	瓦葺 (土葺)	口縁 (土葺)	口径 4.4 直径 -	高 -	体面は大きく開き内寄して立ち上がる。 体面厚 8 mm	内体面 外体面	横ナテ 横ナテ	色調 粘土 土成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良

10	瓦葺 (須賀)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面は大きく開口部内寄して立ち上がる。 体面厚5mm	内体面 外体面	東方方向の丁葺なへう置き 回転へう割り・丁葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
11	瓦葺	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚4mm	内体面 外体面	東方方向の丁葺なへう置き 東方方向の丁葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
12	瓦葺	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚5mm	内体面 外体面	縦葺なへう置き 回転へう割り・縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
13	瓦葺 (須賀)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚5mm	内体面 外体面	縦葺なへう置き 回転へう割り・縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
14	瓦葺 (須賀)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚4mm	内体面 外体面	縦葺なへう置き 回転へう割り・縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
15	瓦葺 (須賀)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がり口縁部で外寄する 体面厚4mm	内体面 外体面	縦葺なへう置き 回転へう割り・へう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
16	瓦葺 (須賀)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚6mm	内体面 外体面	縦葺なへう置き 縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
17	瓦葺 (須賀)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚5mm	内体面 外体面	縦葺なへう置き 縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色、褐色 少量の砂粒混り	良好	
18	瓦葺 (土師製)	口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が内寄して立ち上がる。 体面厚5mm	内体面 外体面	縦葺する 縦葺する	色調 粘土	灰色 砂粒混り	良好	
19	瓦葺 (土師製)	底	耳附	口径10.4 底径 6.0	高 1.5 角度35°			体面は内寄50度で立ち上がり口縁がやや外寄する 底面が中央部で窪む	内面 外面 外底面	横ナデ 横ナデ ホネナデ	色調 物灰	灰色 少量の砂粒混り	良好	
20	瓦葺 (須賀)	底	耳附	口径 8.5 底径 6.7	高 1.8 角度30°			体面は内寄50度で立ち上がり内寄する 底面は平直	内面 外面 外底面	丁葺な横ナデ 横ナデ・へう置き ホネナデ	色調 物灰	灰黄色 少量の砂粒混り	良好	
21	瓦葺 (土師製)	壁口縁	耳附	口縁台座	-	高	-	体面が垂直に立つ合わせ口の壁口縁	内面 外面	丁葺な横方向のへう置き 丁葺な横方向のへう置き	色調 粘土	褐色 良好	物灰 良好	
22	土師製土器	胴部	耳附	口縁台座	-	高	-	胴部面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で細く 下まがる。内径は底径6mmの中空となる	外面	縦面が凹みあり粗粒な成形 植物繊維混りあり	色調 粘土	黄褐色 少量の砂粒混り	物灰 良好	
23	土師製土器	胴部	耳附	口縁台座	-	高	-	胴部面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で細く 下まがる。内径は底径7mmの中空となる	外面	縦面が凹み成形 植物繊維混りあり	色調 粘土	黄褐色 少量の砂粒混り	物灰 良好	
24	土師製土器	胴部	耳附	口縁台座	-	高	-	胴部面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で細く 下まがる。内径は底径7mmの中空となる	外面	底面が平直で丁葺な成形 植物繊維混りあり	色調 粘土	黄褐色 少量の砂粒混り	物灰 良好	
25	土師製土器	胴部	耳附	口縁台座	-	高	-	胴部面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で細く 下まがる。内径は底径8mmの中空となる	外面	底面が平直で丁葺な成形 植物繊維混りあり	色調 粘土	黄褐色 少量の砂粒混り	物灰 良好	
26	石函	縁部	耳附	口縁台座	-	高	-	内面 丁葺な置き調整 外面 丁葺な削り調整 縁部も丁葺な調整						
27	石函	縁部	耳附	口縁台座	-	高	-	内面 削りか直し、孔を穿つ 外面 削りか直し、孔を穿つ						
28	石函	縁部	耳附	口縁台座	-	高	-	内面 削りか直し、孔を穿つ 外面 削りか直し、孔を穿つ						
29	不明	ボタン状	耳附	口縁台座	-	高	-	内面 削りか直し、孔を穿つ 外面 丁葺な削り調整 縁部も削りか直し						
石函部 5														
他の次第														

SD2 拡張 II 層出土遺物

番号	類別	器種	器 注	高・角度	形状	調整	備考			
1	土師器	杯	耳附 口径15.0 底径 9.2	高 3.0 54°	体面は内寄50度で直線的に立ち上がる 体面最大厚3mm 底面は平直	内体面 外体面	横ナデ ホネナデ ホネナデ	色調 粘土	褐色 少量の砂粒混り	良好
2	土師器	杯	耳附 口径13.6 底径10.2	高 3.0 70°	体面は内寄70度で立ち上がり口縁は外寄する 体面最大厚7mm 底面は平直	内体面 外体面	横ナデ ホネナデ ホネナデ	色調 粘土	褐色 少量の砂粒混り	良好
3	土師器	皿	耳附 口径 8.4 底径 6.6	高 1.3 90°	体面は内寄90度で立ち上がり内寄する。 体面最大厚3mm 底面は平直	内体面 外体面	横ナデ 削りか直し 削りか直し	色調 粘土	褐色 少量の砂粒混り	良好
4	土師器	皿	耳附 口径 8.4 底径 6.8	高 1.0 54°	体面は内寄54度で立ち上がり内寄する。 体面最大厚4mm 底面は平直	内体面 外体面	横ナデ 削りか直し 削りか直し	色調 粘土	褐色 少量の砂粒混り	良好
5	土師器	皿	耳附 口径 8.2 底径 7.0	高 1.3 45°	体面は内寄55度で立ち上がり口縁部で内寄する。 体面最大厚5mm 底面は平直	内体面 外体面	横ナデ 削りか直し 削りか直し	色調 粘土	褐色 少量の砂粒混り	良好
6	土師器	皿	耳附 口径 8.6 底径 7.4	高 1.4 33°	体面は内寄80度で垂直に立ち上がる 体面最大厚3mm 底面が凹みか直し中央部で窪む	内体面 外体面	横ナデ 凹み成形 ホネナデ	色調 粘土	褐色 少量の砂粒混り	良好
7	瓦葺 (須賀)	陶高台	耳附 口縁台座 7.4	高 -	体面は大きく開口部内寄して立ち上がる。 体面厚8mm 高台は平直、縁部高台で内寄り出す	内体面 外体面 内底面	縦葺なへう割り 縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色 良好	物灰 良好
8	瓦葺 (須賀)	陶高台	耳附 口縁台座 7.4	高 -	体面は大きく開口部内寄して立ち上がる。 体面厚8mm 高台は平直、縁部高台で内寄り出す	内体面 外体面 内底面	縦葺なへう割り 縦葺なへう置き	色調 粘土	褐色 良好	物灰 良好

9	瓦葺 (須置葺)	横高台	瓦葺	口径 台径 7.0	高	—	体面内内側で立ち上がる。 体面厚 6mm 高さ6mm/両面を外に踏み出す	内体面 外体面 内体面	— — 横方向の丁寧なへう磨き	色調 灰黒色 灰色 新土 良好 成成
10	瓦葺 (土留葺)	横高台	瓦葺	口径 台径	高	—	高台は横高台を外に踏み出す	内体面 外体面	— 横方向の丁寧なへう磨き	色調 灰黒色 灰色 新土 少量砂粒混り
11	瓦葺 (須置葺)	横口縁	瓦葺	口径19.9 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。 体面厚 7mm	内体面 外体面	横方向の丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 成成 良好
12	瓦葺 (須置葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。 体面厚 7mm	内体面 外体面	横方向の丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰色 黒色 新土 成成 良好
13	瓦葺 (須置葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面は強く内側で立ち上がる。 体面厚 6mm	内体面 外体面	横方向の丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 成成 良好
14	瓦葺 (須置葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。 体面厚 5mm	内体面 外体面	横方向の丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 成成 良好
15	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。口縁にカーボン付着 体面厚 4mm	内体面 外体面	磨滅する 磨滅する	色調 灰色 新土 少量砂粒混り
16	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。口縁にカーボン付着 体面厚 5mm	内体面 外体面	丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰色 新土 少量砂粒混り
17	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。口縁にカーボン付着 体面厚 4mm	内体面 外体面	磨滅する 磨滅する	色調 灰色 新土 少量砂粒混り
18	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。口縁にカーボン付着 体面厚 4mm	内体面 外体面	丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 良好
19	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。口縁にカーボン付着 体面厚 4mm	内体面 外体面	丁寧なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 良好
20	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。内面黒色 体面厚 4mm	内体面 外体面	磨滅なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰黒色 新土 少量砂粒混り
21	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径13.5 台径	高	—	体面内内側で立ち上がる。 体面厚 5mm	内体面 外体面	横ナデ 横ナデ	色調 黄色 新土 少量砂粒混り
22	瓦葺 (須置葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がり口縁部で強く外磨する 体面厚 5mm	内体面 外体面	磨滅なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 良好
23	瓦葺 (須置葺)	横口縁	瓦葺	口径 台径	高	—	体面内内側で立ち上がり口縁部で強く外磨する 体面厚 4mm	内体面 外体面	磨滅なへう磨き 回転へう磨り・へう磨き	色調 灰白色 新土 良好
24	瓦葺 (土留葺)	横口縁	瓦葺	口径13.5 台径	高	—	体面内内側で立ち上がり口縁部で強く外磨する 体面厚	内体面 外体面	磨滅する 磨滅は磨滅する・カーボン付着	色調 灰色 新土 良好
25	瓦葺 (須置葺)	瓦	瓦葺	口径10.0 底径 7.5	高 1.9 39°	—	体面は角度55度で立ち上がり口縁でやや内磨する 体面厚4mm 底面は平面	内体面 内体面 外体面	横ナデ ナデ成形 糸切り磨し	色調 灰黒色 新土 成成
26	瓦葺 (須置葺)	瓦	瓦葺	口径 8.8 底径 6.4	高 2.0 36°	—	体面は角度55度で立ち上がり口縁でやや内磨する 体面厚4mm 底面は平面	内体面 内体面 外体面	磨滅なへう磨き 磨滅なへう磨き 糸切り磨し・丁寧なへう磨き	色調 黄白色 新土 良好
27	瓦葺 (土留葺)	瓦	瓦葺	口径 9.6 底径 6.9	高 1.8 30°	—	体面は角度45度で立ち上がり口縁でやや内磨する 体面厚4mm 底面は平面	内体面 内体面 外体面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 灰黒色 新土 成成
28	瓦葺 (須置葺)	瓦	瓦葺	口径16.0 底径 7.2	高 1.7 41°	—	体面は角度41度で立ち上がり口縁でやや内磨する 体面厚4mm 底面は平面	内体面 内体面 外体面	磨滅なへう磨き 磨滅なへう磨き 丁寧なへう磨き	色調 灰色 黒色 新土 良好
29	土留質土葺 葺	葺	瓦葺	口径10.4 台径 6.0	高 3.8	—	体面内内側で口縁部が大きく外磨する 体面厚 7mm	内体面 外体面	横ナデ 回転へう磨り・へう磨き	色調 黄白色 新土 少量砂粒混り
30	土留質土葺 葺	葺	瓦葺	口径	高	—	SD 2 瓦葺 21と同じ			
31	土留質土葺 葺	葺	瓦葺	口径10.4	高 2.3					
32	須置質土葺 葺	葺	瓦葺	口径 台径 18mm	高	—	口縁部は小断面状に立つ。口縁は平直 体面厚 18mm	内面 外面	— 斜削が強い	色調 灰色 新土 2mmの砂粒混り
33	須置質土葺 葺	葺	瓦葺	口径 台径	高	—	口縁部は小断面状に立つ。口縁は平直 体面厚 8mm	内面 外面	— へう磨り	色調 灰色 新土 成成 良好
34	土留質土葺 葺	葺	瓦葺	口径 台径	高	—	横断面は丸みを帯びた四角形を呈し先端部で鋭く なります。内面は楔形で12mmの中空となる	外面	表面は丁寧な成形	色調 青褐色 新土 砂粒混り
35	土留質土葺 葺	葺	瓦葺	口径 台径	高	—	横断面は四角形を呈し先端部で鋭くすぼまる。 内面は直径1cmの中空となる	外面 外面	表面は凹凸があり粗面な成形	色調 青褐色 新土 砂粒混り
36	石溝 (小型)	瓦葺		厚 0.8 重 60g			内面 丁寧な削り調整 外面 丁寧な削り調整 底面にスチ付着 両面調整する			
37	石溝 (大型)	口縁	瓦葺	厚 2.4 重 584g			内面 丁寧な削り調整 外面 丁寧な削り調整 孔を穿つ 2次加工あり			
38	石溝	口縁	瓦葺	厚 1.7 重 125g			内面 丁寧な削り調整 外面 丁寧な削り調整 把手の穴は浅めあり			
39	石溝	把手	瓦葺	厚 — 重 105g			表面 丁寧な削り調整			
40	石溝	把手	瓦葺	厚 — 重 40g			表面 丁寧な削り調整			
	石溝部品 2	瓦葺								

41	罎	頸口	Ⅱ層		頸口内部の中心
42	罎	頸口	Ⅱ層		頸口内部の端
43	罎	頸口	Ⅱ層		頸口内部の先端で熱のため変色
図等 2					
母子 西 桃					

SD 2 拡張 Ⅲ層出土遺物

番号	種類	器種	層	径	高・角度	形態	副産	備考		
1	土師器	環	Ⅲ層	口径16.3 底径9.8	高3.1 30°	体部は角筒状で直線的に立ち上がりやや内湾する。体部最大径4mm 底面は平坦で中央部がやや盛り上がる	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	褐色 少量の砂粒混じり ややもろい
2	土師器	環	Ⅲ層	口径17.4 底径12.0	高3.0 56°	体部は角筒状で直線的に立ち上がる。体部最大径5mm 底面は平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ 横方向のナデ 米切り難し・磨滅する	色調 灰土 地成	黄褐色 砂粒混じり ややもろい
3	土師器	環	Ⅲ層	口径16.4 底径10.8	高3.1 47°	体部は角筒状で直線的に立ち上がり内湾する。体部最大径5mm 底面はやや膨凸がある	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
4	土師器	環	Ⅲ層	口径15.4 底径10.4	高2.6 44°	体部は角筒状で直線的に立ち上がり内湾する。体部最大径5mm 底面は平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し・磨滅する	色調 灰土 地成	褐色 少量の砂粒混じり ややもろい
5	土師器	環	Ⅲ層	口径14.8 底径9.8	高2.4 30°	体部は角筒状で直線的に立ち上がる。体部最大径5mm 底面は中央部が膨凸	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	褐色 少量の砂粒混じり ややもろい
6	土師器	皿	Ⅲ層	口径10.0 底径7.4	高1.4 44°	体部は角筒状で直線的に立ち上がる。体部最大径4mm 底面は平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
7	土師器	皿	Ⅲ層	口径10.0 底径8.1	高1.6 52°	体部は角筒状で直線的に立ち上がる。体部最大径4mm 底面は平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
8	土師器	皿	Ⅲ層	口径10.0 底径7.4	高1.4 30°	体部は角筒状で直線的に立ち上がる。体部最大径4mm 底面は中央部が膨凸	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	灰色 黄褐色 良
9	土師器	皿	Ⅲ層	口径9.6 底径7.5	高1.2 42°	体部は角筒状で直線的に立ち上がり器高は低い。体部最大径4mm 底面は平坦で丁字状成形	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し	色調 灰土 地成	褐色 少量の砂粒混じり 物成 良
10	土師器	皿	Ⅲ層	口径9.4 底径6.8	高1.4 58°	体部は角筒状で直線的に立ち上がる。体部最大径4mm 底面は平坦で丁字状成形	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し・磨滅する	色調 灰土 地成	褐色 少量の砂粒混じり 物成 良
11	土師器	皿	Ⅲ層	口径10.3 底径8.2	高1.8 52°	体部は角筒状で直線的に立ち上がり器高は低い。体部最大径5mm 底面は平坦で丁字状成形	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し・磨滅する	色調 灰土 地成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
12	土師器	皿	Ⅲ層	口径8.4 底径7.4	高1.0 15°	体部は角筒状で直線的に立ち上がり器高は低い。体部最大径4mm 底面は平坦で中央部が膨凸	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 米切り難し・磨滅する	色調 灰土 地成	灰褐色 少量の砂粒混じり 良
13	瓦器 (灰青)	瓶	Ⅲ層	口径12.5 台径4.5	高4.7	器部は平皿で体部は内湾して立ち上がる。器高14mm 高台は器・瓶付高台で外に張り出す	内外体面 内底面 外底面	へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 良
14	瓦器 (灰青)	瓶	Ⅲ層	口径15.4 台径4.8	高4.9	器部は平皿で体部は内湾して立ち上がる。器高15mm 高台は器・瓶付高台で直線に立つ	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 良
15	瓦器 (外黒色)	瓶口縁	Ⅲ層	口径台径 - 台径 -	高 -	体部が内湾して立ち上がる。体部厚5mm	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 地成 良
16	瓦器 (灰青)	瓶口縁	Ⅲ層	口径台径 - 台径 -	高 -	体部が内湾して立ち上がる。体部厚6mm	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 地成 良
17	瓦器 (内黒色)	瓶口縁	Ⅲ層	口径台径 - 台径 -	高 -	体部が内湾して立ち上がる。口唇部が深い。体部厚4mm	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 地成 良
18	瓦器 (土師質)	瓶口縁	Ⅲ層	口径14.8 台径 -	高 -	体部が内湾して立ち上がり口唇部が外寄する。体部厚6mm	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	灰褐色 少量の砂粒混じり 良
19	瓦器 (灰青)	瓶口縁	Ⅲ層	口径台径 - 台径 -	高 -	体部が内湾して立ち上がり口唇部が外寄する。体部厚6mm	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 地成 良
20	瓦器 (灰青)	瓶口縁	Ⅲ層	口径15.2 台径 -	高 -	体部が内湾して立ち上がる。体部厚6mm	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 地成 良
21	瓦器 (土師質)	瓶高台	Ⅲ層	口径台径 - 台径 6.9	高 -	高台は器・瓶付高台で外に張り出す	内外体面 内底面 外底面	横方向の丁字状へら磨き へら磨き	色調 灰土 物成	灰褐色 地成 良
22	瓦器 (灰青)	瓶高台	Ⅲ層	口径台径 - 台径 6.5	高 -	高台は器・瓶付高台で外に張り出す	内外体面 内底面 外底面	横方向の丁字状へら磨き へら磨き	色調 灰土 物成	灰褐色 良好 地成 良
23	瓦器 (土師質)	瓶高台	Ⅲ層	口径台径 - 台径 7.2	高 -	高台は器・瓶付高台で外に張り出す	内外体面 内底面 外底面	横方向の丁字状へら磨き へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 良好 地成 良
24	瓦器 (土師質)	瓶高台	Ⅲ層	口径台径 - 台径 6.7	高 -	高台は器・瓶付高台で外に張り出す	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き 器部へら磨き	色調 灰土 物成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
25	褐色土器 (土師質・内黒)	瓶高台	Ⅲ層	口径台径 - 台径 -	高 -	高台は器・瓶付高台で直線に立つ 断面は三角形	内外体面 内底面 外底面	器部へら磨き カーボン付着 へら磨き	色調 灰土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり 良

26	灰色土器 (土師器・内蔵)	高台	口径 台径	- 高	-	高台は肩付高台で表面に立つ 断面は三角形	内蔵部 高台部	数珠なへら磨き・カーボン付着 ハナ目	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
27	灰色土器 (土師器・内蔵)	高台	口径 台径	- 高	-	高台は肩付高台で表面に立つ・断面は楕円	内蔵部 高台部	数珠なへら磨き・カーボン付着 ハナ目	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
28	瓦器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	6.7	高台は彫・船付高台で表面に立つ・断面は楕円	内蔵部 高台部	磨滅する ハナ目	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
29	瓦器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	5.2	体面が大きく大きく開き内蔵して立ち上がる 高台は彫・船付高台で台先が円に倒れこむ	内蔵部 外体部	磨滅する・へら磨き磨あり 凹線へら磨り・へら磨き	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
30	瓦器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	6.5	体面が大きく大きく開き内蔵して立ち上がる 高台は彫・船付高台で台先が円に倒れこむ	内蔵部 外体部	横方向の丁寧なへら磨き 凹線へら磨り・へら磨き	色調 粘土	黄灰色 良	地味 良
31	瓦器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	5.6	体面が大きく大きく開き内蔵して立ち上がる 高台は彫・船付高台で台先が円に倒れこむ	内蔵部 外体部	磨滅する 凹線へら磨り	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
32	瓦器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	-	体面が大きく大きく開き内蔵して立ち上がる 高台は彫・船付高台で台先が円に倒れこむ	内蔵部 外体部	横方向の丁寧なへら磨き 凹線へら磨り・へら磨き	色調 粘土	黄灰色 良	地味 良
33	瓦器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	-	体面が大きく大きく開き内蔵して立ち上がる 高台は彫・船付高台で台先が円に倒れこむ	内蔵部 外体部	横方向の丁寧なへら磨き 凹線へら磨り・へら磨き	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
34	瓦器 (土師器)	高台	口径10.1 台径 7.4	- 高	1.9 32°	体面は内蔵状態で立ち上がり内蔵する 体面最大厚 3mm 断面は平直	内外体部 内蔵部 外蔵部	横方向の丁寧なへら磨き 丁寧なへら磨き 丁寧なへら磨き 丁寧なへら磨き	色調 粘土	灰色 少量砂粒混り 良好	地味 良
35	瓦器 (土師器)	高台	口径10.2 台径 8.2	- 高	1.9 38°	体面は内蔵状態で立ち上がり内蔵する 体面最大厚 3mm 断面は平直	内外体部 内蔵部 外蔵部	横方向の丁寧なへら磨き 丁寧なへら磨き 丁寧なへら磨き	色調 粘土	灰色 少量砂粒混り 良好	地味 良
36	土師器 (土師器)	高台	口径 台径	- 高	-	断面は平直で四角形を呈し先端部で縮く すぼまる。内蔵は断面で10mmの中空となる	外蔵部	断面は丁寧な成形	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
37	土師器	高台	口径 台径	4.3 1.3	高さ 傾斜	0.4 7.8	色調	黄灰色 粘土	砂粒混り	地味 良	
38	石皿(小)	口縁	口径	1.3	高さ	0.3	内面	多量の煤が付着 外周	表面凹凸が激しい 石灰質が混入		
39	石皿	口縁	口径	0.8	高さ	0.2	内面	丁寧な磨き調整	外面	丁寧な磨り調整	
40	石皿(大)	口縁	口径	1.0	高さ	0.2	内面	丁寧な磨き調整	外面	丁寧な磨り調整	
41	石皿	口縁	口径	2.4	高さ	0.2	内面	多量の煤が付着 石灰質が混入	外面	丁寧な磨り調整	
42	石皿	口縁	口径	1.0	高さ	0.2					
43	底石	口縁	口径	1.0	高さ	0.2					
44	輪	口縁	口径	5.6	外径	13.6					
45	輪	口縁	口径	5.6	外径	13.6					
46	輪	口縁	口径	5.6	外径	13.6					
47	輪	口縁	口径	5.6	外径	13.6					

SD2 井戸遺構内出土遺物

番号	類別	器種	形	径	高・角度	形態	調整	備考				
1	土師器	口縁	口径	台径	- 高	1.1	体面は内蔵状態で立ち上がる。 体面厚5mm	内体部 外体部	十字形 十字形	色調 粘土	褐色 少量砂粒混り	地味 良
2	瓦器	高台	口径	台径	- 高	6.4	内蔵部が平直でやや中央が盛り上がる 高台は彫・船付高台で表面に立つ・断面は三角形	内蔵部	丁寧なへら磨き	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
3	白磁	高台	口径	台径	- 高	-	体部下位まで磨滅する			色調 釉	灰白色 濃い	地味 良

SD3 IV出土遺物

番号	類別	器種	形	径	高・角度	形態	調整	備考				
1	土師器	口縁	口径	台径	- 高	0.0 6.2	体面は内蔵状態で立ち上がり口縁部で内蔵する。 体面最大厚 4mm 断面は平直	内外体部 内蔵部 外蔵部	横ナメ 十字形で磨滅する 横ナメ磨り	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
2	灰土器	口縁	口径	台径	- 高	1.0 0.4	断面は平直	内蔵部 外蔵部	磨滅する 磨滅する	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
3	灰土器	口縁	口径	台径	- 高	1.0 0.4	断面は平直	内蔵部 外蔵部	ハナ目調整 格子文様	色調 粘土	黄灰色 少量砂粒混り	地味 良
4	石皿	口縁	口径	台径	- 高	1.0 0.4	内面	磨り調整	石灰質が混入 スズ付着			

SD4 Ⅲ層出土遺物

番号	類別	器種	層	寸法	高・角度	形態	調査	備考		
1	土器器	杯	Ⅲ層	口径12.8 底径7.3	高2.0 50°	体面は角形54度で立ち上がり口縁部で外湾する。 体面最大径4mm 底面は平坦である	内外体面 内体面 外体面	横ナド 中央部がやや盛り 上がり難し	色調 灰土 褐色 良	黄白色 少量砂状混り 物成
2	土器器	皿	Ⅲ層	口径7.9 底径6.4	高1.0 57°	体面は角形57度で立ち上がり器高は低い 体面最大径4mm 底面は平坦である	内外体面 内体面 外体面	横ナド 中央部がやや盛り上がる 糸切り難し	色調 灰土 褐色 良	黄白色 少量砂状混り 物成 ややもろい
3	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径	高 -	高台は高さ1.5cm台高がやや外に出る	内体面 外体面	壺底なへう巻き	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
4	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径	高 -	底面は平坦・壺底する 高台は高さ1.5cm台高で壺底に立つ	内体面 外体面	壺底する	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
5	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径	高 -	底面は平坦・体面は角形 高台は高さ1.5cm台高で壺底に立つ	内体面 外体面	壺底する	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
6	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径	高 -	底面は平坦 高台は高さ1.5cm台高で壺底に立つ、断面は三角形	内体面 外体面	丁字なへう巻き	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
7	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径	高 -	底面は平坦で 高台は高さ1.5cm台高で台先が内に倒れ込む	内体面 外体面	丁字なへう巻き 壺底なへう巻き	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
8	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径	高 -	体面は角形57度 体面厚5mm	内体面 外体面	壺底なへう巻き 壺底なへう巻き	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
9	瓦器	皿	Ⅲ層	口径8.8 台径8.8	高1.2 45°	体面は角形45度で立ち上がり内湾する 体面最大径2mm 底面は平坦である	内外体面 内体面 外体面	丁字ナド成形 やや内側がある・丁字ナド成形 糸切り難し	色調 灰土 褐色 良	灰色 少量砂状混り 物成 悪い
10	東洋系須恵器土器 鉢口縁	Ⅲ層				口縁部を上方向につまみ出す	内面 外面	横ナド成形 横ナド成形	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
11	東洋系須恵器土器 鉢口縁	Ⅲ層				口縁部が丸み上方向につまみ出す	内面 外面	横ナド成形 横ナド成形	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
12	東洋系須恵器土器 鉢口縁	Ⅲ層				口縁部を上方向につまみ出す	内面 外面	丁字な横ナド成形 丁字な横ナド成形	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
13	須恵器土器 鉢口縁	Ⅲ層				口縁部	内面 外面	ハケ目調整 格子文様	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
14	須恵器土器 壺底	Ⅲ層				壺底部	内面 外面	ハケ目調整 格子文様	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
15	須恵器	皿							色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成
16	石罫 (滑石)	口縁部	Ⅲ層	口径 -	厚 0.8 重量 95g	内外面 丁字な割り調整、縁も丁字な割り調整 口縁部で湾くなる				
17	石罫 壺底	Ⅲ層	口径 -	厚 変量 重量 g	内外面 丁字な割り調整、縁も丁字な割り調整 底面はスス付					
18	石罫 口縁部	Ⅲ層	口径12.0	厚 2.5 重量 9g	内外面 丁字な割り調整 2次加工あり スス付					
19	石罫 体面	Ⅲ層		厚 1.3 重量 8g	底面に					
20	石罫 体面	Ⅲ層		厚 変量 重量 g						
21	石罫 体面	Ⅲ層		厚 変量 重量 g						
22	不明	Ⅲ層		厚 変量 重量 g						

SD5 Ⅲ層出土遺物

番号	類別	器種	層	寸法	高・角度	形態	調査	備考		
1	瓦器 (土師製)	陶高台	Ⅲ層	口径 台径7.2	高 -	高台は高さ1.5cm台高で壺底面に立つ	内体面 外体面	丁字なへう巻き 壺底なへう巻き	色調 灰土 褐色 良	灰色 少量砂状混り 物成
2	東洋系須恵器土器 鉢口縁	Ⅲ層				口縁部が内湾状に立つ	内面 外面	横ナド成形 丁字な横ナド成形	色調 灰土 良	灰色 少量砂状混り 物成

SD6 I層、II層、V層出土遺物

番号	類別	器種	層	寸法	高・角度	形態	調査	備考		
1	土器器	杯	I層	口径12.8 底径7.3	高3.1 50°	体面は角形54度で立ち上がり内湾する。 体面最大径4mm 底面は角形54度で立ち上がり口縁が湾く 外湾する。体面最大径7mm 底面は平坦である	内外体面 内体面 外体面	横ナド 中央部がやや盛り上がる 糸切り難し	色調 灰土 褐色 良	黄白色 少量砂状混り 物成
2	土器器	杯	Ⅱ層	口径12.8 底径7.3	高3.1 54°	体面は角形54度で立ち上がり口縁が湾く 外湾する。体面最大径7mm 底面は平坦である	内外体面 内体面 外体面	横ナド 中央部がやや盛り上がる 糸切り難し	色調 灰土 褐色 良	黄白色 少量砂状混り 物成
3	土器器	皿	Ⅱ層	口径8.7 底径6.4	高1.7 52°	体面は角形52度で立ち上がり内湾する。 体面最大径4mm 底面は平坦である	内外体面 外体面	横ナド 糸切り難し	色調 灰土 褐色 良	灰色 少量砂状混り 物成

4	土師器	皿	V形	口径 6.6 底径 6.5	高 1.8 寸	体部は角張り度で立ち上がり内寄する。 体底最大径 4mm 底面平坦とあり厚い。	内外体面 外面	横ナズ 糸切り難し	色調 粘土 物成	灰色 少砂質	良
5	瓦器 (土師器)	椀高台	V形	口径 台径	高 -	高台は斜付高台で後面に立つ。新断面三角形	内体面 外体面	丁家なへう器き 横ナズ成形	色調 粘土	灰青色 物成 良 少砂質	良
6	東洋系須恵質土器 钵体部	鉢	凹形	口径 台径	高 -	内面はへうで丸縁を興む	内面 外面	へう成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰青色 物成 良 少砂質	良
7	瓦器土器	鉢口縁	凹形	口径 台径	高 -	口縁部が後面に立つ。内・外面は黒色で内面はへうで丸縁を興む	内面 外面	へう成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
8	瓦器土器	鉢口縁	凹形	口径 台径	高 -	口縁部が後面に立つ。内・外面は黒色で内面はへうで丸縁を興む。全体に染黒する	内面 外面	へう成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
9	須恵質土器	钵体部	凹形	口径 台径	高 -	體部付近 内面は染黒が濃しい	内面 外面	- 格子文様	色調 粘土	灰色 物成 良	良
10	須恵質土器	鉢口縁	凹形	口径 台径	高 -	口縁は平円で口縁部が丸縁となる 頸部は長く頸部が細ら心で	内面 外面	-	色調 粘土	小豆色 物成 良 少砂質	良
11	石罎 (石石)	口縁部	凹形	口径 -	厚 1.2 寸 底径 8.5	内外面 丁家なへう調整 口縁部で厚くなる					
12	石罎	底面	凹形	口径 -	厚 8.5	内外面 丁家なへう調整、縁はも丁家なへう調整					

SD8 II層出土遺物

番号	種類	器種	形	口径	底径	高	高・角度	形態	調整	備考		
1	瓦器 (須恵質)	椀高台	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部は内寄して立ち上がる。 体底径 6mm 高台は斜付高台で後面に立つ。新断面三角形	内外体面 外体面	丁家なへう器き 横ナズ成形・横ナズ成形のへう器き 横ナズ成形のへう器き	色調 粘土 物成	灰色 良 少砂質	良
2	瓦器 (土師器)	椀高台	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部は広く大きく開き内寄して立ち上がる。 体底径 5mm 高台は斜付高台で内傾する	内外体面 外体面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土 物成	灰色 良 少砂質	良
3	東洋系須恵質土器 鉢口縁	鉢	凹形	口径 台径	高 -	高 -	口縁部を上方方向につまみ出す	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰青色 物成 良 少砂質	良
4	東洋系須恵質土器 鉢口縁	鉢	凹形	口径 台径	高 -	高 -	底面から大きく開き蓋縁的に立ち上がる。	内面 外面	調整する 横ナズ成形	色調 粘土	灰青色 物成 良 少砂質	良
5	東洋系須恵質土器 鉢口縁	鉢	凹形	口径 台径	高 -	高 -	底面から大きく開き蓋縁的に立ち上がる。	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
6	瓦器土器	鉢	凹形	口径 台径	高 10.3	高 10.3	底面から大きく開き蓋縁的に立ち上がる。 口縁部が後面に立つ	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
7	瓦器土器	鉢	凹形	口径 台径	高 -	高 -	口縁部を上方方向につまみ出す	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
8	瓦器土器	鉢口縁	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部付近	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
9	須恵質土器	钵体部	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部付近	内面 外面	横ナズ成形 格子文様	色調 粘土	灰色 物成 良	良
10	須恵質土器	鉢口縁	凹形	口径 台径	高 -	高 -	口縁部	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	小豆色 物成 良 少砂質	良
11	須恵質土器	钵体部	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	小豆色 灰白色 良 少砂質	良
12	須恵質土器	钵体部	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	小豆色 黄褐色 良 少砂質	良
13	須恵質土器	钵体部	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	小豆色 灰色 良 少砂質	良
14	石罎	口縁部	凹形	口径 台径	厚 2.0 寸 底径 14.0	厚 2.0 寸 底径 14.0	内面 丁家なへう調整 外面 丁家なへう調整 外面にスス行跡					
15	鉄製	釘	凹形	口径 台径	高 -	高 -	全面が錆びる					
16	磚	井口	凹形	口径 内径	厚 2.6	厚 2.6	先端が灰色 1mm-4mmの石実・雲母混り 薄茶色					
17	瓦片等	瓦片	凹形	口径 台径	高 -	高 -	破片付 口縁部で黒化が濃しい					

SD8 IV層出土遺物

番号	種類	器種	形	口径	底径	高	高・角度	形態	調整	備考		
1	瓦器 (土師器)	椀高台	凹形	口径 台径	高 -	高 -	体部は調整する 高台は斜付高台で後面に立つ。新断面三角形	内外体面 内体面	調整する 調整する	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
2	瓦器 (須恵質)	椀高台	凹形	口径 台径	高 -	高 -	底面が中央部がやや平円 高台は斜付高台で外に傾く出す	内体面	横ナズ成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
3	瓦器	鉢口縁	凹形	口径 台径	高 -	高 -	口縁部は内寄する	内面 外面	丁家なへう器き へう成形	色調 粘土	灰色 物成 良 少砂質	良
4	東洋系須恵質土器 鉢口縁	鉢	凹形	口径 台径	高 -	高 -	口縁部を上方方向につまみ出す 口縁部が染色	内面 外面	横ナズ成形 横ナズ成形	色調 粘土	灰青色 物成 良 少砂質	良

5	瓦葺土器 こね鉢底部	IV層	口径一 底径一	高 一	縁部より角度50度で直線状に立ち上がる	内面 外面	縁部は粘土質によるかき目 横ナリ成形	色調 粘土	黄灰色 褐色 砂粒混じり	良
6	須恵質土器 甕鉢部	IV層	口径一 底径一	高 一	体部付近	内面 外面	ハケ目 ヘラ文様	色調 粘土	灰色 褐色 砂粒混じり	良
7	土師器 鉢部	IV層	口径一 口径 口径 6.2	高 一	縁部が垂直に立ち上がる	内面 外面	一 横ナリ成形	色調 粘土	褐色 褐色 砂粒混じり	良
8	土師	IV層	口径 3.5 口径 3.8	高さ 0.3 高さ 2g	色調 赤褐色 粘土 良好 物成 良					
9	石皿	肥后層	口径一 底径一	厚 2.6 重量 20g	丁寧な削り調整					
10	石皿	鉢部	IV層	口径一 底径一	厚 1.8 重量 30g	内面 丁寧な削り調整 外面 丁寧な削り調整				
	不明	2点	IV層							
11	種	封口	IV層	口径 7.5 口径 3.5	厚 2.2 重量 8g	羽口先端 色調 灰色 赤褐色 円筒状 粘土 1mm~5mmの石英粒混じり				
	砂事	4点	IV層							
	種の種子	IV層								

SD8 VII層出土遺物

番号	種類	器種	層	径	高・角度	形態	調整	備考		
1	瓦葺 (土師質)	碗口鉢	IV層	口径一 口径	高 一	口縁はやや内傾する	内外面 外表面	縁部はヘラ磨き ヘラ磨き	色調 粘土	灰色 良好 物成 良
2	須恵系須恵質土器 こね鉢	IV層	口径 20.8 口径 9.2	高 10.0 角度 60°	体部は角度60度で直線状に立ち上がる 口縁部ははやや上方につまみ出す	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	外表面 糸切り磨し	色調 粘土	黄灰色 褐色 砂粒混じり
3	須恵系須恵質土器 こね鉢底部	IV層	口径一 口径 7.8	高 一 角度 60°	体部は角度60度で内傾して立ち上がる	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	外表面 糸切り磨し	色調 粘土	黄灰色 褐色 砂粒混じり
4	須恵系須恵質土器 こね鉢底部	IV層	口径一 口径	高 一 角度 60°	体部は角度60度で立ち上がる	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	外表面 糸切り磨し	色調 粘土	黄灰色 褐色 砂粒混じり
5	瓦葺土器 (赤色) 鉢口鉢	IV層	口径一 口径	高 一 角度	口縁部ははやや下方につまみ出す	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形		色調 粘土	灰色 褐色 少量砂粒混じり
6	須恵質土器 甕鉢部	IV層	口径一 口径	高 一	体部付近	内面 外面	ハケ目 斜めの方向のヘラ文	色調 粘土	灰色 褐色 極少量砂粒混じり	良
7	須恵質土器 甕鉢部	IV層	口径一 口径	高 一	体部付近	内面 外面	磨きかきしい 目の筋 横ナリ	色調 粘土	灰色 褐色 極少量砂粒混じり	良
8	須恵質土器 甕口鉢	IV層	口径 2.0 口径一	高 一	口縁部は反折し口縁は平組	内面 外面	ハケ目 ハケ目	色調 粘土	灰色 黄褐色 良	良
9	瓦 鉢部	IV層	口径一 口径	高 一	調整の先端	内面	丁寧な成形	色調 粘土	褐色 褐色 少量砂粒混じり	良
10	常滑焼き 甕鉢部	IV層	口径一 口径	高 一	体部付近	内面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	色調 粘土	灰色 赤褐色 砂粒混じり 物成良	良

SD8 VIII層出土遺物

番号	種類	器種	層	径	高・角度	形態	調整	備考			
1	土師器	甕	IV層	口径一 口径	高 2.8 角度 60°	体部は角度60度で内傾して立ち上がる 内面は平組	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	外表面 糸切り磨し	色調 粘土	黄褐色 褐色 少量砂粒混じり
2	土師器	甕	IV層	口径 7.5 口径 5.8	高 1.2 角度 70°	体部は角度70度で立ち上がり口縁が短く内傾する 内面は平組が濃く滑し	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	外表面 糸切り磨し	色調 粘土	灰色 褐色 砂粒混じり
3	土師器	甕	IV層	口径 9.0 口径 6.6	高 1.6 角度 53°	体部は角度53度で立ち上がる 内面は平組	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	外表面 糸切り磨し	色調 粘土	黄灰色 褐色 極少量砂粒混じり
4	瓦葺 (土師質) 碗口鉢	IV層	口径一 口径	高 一 角度	体部は内傾し内筒する	内表面 外表面	横ナリ成形 ヘラ削り	色調 粘土	灰色 褐色 砂粒混じり	良	
5	瓦葺 (須恵質) 碗高台	IV層	口径一 口径 5.5	高 一 角度	内面は調整のヘラ磨き 高台はハケ目 高台は横ナリ高台で台台が欠る新築造三角形	内表面 外表面	横ナリ成形 横ナリ成形	色調 粘土	灰色 褐色 少量砂粒混じり	良	

SD8 II層出土土師器

番号	種類	器種	層	径	高・角度	形態	調整	備考			
1	土師器	甕	II層	口径 9.3 口径 7.2	高 1.7 30°	体部は角度50度で内傾して立ち上がる。 体部最大厚 2mm 底面は高台が凸で底面が凸して中央で重り上がる	内外面 内表面 外表面	横ナリ ナリ ナリ	西蔵磨り 立ち上がり部調整	色調 粘土	黄灰色 少量の砂粒混じり ややもろい
2	土師器	甕	II層	口径 8.2 口径 6.4	高 1.8 30°	体部は角度50度で直線状に立ち上がり口縁部で内筒する 体部最大厚 4mm 底面は高台が凸で底面が凸して中央で重り上がる	内表面 内表面 外表面	横ナリ ナリ ナリ	糸切り磨し 粗い調整	色調 粘土	黄褐色 少量の砂粒混じり 物成良
3	土師器	甕	II層	口径 8.8 口径 6.4	高 1.4 30°	体部は角度50度で内傾して立ち上がる。 体部最大厚 4mm 底面は高台が凸で底面が凸して中央で重り上がる	内表面 内表面 外表面	横ナリ ナリ ナリ	糸切り磨し 調整する	色調 粘土	黄灰色 少量の砂粒混じり 物成良

4	土師器	皿	Ⅱ層	口径 8.6 底径 6.2	高 1.5 47	体面は角形程度で内湾して立ち口縁部で外傾する。体面最大径 3mm。底面はなかやや窪み凸出で中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	粗い調整 意図的磨し 糸切り難し	色調 粘土 焼成	黄白色 少量の砂粒混じり ややもろい
5	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.0 底径 8.0	高 3.1 56	体面は角形程度で立ち外に屈曲して口縁部で内湾。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪みややかに盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好
6	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.6 底径 8.5	高 3.7 71	体面は角形程度で立ち71度で屈曲し口縁部で外湾。体面最大径 6mm。底面は中平で窪み中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
7	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.8 底径 8.0	高 3.0 57	体面は角形程度で意図的に立ち上がる。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪み中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	丁寧な調整 糸切り難し	色調 粘土 焼成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良好
8	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.8 底径 9.3	高 3.5 66	体面は角形程度で立ち曲線的に立ち上がる。体面最大径 7mm。意図的凹み。底面はなかやや窪み凸出で中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 粗い調整	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好
9	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.5 底径 8.5	高 2.8 42	体面は角形程度で立ち外に屈曲して口縁部で内湾。体面最大径 7.5mm。底面はなかやや窪み凸出を繰り返して中央で窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好
10	土師器	環	Ⅱ層	口径 13.6 底径 9.5	高 2.9 41	体面は角形程度でなかやや内湾して立ち上がる。体面最大径 7mm。意図的凹み。底面はなかやや窪み盛り上がり中央で窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	黄白色 少量の砂粒混じり 良好
11	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.6 底径 9.8	高 2.6 47	体面は角形程度で意図的に立ち上がる。体面最大径 6mm。意図的凹み。底面はなかやや窪み凸出で中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好
12	土師器	皿	Ⅱ層	口径 8.9 底径 6.1	高 1.7 35	体面は角形程度で立ち上がり口縁部で内湾する。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪み凸出で中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好
13	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.6 底径 9.3	高 3.2 61	体面は角形程度で意図的に立ち口縁部で外傾する。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪み盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	粗い調整 糸切り難し	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
14	土師器	環	Ⅱ層	口径 13.6 底径 9.0	高 3.3 49	体面は角形程度で意図的に立ち外に屈曲し内湾。体面最大径 5mm。意図的凹み。底面はなかやや窪み凸出で中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	丁寧な調整 丁寧な調整 糸切り難し	色調 粘土 焼成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良好
15	土師器	皿	Ⅱ層	口径 7.9 底径 6.0	高 1.5 50	体面は角形程度で立ち上がり口縁部で内湾する。体面最大径 4mm。底面はなかやや窪み中央にかけ盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	丁寧な調整 糸切り難し	色調 粘土 焼成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良好
16	土師器	皿	Ⅱ層	口径 8.8 底径 6.8	高 1.4 63	体面は角形程度で内湾して立ち上がる。体面最大径 6mm。底面はなかやや窪み盛り上がり中央で深く窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
17	土師器	皿	Ⅱ層	口径 8.8 底径 6.5	高 1.7 69	体面は角形程度で内湾して立ち上がる。体面最大径 4mm。底面はなかやや窪み盛り上がり中央で窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
18	土師器	皿	Ⅱ層	口径 8.4 底径 6.2	高 1.5 69	体面は角形程度で立ち上がり口縁部で内湾する。体面最大径 4mm。底面はなかやや窪み凸出で中央でやや窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	意図的 意図的 意図的	色調 粘土 焼成	黄褐色 少量の砂粒混じり ややもろい
19	土師器	環 大型	Ⅱ層	口径 15.5 底径 9.8	高 4.5 56	体面は角形程度で立ち内湾50度で屈曲し内湾する。体面最大径 8mm。底面はなかやや窪み中央にかけただらかに窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	灰黄色 少量の砂粒混じり 良好
20	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.2 底径 8.1	高 2.7 53	体面は角形程度で意図的に立ち屈曲し内湾する。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪み中央にかけ盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 意図的	色調 粘土 焼成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良好
21	土師器	環	Ⅱ層	口径 13.1 底径 8.0	高 3.1 49	体面は角形程度で意図的に立ち屈曲し内湾する。体面最大径 7mm。底面はなかやや窪みややかに窪み盛り上がり中央で窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好
22	土師器	環	Ⅱ層	口径 13.6 底径 9.0	高 3.0 55	体面は角形程度で内湾して立ち上がる。体面最大径 7mm。底面はなかやや窪み盛り上がり中央で窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
23	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.8 底径 8.8	高 2.7 47	体面は角形程度で内湾して立ち上がる。体面最大径 7mm。底面はなかやや窪み平直。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
24	土師器	環	Ⅱ層	口径 13.2 底径 9.3	高 2.9 53	体面は角形程度で外傾時に意図的に立ち上がる。体面最大径 7mm。底面はなかやや窪み凸出で中央でやや窪む。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 意図的	色調 粘土 焼成	灰黄色 少量の砂粒混じり 良好
25	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.8 底径 8.5	高 3.0 41	体面は角形程度で内湾して立ち上がる。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪みやや凸出し中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	丁寧な調整 丁寧な調整 糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	黄褐色 少量の砂粒混じり 良好
26	土師器	環	Ⅱ層	口径 13.5 底径 8.8	高 2.8 45	体面は角形程度で意図的に立ち上がる。体面最大径 8mm。意図的凹み。底面はなかやや窪み凸出で中央で高く盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 意図的	色調 粘土 焼成	黄白色 少量の砂粒混じり 良好
27	土師器	皿	Ⅱ層	口径 8.1 底径 6.3	高 1.2 50	体面は角形程度で内湾して立ち上がる。体面最大径 5mm。底面はなかやや窪みに窪み盛り上がり平直。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 意図的	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
28	土師器	環	Ⅱ層	口径 12.5 底径 9.2	高 3.0 60	体面は角形程度で立ち50度で屈曲し口縁部で内湾。体面最大径 4mm。底面はなかやや窪み凸出を繰り返して中央で窪む。	内外体面 内外面 外面	丁寧な横ナデ 丁寧なナデ ナデ	糸切り難し	色調 粘土 焼成	褐色 少量の砂粒混じり 良好
29	土師器	皿	Ⅱ層	口径 9.2 底径 7.5	高 1.5 38	体面は角形程度で意図的に立ち上がる。体面最大径 4mm。底面はなかやや窪みに窪み凸出で中央で盛り上がる。	内外体面 内外面 外面	横ナデ ナデ ナデ	糸切り難し 立ち上がり部に段差	色調 粘土 焼成	赤褐色 少量の砂粒混じり 良好

30	土師器	甗	Ⅲ期	口径 8.8 底径 6.8	高 1.4 32°	体部は内径50度で直線的に立ち上がる。 体部最大厚 6 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	赤褐色 少量の砂粒混じり 物質
31	土師器	甗	Ⅲ期	口径 8.8 底径 6.2	高 1.8 32°	体部は内径50度で内湾して立ち上がる。 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
32	土師器	甗	Ⅲ期	口径 9.1 底径 6.6	高 1.5 43°	体部は内径40度で外縁部が立ち上がり口縁部で内湾する 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	緑色 少量の砂粒混じり 物質
33	土師器	甗	Ⅲ期	口径 12.6 底径 7.9	高 3.0 51°	体部は内径50度で立ち上がり口縁部で内湾する 体部最大厚 8 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
34	土師器	甗	Ⅲ期	口径 12.0 底径 8.0	高 3.2 56°	体部は内径50度立ち口縁部で外に屈曲し内湾する 体部最大厚 8 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	緑色 少量の砂粒混じり 物質
35	土師器	甗	Ⅲ期	口径 12.8 底径 8.0	高 1.6 49°	体部は内径40度で直線的に立ち口縁部で内湾する 体部最大厚 8 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
36	土師器	甗	Ⅲ期	口径 7.6 底径 6.0	高 1.6 53°	体部は内径50度で僅く内湾して立ち上がる。 体部最大厚 4 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	緑色 少量の砂粒混じり 物質
37	土師器	甗	Ⅲ期	口径 12.8 底径 8.5	高 3.6 49°	体部は内径50度で立ち外縁部が立ち上がる。 体部最大厚 8 mm 底面は平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	緑色 少量の砂粒混じり 物質
38	土師器	甗	Ⅲ期	口径 13.1 底径 8.5	高 1.8 51°	体部は内径50度で内湾して立ち上がる。 体部最大厚 7 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	赤褐色 少量の砂粒混じり 物質
39	土師器	甗	Ⅲ期	口径 8.5 底径 6.8	高 1.6 56°	体部は内径50度で内湾して立ち上がる 体部最大厚 3 mm 底面は端が僅かに窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	緑色 少量の砂粒混じり 物質
40	土師器	甗	Ⅲ期	口径 9.7 底径 8.0	高 1.1 50°	体部は内径50度で直線的に立ち上がり外縁する 体部最大厚 3 mm 底面は平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
41	土師器	甗	Ⅲ期	口径 12.2 底径 8.0	高 2.5 64°	体部は内径60度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がる	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
42	土師器	甗	Ⅲ期	口径 9.5 底径 7.0	高 1.7 44°	体部は内径40度で直線的に立ち口縁部が外湾する 体部最大厚 3 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
43	土師器	甗	Ⅲ期	口径 8.2 底径 6.8	高 0.9 43°	体部は内径40度で内湾して立ち上がる。 体部最大厚 3 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がる	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	灰青色 少量の砂粒混じり 物質

SD 8 IV層出土土師器

番号	種類	器種	層	口径	底径	高・角度	形態	調整	備考	
1	土師器	甗	Ⅳ期	口径 13.0 底径 8.4	高 3.5 46°	体部は内径50度で直線的に立ち上がる。 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
2	土師器	甗	Ⅳ期	口径 8.1 底径 6.6	高 1.7 67°	体部は内径40度で内湾して立ち上がる。 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
3	土師器	甗	Ⅳ期	口径 12.4 底径 8.4	高 3.7 56°	体部は内径50度で立ち口縁部が立ち上がり外縁する 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	赤褐色 少量の砂粒混じり 物質
4	土師器	甗	Ⅳ期	口径 13.0 底径 8.5	高 3.1 53°	体部は内径50度で外湾して立ち口縁部で外縁する 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄白色 少量の砂粒混じり 物質
5	土師器	甗	Ⅳ期	口径 13.0 底径 8.5	高 2.8 47°	体部は内径60度で立ち上がり内湾する。 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	赤褐色 少量の砂粒混じり 物質
6	土師器	甗	Ⅳ期	口径 8.8 底径 7.4	高 1.5 51°	体部は内径40度で立ち上がり内湾する 体部最大厚 5 mm 底面は平直	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	赤褐色 少量の砂粒混じり 物質
7	土師器	甗	Ⅳ期	口径 13.0 底径 8.2	高 3.0 46°	体部は内径50度で内湾して立ち口縁部で外縁する 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
8	土師器	甗	Ⅳ期	口径 13.0 底径 7.0	高 3.0 47°	体部は内径50度で立ち口縁部に立ち上がる。 体部最大厚 4 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり口縁部凸する	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄褐色 少量の砂粒混じり 物質
9	土師器	甗	Ⅳ期	口径 9.3 底径 8.6	高 1.5 47°	体部は内径40度で直線的に立ち上がる。 体部最大厚 4 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	赤褐色 少量の砂粒混じり 物質
10	土師器	甗	Ⅳ期	口径 11.8 底径 8.5	高 2.8 44°	体部は内径40度でゆるやかに内湾して立ち上がる 体部最大厚 5 mm 底面は端が僅かに窪み盛り上がり中央で窪む	内外体面 内底面 外面	横ナデ ナデ 水切り難し	赤褐色 粘土 物質	黄白色 少量の砂粒混じり 物質

11	土師器	坏	IV期	口径11.0 底径 8.3	高 2.9 43°	体部は内径5度で直線的に立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央がやや内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
12	土師器	皿	IV期	口径 8.8 底径 6.6	高 1.6 48°	体部は内径5度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央がやや内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり
13	土師器	坏	IV期	口径11.0 底径 8.3	高 2.8 45°	体部は内径5度で内湾的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がる。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
14	土師器	皿	IV期	口径 9.7 底径 7.6	高 1.4 52°	体部は内径5度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 体部途中でひける 底面は端が内湾する。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	灰白色 少量の彩粒混じり
15	土師器	皿	IV期	口径 8.4 底径 6.4	高 1.5 51°	体部は内径5度で立ち上がり口縁部で外湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がる。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
16	土師器	坏	IV期	口径11.1 底径 8.0	高 3.8 36°	体部は直線的に内径5度で立ち上がり口縁部で外湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端が内湾し縁り上がる。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり
17	土師器	碗	IV期	口径 9.1 内径 5.0	高 3.8	体部は尖く、口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は平皿	内外体面 内底面 高台	横ナデ ナデ 底面は二立つ角、底面は三角形	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり
18	土師器	坏	IV期	口径13.0 底径 9.0	高 2.7 42°	体部は内径5度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央でやや内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
19	土師器	皿	IV期	口径 8.1 底径 7.1	高 1.2 50°	体部は内径5度で直線的に立ち上がり口縁部で外湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端が中央に尖り縁り上り中央でやや内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
20	土師器	皿	IV期	口径 7.4 底径 5.0	高 1.8 55°	体部は内径5度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は平皿	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
21	土師器	坏	IV期	口径11.8 底径 8.0	高 2.9 50°	体部は内径5度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
22	土師器	皿	IV期	口径 8.7 底径 6.7	高 1.6 53°	体部は内径5度で内湾して立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
23	土師器	皿	IV期	口径 7.7 底径 6.0	高 1.5 50°	体部は内径5度で直線的に立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は中央がやや内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
24	土師器	皿	IV期	口径 8.1 底径 5.8	高 1.5 41°	体部は内径4度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は平皿	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり
25	土師器	坏	IV期	口径12.6 底径 8.2	高 3.4 54°	体部は内径5度で直線的に立ち上がり口縁部で外湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央でやや内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
26	土師器	皿	IV期	口径 7.7 底径 6.0	高 1.4 51°	体部は内径5度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は平皿	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
27	土師器	坏	IV期	口径12.2 底径 7.5	高 3.1 43°	体部は内径5度で内湾して立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
28	土師器	坏	IV期	口径11.8 底径 8.7	高 3.4 59°	体部は内径5度で内湾して立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は端が内湾し縁り上がる。	内外体面 内底面 外底面	丁字型横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり
29	土師器	坏	IV期	口径12.1 底径 8.5	高 2.5 71°	体部は内径1度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は平皿	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	赤褐色 少量の彩粒混じり
30	土師器	皿	IV期	口径 8.5 底径 6.8	高 1.1 53°	体部は内径5度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
31	土師器	皿	IV期	口径 7.1 底径 5.0	高 1.2 59°	体部は内径5度で立ち上がり内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	灰白色 少量の彩粒混じり
32	土師器	皿	IV期	口径 8.3 底径 6.5	高 1.2 44°	体部は内径4度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端が内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり
33	土師器	皿	IV期	口径 7.6 底径 6.1	高 0.9 40°	体部は内径4度で立ち上がりやや外湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端が一次型に大きく内湾し縁り上がる。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
34	土師器	皿	IV期	口径 8.3 底径 6.8	高 1.4 65°	体部は内径5度で立ち上がり直線的に内湾して外湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 良好
35	土師器	皿	IV期	口径 9.2 底径 7.4	高 1.1 42°	体部は内径5度で直線的に立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がり中央で深く内湾。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	黄褐色 少量の彩粒混じり
36	土師器	皿	IV期	口径 8.8 底径 8.5	高 0.9 57°	体部は内径7度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 7.5 mm 底面は端がやや内湾し縁り上がる。	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 粘土 褐色	褐色 少量の彩粒混じり

37	土師器	皿	IV期	口径 9.4 底径 7.5	高 1.6 54	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し 立ち上がり部に段差	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
38	土師器	杯	IV期	口径12.3 底径 8.4	高 2.6 80	体部は内径95度で内湾して立ち上がる。 体部最大径 4mm 底面は平皿	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり やや悪い
39	土師器	皿	IV期	口径 8.1 底径 7.0	高 1.2 50	体部は内径95度で内湾して立ち上がる 体部最大径 4mm。底面は砂粒で平づく 底面は中央が窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し 磨滅する	色調 紅土 褐色	黄褐色 多量の砂粒混じり 良
40	土師器	皿	IV期	口径 9.2 底径 8.2	高 1.6 54	体部は内径95度で直線的に立ち上がり内湾する 体部最大径 5mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し 既述に大きな段差	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
41	土師器	皿	IV期	口径 8.5 底径 6.7	高 1.8 60	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で外湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し 窪み、段差 窪み、段差	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
42	土師器	皿	IV期	口径 8.6 底径 6.4	高 2.2 56	体部は直線し内径95度で直線的に立ち上がり口縁が中央 底面は平皿から窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	丁取な横ナデ ナデ ナデ	未切り直し 立ち上がり部に段差	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
43	土師器	皿	IV期	口径 8.9 底径 6.9	高 1.6 61	体部は内径95度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
44	土師器	皿	IV期	口径 9.4 底径 6.0	高 1.5 62	体部は内径95度で内湾して立ち上がる。 体部最大径 5mm 底面は平皿から中央に平づく窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	-	磨滅する 磨滅する	色調 紅土 褐色	褐色 少量の砂粒混じり やや悪い

SD8 Ⅷ層出土土師器

番号	器名	器種	層	口径	底径	高	角度	形態	調整	備考	
1	土師器	皿	V期	口径 9.2 底径 7.0	高 1.8 63	体部は内径95度で立ち上がり内湾する。 体部最大径 5mm 底面は平皿	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
2	土師器	皿	V期	口径 7.9 底径 6.0	高 1.1 57	体部は内径95度で短く内湾して立ち上がる。 体部最大径 3mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
3	土師器	皿	V期	口径 6.3 底径 6.5	高 1.5 50	体部は内径95度で立ち上がり内湾する。 体部最大径 5mm 底面は中央がやや窪む	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
4	土師器	皿	V期	口径 7.8 底径 5.7	高 1.3 66	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
5	土師器	皿	V期	口径 9.6 底径 7.0	高 1.9 54	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
6	土師器	杯	V期	口径12.8 底径 8.0	高 2.0 46	体部は内径95度で立ち上がり内湾する。 体部最大径 5mm 底面は平皿で窪み中央がやや窪む	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
7	土師器	皿	V期	口径 8.4 底径 6.4	高 1.4 54	体部は内径95度で直線的に立ち上がる。 体部最大径 4mm 底面は平皿 丁取な底面	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
8	土師器	杯	V期	口径15.5 底径 8.8	高 4.3 53	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面はやや凸出する	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	磨滅する 未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 地味
9	土師器	杯	V期	口径11.7 底径 8.4	高 3.1 55	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は中央がやや窪む	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	褐色 少量の砂粒混じり 良
10	土師器	杯	V期	口径12.6 底径 8.2	高 2.3 57	体部は内径95度で直線的に立ち上がり外湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
11	土師器	杯	V期	口径18.0 底径 8.2	高 2.6 50	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
12	土師器	杯	V期	口径12.1 底径 8.4	高 2.4 62	体部は内径95度で立ち上がり内湾する。 体部最大径 5mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
13	土師器	皿	V期	口径 7.8 底径 6.4	高 1.2 52	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
14	土師器	杯	V期	口径12.4 底径 8.0	高 2.4 51	体部は内径95度で立ち上がり内湾する。 体部最大径 5mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
15	土師器	杯	V期	口径12.8 底径 8.0	高 2.5 50	体部は内径95度で立ち上がり口縁部で内湾する。 体部最大径 4mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
16	土師器	杯	V期	口径13.6 底径 8.6	高 2.7 50	体部は内径95度で直線的に立ち上がり内湾する。 体部最大径 5mm 底面は平皿で窪み中央が盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ ナデ	未切り直し	色調 紅土 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり 良

17	土師器	皿	V型	口径7.4 底径6.2	高1.2 59	体面は角筒型で段階的に立ち上がり内湾する。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央やや盛り上がる	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり ややもろい
18	土師器	皿	V型	口径8.5 底径6.1	高1.5 80	体面は角筒型で立ち上がり内湾する。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央やや盛り上がる	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり
19	土師器	杯	V型	口径12.0 底径6.2	高2.9 53	体面は角筒型で立ち上がり口縁部で内湾する。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央やや盛り上がる	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり
20	土師器	皿	V型	口径8.5 底径6.8	高1.3 37	体面は角筒型で段階的に開き外縁する。 体面最大厚3mm 底面は平直	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	褐色 少量の砂粒混じり
21	土師器	杯	V型	口径12.6 底径6.3	高2.8 65	体面は角筒型で立ち上がり口縁部で内湾する。 体面最大厚4mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり
22	土師器	皿	V型	口径9.0 底径7.1	高1.5 90	体面は角筒型で段階的に立ち上がる。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	褐色 少量の砂粒混じり
23	土師器	皿	V型	口径7.4 底径6.5	高1.3 63	体面は角筒型で段階的に立ち上がる。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	褐色 少量の砂粒混じり
24	土師器	杯	V型	口径11.8 底径4.0	高1.8 96	体面は角筒型で立ち上がり口縁部で内湾する。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	良好 良好
25	土師器	皿	V型	口径8.4 底径5.9	高1.5 45	体面は角筒型で立ち上がり口縁部で内湾する。 体面最大厚3mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	褐色 少量の砂粒混じり
26	土師器	杯	V型	口径12.8 底径9.0	高2.9 90	体面は角筒型で立ち上がり口縁部で内湾する。 体面最大厚5mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	黄褐色 少量の砂粒混じり
27	土師器	皿	V型	口径7.8 底径6.5	高1.3 80	体面は角筒型で段階的に立ち上がる。 体面最大厚3mm 底面は平直	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	褐色 少量の砂粒混じり
28	土師器	杯	V型	口径12.6 底径9.2	高2.4 95	体面は角筒型で立ち上がり内湾する。 体面最大厚4mm 底面は平直で中央ややややく	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色調 土色 褐色	褐色 少量の砂粒混じり

SD1 出土白磁

番号	科別	器種	形状	口径	底径	高	器態	調査	備考	
1	白磁	皿	Ⅱ型	口径15.2 底径5.0	高6.2	高台は外面を造り、内面を斜めに削り出す。 体部の器内は立ち上がる。	内体面 外体面	見込に段差がある。 体部中位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
2	白磁	高台	I型	口径 - 底径6.8	高 -	高台は高く、内面を厚く削りに削り出す。 体部の器内は平直。	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる 施釉がない	磁胎 精良 釉	灰白色 灰黄色
3	白磁	碗	Ⅱ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部は大きな玉縁 体部の器内は平直。	内体面 外体面	体部中位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 灰黄色
4	白磁	碗	Ⅲ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部は大きな玉縁 体部の器内は平直。	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる 体部中位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
5	白磁	碗	Ⅲ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部は大きな玉縁 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部中位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
6	白磁	碗	Ⅳ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部は大きな玉縁 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部上位に一条の沈線がめぐる	磁胎 精良 釉	灰白色 灰黄色
7	白磁	碗	Ⅳ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部は大きな玉縁 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部中位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 灰黄色
8	白磁	高台	I型	口径 - 底径6.2	高 -	高台は外面を造り、削り高い。 体部の器内は平直。	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる 施釉がない	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
9	白磁	高台	Ⅱ型	口径 - 底径6.4	高 -	高台は外面を造り、削り高い。高台外縁に二階輪 体部の器内は平直。	内体面	体部中位に一条の沈線がめぐる 見込部に蓮目模様の花文がある	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
10	白磁	碗	Ⅲ型	口径 - 底径 -	高 -	体部の器内はややく	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる	磁胎 精良 釉	灰白色 灰白色
11	白磁	碗	Ⅲ型	口径 - 底径 -	高 -	体部の器内はややく	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる	磁胎 精良 釉	灰白色 灰白色
12	白磁	碗	Ⅲ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部がシブーブに外反する 体部の器内はややく	内体面	-	磁胎 精良 釉	灰白色 灰白色
13	白磁	碗	Ⅲ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部は外上方に飛び、端部は丸くおさめる 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部上位に一条の沈線がめぐる 体部中位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
14	白磁	碗	Ⅳ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部が外反する 体部の器内はややく	内体面	体部上位に一条の沈線がめぐる 内縁部に蓮目模様の花文がある	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色
15	白磁	碗	Ⅳ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部が外反する 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部下位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 灰白色
16	白磁	碗	Ⅳ型	口径 - 底径 -	高 -	口縁部が外反する 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる 外縁部に蓮目模様の花文がある	磁胎 精良 釉	灰白色 灰白色
17	白磁	碗	Ⅳ型	口径 - 底径6.2	高 -	高台は外面を造り、削り高い。 体部の器内はややく	内体面 外体面	体部中位に一条の沈線がめぐる 体部下位まで施釉	磁胎 精良 釉	灰白色 黄褐色

17	白磁	碗	口縁	高	1	高台は外面を施し、内面を厚く縁内に閉り出す 体部内面見出し部の輪を輪付にのみ取る	内外面 外体部	見出しの輪を輪付にのみ取る 体部下位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
18	白磁	皿	口縁 底径	高	2.7	内面見出しの輪を輪付にのみ取る 口縁部は外反する	内外面 外体部	体部と見出しに段差がある 体部下位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
19	白磁	皿	口縁 底径	高	3.0	底面はやや上反り状	内外面 外体部	体部下位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
20	白磁	皿	口縁 底径	高	1	底面はやや上反り状	内外面 外体部	内面縁部部二重の段がある 体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
21	白磁	皿	口縁 底径	高	2.9	底面はやや上反り状	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
22	白磁	皿	口縁 底径	高	2.9	底面は平ら	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
23	白磁	皿	口縁 底径	高	2.0	口縁部は輪を有し、 体部は高縁部を立ち上がり口縁部を丸くする	内外面 外体部	外縁部まで施輪する	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色

SD1 出土龍泉窯系青磁

24	青磁	碗	口縁 底径	高	6.2	内面に青花文を施す。 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	見出しに青花文を施す 高台まで施輪する	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
25	青磁	碗	口縁 底径	高	1	内面に青花文を施す。 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部内面に青花文を施す	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
26	青磁	碗	口縁 底径	高	6.0	内面に青花文を施す。 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部内面に青花文を施す	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
27	青磁	碗	口縁 底径	高	1	外縁部には蓮弁文を施す 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	蓮弁部の盛り上がりは小さい	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
28	青磁	碗	口縁 底径	高	1	外縁部には蓮弁文を施す 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	蓮弁部は明確な高を有する	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色

SD1 出土その他の青磁

29	青磁	金土 鉢と蓋	口縁 底径	高	1		内外面 外体部	内面に施輪する	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
----	----	-----------	----------	---	---	--	------------	---------	------------------------

SD2 出土白磁

番号	器種	口縁	底径	高	形態	調整	備考		
1	白磁	碗	口縁 底径	高	1	体部の内面縁部を立ち上がり、口縁部は内反する	内外面 外体部	体部中位に二重の段がある 体部下位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
2	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
3	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
4	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	外外面 外体部	体部上位に二重の段がある 体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
5	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
6	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
7	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部はシャープに外反する 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部上位の縁部のみならず 体部下位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
8	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は外反する。 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位に二重の段がある 体部内面に重目付きの青花がある	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
9	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は外反する。 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	口縁部には青花がある 体部には青花より対照施す	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
10	白磁	皿	口縁 底径	高	2.8	底面は上反り状	内外面 外体部	内面縁部部二重の段がある 体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
11	白磁	皿	口縁 底径	高	2.7	-	内外面 外体部	内面縁部部二重の段がある 体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色

SD2 拡張 出土白磁

番号	器種	口縁	底径	高	形態	調整	備考		
1	白磁	碗	口縁 底径	高	5.4	高台は外面を施し、内面を厚く縁内に閉り出す。 体部の内面縁部を立ち上げる。	内外面 外体部	見出しに段差がある。 体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
2	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部上位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
3	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は大きな玉縁 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
4	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部はシャープに外反する 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位に二重の段がある 体部中位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色
5	白磁	碗	口縁 底径	高	1	口縁部は外反する 体部の内面はやや平ら	内外面 外体部	体部中位に二重の段がある 体部下位まで施輪	磁胎 薄良 灰白色 黄褐色

6	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	口縁部に輪花がある 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	体部内面に輪花から対輪が延びる -	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
7	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁底径 底径	7.1 高 -	口縁部に輪花がある 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	体部内面に輪花から対輪が延びる 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 黄白色
8	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に輪花がある 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	体部内面に輪花から対輪が延びる 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 黄白色
9	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	- 高 -	高台は深く広い 体部内面見込の輪を輪状にかき取る	内体部	見込部に輪が付着する 体部下位まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
10	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	口縁部が内寄する	内体部 外体部	体部中位に一条の沈線がめぐる	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
11	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	-	内体部 外体部	内面器部二枚施輪の残がある 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	黄白色 淡黄白色
12	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	5.1 高 -	やや上げ状	内体部 外体部	内面器部二枚施輪の残がある 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	黄白色 淡黄白色
13	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	5.3 高 -	やや上げ状	内体部 外体部	内面器部二枚施輪の残がある 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	黄白色 淡黄白色
14	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	- 高 -	口縁器部の輪を削りとり「口流」の感部	内体部 外体部	-	磁胎 障良 薄	灰白色 黄白色

SD 2 拡張 出土龍泉窯系青磁

15	青磁 I-5類	横 体部	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に蓮弁文を強く 体部の器内はやや深い	外体部	蓮弁部の立ち上がりは明瞭	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
16	青磁 I類	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部中位で施輪する	内体部 外体部	-	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色

SD 2 拡張 出土同安窯系青磁

17	青磁 I類	横 体部	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に二枚の沈線 体部内面は施輪による文様	内体部 外体部	へう状の施文見て片側りの沈線 器目による文様	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
----	----------	---------	-----	----------	-------	----------------------------	------------	---------------------------	---------------	-------------

SD 2 拡張 出土その他の青磁

18	青磁 (明)	横 口縁	I層	口縁 底径	- 高 -	口縁部に輪花がある 体部中位で施輪する	内体部 外体部	体部上部に一条の沈線がめぐらす	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
----	-----------	---------	----	----------	-------	------------------------	------------	-----------------	---------------	-------------

SD 4 出土白磁

番号	種類	器種	層	径	高	形態	調査	備考		
1	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	口縁部に大きな五稜 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	- 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
2	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	5.0 高 -	見込、体部に蓮目焼きの花文 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	体部中位に一条の沈線がめぐる 高台まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
3	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部に蓮目焼きの花文 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	蓮目焼きの花文 体部中位まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
4	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	- 高 -	高台は深く広い 体部内面見込の輪を輪状にかき取る	内体部	見込の輪を輪状にかき取る 体部下位まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色

SD 4 出土龍泉窯系青磁

5	青磁 I-4類	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に二本の沈線によって区切られた空間に 飛雲状文を強く	内体部 外体部	飛雲状文を強く 口縁部からの施輪が二つがある	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
6	青磁 I-5類	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に蓮弁文を強く 体部の器内はやや深い	外体部	蓮弁部が強く盛り上がる	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色

SD 6 出土白磁

番号	種類	器種	層	径	高	形態	調査	備考		
1	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	6.2 高 -	細く高く直立した高台	内体部 外体部	高台まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
2	白磁 V型	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に蓮目焼きの花文 体部の器内はやや深い	内体部 外体部	体部中位に一条の沈線がめぐる	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
3	白磁 V型	横 高台	II層	口縁 底径	5.5 高 -	高台は深く広い 体部内面見込の輪を輪状にかき取る	内体部	見込の輪を輪状にかき取る 高台まで施輪	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色

SD 6 出土龍泉窯系青磁

4	青磁 I-4類	横 高台	II層	口縁 底径	6.0 高 -	内面内面に二枚の花文を強く	内体部 外体部	見込部二枚文を強く	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
5	青磁 I-4類	横 口縁	II層	口縁 底径	- 高 -	体部内面に二本の沈線によって区切られた空間に 飛雲状文を強く	内体部 外体部	飛雲状文を強く	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色
6	青磁 I-5類	横 高台	II層	口縁 底径	5.0 高 -	体部内面に蓮弁文を強く 体部の器内はやや深い	外体部	蓮弁部が強く盛り上がる	磁胎 障良 薄	灰白色 淡黄白色

SD 6 出土その他の白磁

7	白磁	舍利子	Ⅱ群	口径 底径	14.4 6.2	高	-	-	内面 外面	内面に施輪 外面に施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 灰黄色
8	白磁	舍利子	Ⅱ群	口径 底径	14.4 6.2	高	-	-	内面 外面	内面に施輪 外面に施輪	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色

SD 8 出土白磁

番号	群別	器種	器	径	高	形状	特徴	備考				
1	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅱ群	口径14.4 底径	高	-	口縁部に施輪 体部の器内は平い。	内面 外面	体部下位に一条の沈線かめぐる 体部上位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
2	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅳ群	口径16.5 底径	高	-	口縁部より大きな縁 体部の器内は平い。	内面 外面	体部下位に一条の沈線かめぐる 体部中位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡灰白色
3	白磁 Ⅳ群	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	6.2	高	幅が高く、直立した高台	内面 外面	体部下位に一条の沈線かめぐる 高台は施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
4	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅳ群	口径 底径	-	高	口縁部はシャープに外反する 体部の器内は平い。	内面 外面	体部内側に唇口前きの花文 体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰色 淡黄緑色
5	白磁 Ⅳ群	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	5.9	高	やや広く低い、高台 内面見込に縁口前きの花文	内面 外面	体部見込に縁口前きの花文 体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
6	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅳ群	口径 底径	5.9	高	口縁部より大きな縁 体部に縁口前きの花文	内面 外面	体部上位に一条の沈線かめぐる 体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	淡黄緑色 淡灰白色
7	白磁 Ⅳ群	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	5.1	高	高台は低く低い、体部内面は上位に一条の沈線 体部内面見込の縁を輪状にのみ取る	内面 外面	見込部より大きな段差となる 体部下位まで施輪 一高台まで	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色
8	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅳ群	口径16.8 底径	5.9	高	高台は低く低い、体部内面見込の縁を輪状にのみ取る	内面 外面	見込部より大きな段差となる 体部下位まで施輪 一高台まで	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色
9	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅳ群	口径16.8 底径	5.9	高	体部内面見込の縁を輪状にのみ取る	内面 外面	体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色
10	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅳ群	口径16.8 底径	5.9	高	高台は低く低い、体部内面は上位と下位に沈線 体部内面見込の縁を輪状にのみ取る	内面 外面	見込部より大きな段差となる 体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色
11	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	-	高	口縁部は縁を削りとり「口」の口縁 体部の器内はやや平い。	内面 外面	内面見込部に縁口前きの花文かめぐる 体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰色 淡黄緑色
12	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	-	高	口縁部は縁を削りとり「口」の口縁 体部の器内はやや平い。	内面 外面	口縁部の内面、外面の縁を削る 体部下位まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色
13	白磁 Ⅳ群	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	-	高	体部が内面見込に立ち上がり縁面して内面する	内面 外面	内面見込部に沈線状の段がある	磁胎 精良	薄良 深い	淡灰白色 淡黄緑色

SD 8 出土龍泉窯系青磁

14	青磁 Ⅰ-1類	碗 口径	Ⅱ群	口径15.4 底径	5.3	高	6.4	高台が断面四角形で、底部の器内が平い、 内面とも施輪	内面 外面	- 高台は竹外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡青色
15	青磁 Ⅰ-2類	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	-	高	-	体部内面に花文を施す	内面 外面	体部上位に一条の沈線かめぐる 沈線あり	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
16	青磁 Ⅰ-2類	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	-	高	-	体部内面に花文を施す 高台は断面四角形で、底部の器内が平い。	内面 外面	見込に花文を施す 高台外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
17	青磁 Ⅰ-5類	高台 口径	Ⅱ群	口径 底径	5.9	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ 高台は断面四角形で、底部の器内が平い。	内面 外面	見込部と平面である 高台外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
18	青磁 Ⅰ-5類	高台 口径	Ⅱ群	口径 底径	5.5	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ 高台は断面四角形で、底部の器内が平い。	内面 外面	見込部と平面である 高台外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡青色
19	青磁 Ⅰ-5類	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	-	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ	内面 外面	蓮弁は明確	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡青色
20	青磁 Ⅰ-5類	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	4.1	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ、形は丁家 高台は断面四角形で、底部の器内が平い。	内面 外面	見込部と平面である 高台外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
21	青磁 Ⅰ-5類	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	5.8	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ 高台は断面四角形で、底部の器内が平い。	内面 外面	見込部と平面である 高台外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
22	青磁 Ⅰ-5類	碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	-	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ、形は丁家	内面 外面	蓮弁は明確	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡青色
23	青磁 Ⅰ-5類	碗 口径	Ⅳ群	口径10.0 底径	3.5	高	6.2	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ、形は丁家 高台は断面四角形で、底部の器内が平い。	内面 外面	蓮弁は明確	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
24	青磁 Ⅰ類	小碗 口径	Ⅱ群	口径 底径	5.2	高	-	体部内面とも縁の口、蓮弁をもつ 内面は断面四角形で、立ち上がる	内面 外面	体部下位に一条の沈線かめぐる 外面より立ち上がる	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
25	青磁 Ⅰ類	小碗 口径	Ⅳ群	口径 底径	4.0 4.2	高	4.0	体部内面とも縁の口、蓮弁をもつ 内面は断面四角形で、立ち上がる	内面 外面	高台外側まで施輪	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
26	青磁 Ⅰ類	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	4.4	高	-	体部中央で断面四角形で内面見込みに花文を施す	内面 外面	見込部に花文を施す 断面の縁に沈線状の段がある	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色

SD 8 出土同安窯系青磁

27	青磁 Ⅰ類	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	-	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ、形は丁家 高台は断面四角形で、立ち上がる	内面 外面	内面見込と体部の間に段がある 唇口による文様	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色
28	青磁 Ⅰ類	高台 口径	Ⅳ群	口径 底径	4.5	高	-	体部内面に縁の口、蓮弁をもつ、形は丁家 高台は断面四角形で、立ち上がる	内面 外面	内面に縁の口、蓮弁をもつ 見込は平面 唇口による文様	磁胎 精良	薄良 深い	灰白色 淡黄緑色

29	青磁 豆皿	横 高台	V脚 口径 底径 5.0	-	高	-	体部内外に楕状とへら状の花文を織く 高台は円形・方形	内体部 外体部	内面に楕状とへら状の花文 高台による文様	磁胎 釉	精良 薄	黄灰色 淡黄緑色
30	青磁 豆皿	横 口縁	IV脚 口径 底径 -	-	高	-	体部内面に楕状の花文を織く	内体部 外体部	内面に楕状の花文 高台による文様	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 黄緑白色
31	青磁 豆皿	横 口縁	IV脚 口径 底径 -	-	高	-	体部内面に楕状とへら状の花文を織く	内体部 外体部	内面に楕状とへら状の花文	磁胎 釉	精良 薄	黄灰色 淡黄緑色
32	青磁 1-2部	皿 高台	IV脚 口径 底径 -	-	高	-	内面に楕状とへら状の花文を織く	内体部 外体部	楕状とへら状の花文 高台の輪はよく残る	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 淡黄緑色

SD8 出土輸入陶器

1	陶器 寶物	壺 口縁	IV脚 口径 底径 -	-	高	-	内面敷地に立ち上がり口縁部は内寄する 器蓋は平形	内体部 外体部	体部中央と上段で凸面する 地輪は少ない	磁胎 釉	粗い 薄	黄緑色 黄白色
---	----------	---------	------------------	---	---	---	-----------------------------	------------	------------------------	---------	---------	------------

SD2、4、6、8 出土墨書・刻印のある白磁、青磁

番号	類別	器種	原	径	高	型	形題	調整	備考			
1	白磁 V脚	横 高台	SD4 直脚	口径 底径 5.6	高	-	丸 高台は外縁を直にし、細く高い。 体部の器蓋はやや厚い。	内体部 外体部	一 透飾はない	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 淡黄緑色
2	白磁 V脚	横 高台	SD8 IV脚	口径 底径 5.2	高	-	不明 高台は外縁を直にし、細く低い。	内体部 外体部	高台内面に一帯の紋線がめぐる 高台まで透飾	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 黄緑色
3	白磁 直脚	皿	SD6 直脚	口径10.9 底径 4.4	高	2.6	不明 内面見込に草花文がある。 体部中央で内寄する	内体部 外体部	内面見込に草花文が 全面透飾・器蓋の輪をのみ取る	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 淡黄緑色
4	青磁 1-2部	横 高台	SD2 直脚	口径 底径 5.0	高	-	今 内面見込に草花文がある。 体部の器蓋は厚い。	内体部 外体部	内面見込に草花文がある。 器蓋流行まで透飾	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 黄緑色
5	青磁 1-2部	横 高台	SD8 IV脚	口径 底径 5.7	高	-	通脚 今 内面見込に草花文がある。 体部の器蓋は厚い。	内体部 外体部	内面見込の器蓋あり 器蓋流行まで透飾	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 黄緑色
6	青磁 1部	横 高台	SD4 直脚	口径11.0 底径 5.4	高	7.2	不明 念形状で内寄し、高台で体部が内寄する。 内縁上部に紋線。見込みに紋線がある	内体部 外体部	片側り文とジグザグ文 体部下部まで透飾	磁胎 釉	精良 薄	黄白色 黄緑色

SD1、2、2拡張、4 出土木製品

番号	類別	器種	径	高	型	形題	調整	備考
1	木製	SD1	径 4.8 長 50.5			溝の輪郭に使用された木枕 丸端は尖る	やや大型の枕で先端は丁寧に尖る	
2	木枕	SD1	径 4.8 長 34.2			溝の輪郭に使用された木枕 丸端は尖る	小型の枕で先端は丁寧に尖る	
3	切羽のある木枕 縁の削皮	SD1-2	径 4.8 厚 0.3			出土品品に使用されたと考えられる	5mm-10mm程度で細く切り目を入れる 3mmの厚さ	
4	コマ状木製品 (用途不明)	SD2	径 7.0 高さ 5.3			用途不明の木製品 道具カ	丁寧に加工して円盤を歪めた形態	
5	木製の工具柄	SD2拡張	径 3.8 厚 2.2 長 36.2			先端は接合用に抉られており、柄として 使用される	丁寧に加工して、通り長より加工等の柄として 使用されたと考えられる	
6	木枕 (用途不明)	SD2拡張	径 -			端の削皮状に尖出する。正目板を使用 先端は尖る	丁寧に加工	
7	木枕 (用途不明)	SD2拡張	径 -			端の削皮状に尖出する。正目板を使用 先端は尖る	丁寧に加工	
8	皿	SD2拡張	径 - 長 25.5			一帯よりなり縁の中央が細くくびれた楕圓 の形。内面は平潤となる。	内面は平潤で、内縁部および外縁部には 加工痕が残る	
9	楕圓木製品	SD4	径 5.7			楕圓(まっしょう)という現代のネットボ ールに近い形状の楕円に用いる球	自然木を切り、両端を粗削りに削る	
10	木枕 (用途不明)	SD4	径 -			加工の痕跡のある木枕		

G-4・5区 SX1 II層出土遺物

番号	類別	器種	径	高	角度	形題	調整	備考		
1	土師器	杯	口径22.8 底径 8.6	高 3.0	50°	体部は角度50度で立ち上がり内寄する。 体部最大径4.8mm 底縁1/3がのみ盛り上がり中央がやや緩む	内外体部 外体部	横ナデ ナデ 糸切り難し	色潤 土質	赤褐色 少量の彩粒混じり 均質
2	土師器	杯	口径22.8 底径 7.9	高 3.0	54°	体部は角度54度で直線的に立ち上がり口縁部で内寄する 体部最大径4.8mm 底縁1/3がのみ盛り上がり中央がやや緩む	内外体部 外体部	横ナデ ナデ 糸切り難し	色潤 土質	黄白色 少量の彩粒混じり 均質
3	土師器	皿	口径 7.7 径長 6.1	高 1.2	50°	体部は角度50度で立ち上がり内寄する。 体部最大径4.8mm 底縁1/3がのみ盛り上がり中央がやや緩む	内体部 外体部	横ナデ ナデ 糸切り難し	色潤 土質	褐色 少量の彩粒混じり 均質
4	土師器	皿	口径 8.1 径長 6.7	高 1.6	50°	体部は角度50度で立ち上がり口縁部で内寄する。 体部最大径4.8mm 底縁1/3がのみ盛り上がり中央がやや緩む	内体部 外体部	横ナデ ナデ 糸切り難し	色潤 土質	褐色 少量の彩粒混じり 均質
5	土師器	皿	口径 8.2 径長 6.8	高 1.7	50°	体部は角度50度で立ち上がり内寄する。 体部最大径4.8mm 底縁1/3がのみ盛り出し中央でやや盛り上がる	内体部 外体部	横ナデ ナデ 糸切り難し	色潤 土質	赤褐色 少量の彩粒混じり 均質

6	土師器	杯	Ⅱ層	口径11.9 底径7.8	高2.6 50°	体前は角形35度で直線的に立ち口縁部で内寄する。 体底最大径6mm 底面が中央で盛り上がり中央がやや窪む	内外体面 内面 外面	横ナデ ナデ 未切り磨し	色調 粘土 灰	黄褐色 少量の砂粒混じり 地灰
7	瓦器	横口鉢	Ⅱ層	口径 台径	高	体前が広く内寄して立ち上がる。 体底厚7mm	内体面 外体面	へうぎき 磨滅する	色調 粘土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり
8	須恵系須恵質土器	横口鉢	Ⅱ層	口径 台径	高	口縁部が直線的に立つ 口唇は灰白色	内面 外面	横ナデ成形 横ナデ成形	色調 粘土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり
9	須恵系須恵質土器	横口鉢	Ⅱ層	口径 台径	高	口縁部が直線的に立つ 口唇は灰白色	内面 外面	横ナデ成形 横ナデ成形	色調 粘土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり
10	須恵系須恵質土器	横口鉢	Ⅱ層	口径 台径	高	口縁部が上方側につまみ出す 口唇は灰白色	内面 外面	横ナデ成形 横ナデ成形	色調 粘土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり
11	須恵質土器	甕口鉢	Ⅱ層	口径 台径	高	口唇は直線状	内面 外面	丁寧な横ナデ調整 ハケ目調整	色調 粘土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり
12	須恵質土器	甕口鉢	Ⅱ層	口径 台径	高	甕体部付近	内体面 外体面	ハケ目調整 横目調整	色調 粘土	灰褐色 地成 良好
13	常陸焼	体部	Ⅱ層	口径 台径	高	甕体部付近	内体面 外体面	ハケ目調整 一部二重目	色調 粘土	深褐色 灰緑色 少量の砂粒混じり
14	常陸焼	体部	Ⅱ層	口径 台径	高	甕体部付近	内体面 外体面	ハケ目調整 ハケ目調整	色調 粘土	赤褐色 灰緑色 少量の砂粒混じり
15	不明	体部	Ⅱ層	口径 台径	高	甕体部付近	内体面 外体面	ハケ目調整 -	色調 粘土	灰褐色 灰白色 少量の砂粒混じり
16	不明	体部	Ⅱ層	口径 台径	高	体部付近	内体面 外体面	-	色調 粘土	小豆色 横目 地成 良好
17	不明	体部	Ⅱ層	口径 台径	高	甕体部付近	内体面 外体面	ハケ目調整 ハケ目調整	色調 粘土	黄褐色 地成 少量の砂粒混じり
18	不明	底面	Ⅱ層	口径 台径	高	底面	内体面 外体面	ハケ目調整 ハケ目調整	色調 粘土	黄褐色 灰緑色 少量の砂粒混じり
19	磁石	Ⅱ層				黒密な研ぎ跡				
20	磁石	Ⅱ層				黒密な研ぎ跡				
21	磁石	Ⅱ層				粗い研ぎ跡				
22	磁石	Ⅱ層				粗い研ぎ跡				
23	金床石	Ⅱ層				研ぎ目跡				
	編	羽口	Ⅱ層							
	鉄片	多数	Ⅱ層							

SK1 出土遺物

番号	類別	器種	層	口径	底径	高・角度	形態	調整	備考	
1	土師器	皿	Ⅰ層	口径6.2 底径6.3	高1.2 2°	体前は角形35度で直線的に立ち口縁部で外縁する。 体底最大径3mm 底面が平	内外体面 内面 外面	横ナデ ナデ 未切り磨し	色調 粘土 灰	黄褐色 少量の砂粒混じり 地灰
2	瓦器	鉢	Ⅰ層	口径 台径	高	体前が広く内寄して立ち上がる。 体底厚4mm	内体面 外体面	へうぎき 磨滅する	色調 粘土	灰褐色 地成 少量の砂粒混じり
3	須恵系 高灰 須恵	Ⅰ層	口径 底径4.0	高	高灰の須恵 杯部は欠損 体底最大径1mm	内体面 外体面	ハケ目調整 ハケ目調整	色調 粘土	小豆色 地成 少量の砂粒混じり	
4	甕	把手	Ⅰ層			厚みのあるやや曲線な把手	内体面 外体面	磨滅する 粗い研ぎ跡	色調 粘土	赤褐色 地成 少量の砂粒混じり
5	白磁 V製	碗	Ⅰ層	口径 底径	高	口縁部は口縁が外に近く尖り外反する 体部は直線的にやや内寄する	内体面 外体面	コクロ引きの磨滅 コクロ引きの磨滅	磨滅 物	黄褐色 灰白色 少量の砂粒混じり
6	白磁 V製	碗	Ⅰ層	口径 底径	高	口縁部は口縁が外に近く尖り外反する 体部は直線的にやや内寄する	内体面 外体面	コクロ引きの磨滅 コクロ引きの磨滅	磨滅 物	黄褐色 灰白色 少量の砂粒混じり
7	白磁 V製	碗 高台	Ⅰ層	口径 底径6.2	高	高台は直線形状で薄い 無軸 中央が突出する	内体面 外体面	中央20mm幅10mmの軸がキ取り -	磨滅 物	黄褐色 灰白色 少量の砂粒混じり

SK2 出土遺物

番号	類別	器種	層	口径	底径	高・角度	形態	調整	備考	
1	土師器	杯	Ⅰ層	口径15.6 底径8.2	高3.5 37°	体前は角形37度で内寄して立ち口縁部で外縁する。 体底最大径5mm 底面が中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面	横ナデ ナデ 未切り磨し	色調 粘土 灰	褐色 少量の砂粒混じり 地成
2	土師器	杯	Ⅰ層	口径17.0 底径10.9	高3.1 33°	体前は角形33度で内寄して立ち上がる。 体底最大径4mm 底面が平周で中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面	横ナデ ナデ 未切り磨し	色調 粘土 灰	褐色 少量の砂粒混じり 地成
3	土師器	杯	Ⅰ層	口径14.0 底径8.5	高3.8 59°	体前は角形59度で直線的に立ち上がる。 体底最大径6mm 底面が直線的に中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面	横ナデ ナデ 未切り磨し	色調 粘土 灰	赤褐色 少量の砂粒混じり 地成
4	土師器	皿	Ⅰ層	口径6.6 底径5.6	高1.1 33°	体前は角形33度で内寄する材料に近く立ち上がる。 体底最大径3mm 底面が中央でより中央にかけて窪む	内外体面 内面 外面	横ナデ ナデ 未切り磨し	色調 粘土 灰	褐色 少量の砂粒混じり 地成

5	土師器	皿	1層	口径 9.2 底径 7.0	高 1.2 31°	体面は内外両面で内湾して立ち口縁部で外縁する 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち中央で盛り上がる	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
6	土師器	皿	1層	口径 9.1 底径 6.8	高 1.2 33°	体面は内外両面で内湾して立ち上がる。 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち窪み平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	褐色 少量の砂粒混じり 良
7	土師器	皿	1層	口径 9.0 底径 6.8	高 1.2 45°	体面は内外両面で直線的に立ち上がる。 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち中央で盛り上がる	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	褐色 少量の砂粒混じり 良
8	土師器	皿	1層	口径 9.6 底径 7.7	高 1.2 43°	体面は内外両面で内湾状に立ち上がる。 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
9	土師器	皿	1層	口径 8.0 底径 6.0	高 1.2 40°	体面は内外両面で内湾して立ち上がる。 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	褐色 3mmの砂粒混じり 良
10	瓦器	甕	1層	口径 9.6 底径 -	高 2.2	外縁は内に45度で立ち上がり高さ15cmで底面する 体面最大径 5mm 内面はなめらかに磨面する	外体面 内体面	ナデ ヘラ磨き	色調 粘土 灰灰	灰褐色 砂粒混じり 良
11	白磁	碗	1層	口径17.8 底径 -	高 -	口径は口縁が尖り小さく外反する 体面は直線的に立つ 内面は足込み輪か糸取り	内体面 外体面	コロボ引きの模範 コロボ引きの模範	磁胎 釉	青灰 薄 白色 乳白色
12	白磁	碗	1層	口径16.4 底径 6.5	高 6.3	口径は口縁が中央に尖り外反する 体面は直線的に立つ 内面は足込み輪か糸取り 辻縁	内体面 外体面	コロボ引きの模範 コロボ引きの模範	磁胎 釉	青灰 薄 乳白色 灰白色
13	白磁	碗 口縁	1層	口径16.0 底径 -	高 -	口径は口縁が大きい 玉縁の下に一糸の模範を有する	内体面 外体面	コロボ引きの模範	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 灰黄色
14	石罫	口縁	1層		厚さ 185g	内面 粗粒な調整 外面 丁寧な削り調整				

SK3 出土遺物

番号	類別	器種	層	口径	底径	高・角度	形態	内面	外面	備考
1	土師器	環	1層	口径13.2 底径 7.0	高 3.3 39°	体面は内外両面で内湾して立ち上がる。 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち中央で盛り込む	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	褐色 少量の砂粒混じり 良
2	土師器	皿	1層	口径 6.8 底径 6.8	高 1.3 60°	体面は内外両面で内湾状に立ち上がる。 体面最大径 5mm 底径は高で真かに落ち平坦	内外体面 内底面 外底面	横ナデ ナデ 糸切り磨し	色調 粘土 灰灰	黄褐色 少量の砂粒混じり 良
3	瓦器	椀 高台	1層	口径 底径 -	高 -	体面は内湾して立ち上がる。体面厚5mm 高台は内径 4cm高台	内体面 外体面	磨面へう磨き 磨面へう磨き	色調 粘土	灰色 薄 良
4	瓦器	椀 高台	1層	口径 底径 -	高 -	底面は平坦 高台は内径 4cm高台で厚く内に傾く	内体面 外体面	磨面へう磨き -	色調 粘土	灰色 薄 良
5	須恵系須恵土器	甕 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	口径は口縁を上方よりつまみ出す	内面 外面	横ナデ成形	色調 灰土	黄灰色 薄 少量の砂粒混じり 良
6	須恵系	甕 体部	1層	口径 底径 -	高 -	體幹部 厚1mm	内面 外面	クシ目 棒ナデ	色調 粘土	灰色 薄 良好 少量の砂粒混じり 良
7	須恵系	甕 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	環身口縁部	内面 外面	ハツ目 ハツ目	色調 粘土	黄灰色 薄 少量の砂粒混じり 良
8	須恵系	甕 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	環身口縁部	内面 外面	ハツ目 ハツ目	色調 粘土	灰色 薄 少量の砂粒混じり 良
9	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	港弁は縮んで縁が入る	内体面 外体面	コロボ引きの模範 港弁は明細に揃う	磁胎 釉	青灰色 薄 灰白色 混色
10	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	港弁は縮む	内体面 外体面	コロボ引きの模範 港弁は彫りかまよい	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 混色
11	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	外面は文様縁 内面は草花文様 縁はガラス質で貫入が生じる	内体面 外体面	草花文様 -	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 灰黄色
12	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	外面は文様縁 内面は草花文様 縁はガラス質で貫入が生じる	内体面 外体面	草花文様 -	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 灰黄色
13	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	港弁は縮んで縁が入る	内体面 外体面	コロボ引きの模範 港弁は彫りかまよい	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 混色
14	白磁	碗 口縁	1層	口径 底径 8.0	高 -	外面は現在を生じる 内外とも貫入が生じる 内面の足込み口縁部が人形模範文が施される	内体面 外体面	模範文様 高台中程まで削りかかす	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 混色
15	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 5.7	高 -	外面は文様縁 内面は草花文様 縁はガラス質で縁かく貫入が生じる	内体面 外体面	草花文様 -	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 混色
16	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 6.6	高 -	彫入には(金五重)のスタンプを押されるが 字は不明	内底面 外底面	- 浅く削り高台を出す	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 混色
17	青磁	碗 口縁	1層	口径 底径 5.2	高 -	内面はへらによる片彫り、筆文様が施される	内体面 外底面	へら彫り、筆文様 底面の輪か手取り	磁胎 釉	青灰 薄 灰白色 混色
18	白磁	碗 口縁	1層	口径 底径 -	高 -	内面はへらによる片彫り、筆文様が施される	内底面 外底面	へら彫り、筆文様 底面の輪か手取り	磁胎 釉	青灰 薄 白色 混色
19	石罫	口縁	1層	口径 底径 -	厚さ 151g 重量 22g	内面 丁寧な調整 外面 丁寧な削り調整				
20	石罫	口縁	1層	口径 底径 4.2 重量 1.5	厚さ 0.6 重量 22g	外面はなめらかに調整する				

21	土埴	1層	口径 3.7 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0 口径 3.0 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0 口径 3.0 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0	高さ 3.6 高さ 1.2 高さ 0.3 高さ 1.2 高さ 0.3 高さ 1.0 高さ 3.0 高さ 1.0 高さ 0.3 高さ 1.2 高さ 0.3 高さ 1.0	形状 円筒形 口径 3.7 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0 口径 3.0 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0	色調 褐色 土質 良 焼成 良 丁寧な調整
22	土埴	1層	口径 3.6 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0 口径 3.0 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0	高さ 3.6 高さ 1.2 高さ 0.3 高さ 1.2 高さ 0.3 高さ 1.0 高さ 3.0 高さ 1.0 高さ 0.3 高さ 1.2 高さ 0.3 高さ 1.0	形状 円筒形 口径 3.6 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0 口径 3.0 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.2 口径 0.3 口径 1.0	色調 褐色 土質 良 焼成 良 丁寧な調整 (半分欠)

SK 4 出土遺物

番号	種類	器種	層	口径	高さ	角度	形状	調整	備考
1	土埴器	環	1層	口径 12.8 口径 8.4	高さ 3.6	90°	体部は角形60度で外筒して立ち口縁部で内筒する 体部最大径 5mm 底面は平中で僅かに窪み中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 赤褐色 土質 少量の砂粒混じり 良
2	土埴器	環	1層	口径 11.2 口径 7.0	高さ 2.7	42°	体部は角形60度で底筒的に立ち口縁部で内筒する 体部最大径 5mm 底面は平中で僅かに窪み中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 褐色 土質 少量の砂粒混じり 良
2-2	土埴器	環	1層	口径 12.3 口径 7.2	高さ 3.4	52°	体部は角形60度で立ち口縁部で内筒して外筒する 体部最大径 5mm 底面は平中で僅かに窪み中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 褐色 土質 少量の砂粒混じり 良
3	土埴器	皿	1層	口径 8.8 口径 6.3	高さ 1.5	40°	体部は角形60度で内筒して立ち口縁部で外筒する 体部最大径 5mm 底面は平中で僅かに窪み中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 褐色 土質 少量の砂粒混じり 良
4	瓦製土器	鉢口縁	1層	口径 台径 -	高さ -	-	口縁部は平直	内面 外面 ハケ目 調整する	色調 茶褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
5	青磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 青褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
6	青磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 青褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
7	青磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 青褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
8	青磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 青褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
9	青磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 青褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
10	白磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 灰白色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
11	白磁	皿	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 灰白色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり

SK 5 出土遺物

番号	種類	器種	層	口径	高さ	角度	形状	調整	備考
1	土埴器	皿	1層	口径 8.7 口径 6.2	高さ 1.4	51°	体部は角形50度で外筒して立ち口縁部で内筒する 体部最大径 4mm 底面は平中で僅かに窪み中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 赤褐色 土質 少量の砂粒混じり 良
2	瓦器	口縁	1層	口径 台径 -	高さ 7.1	-	体部は角形50度で外筒して立ち口縁部で内筒する 体部最大径 5mm	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 茶褐色 土質 良 焼成 良
3	青磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 青褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
4	白磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 灰白色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
5	白磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 灰白色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
6	白磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 灰白色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
7	土埴	1層	口径 4.4 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.0	高さ 3.6 高さ 1.0 高さ 0.3 高さ 1.0 高さ 0.3 高さ 1.0	形状 円筒形 口径 4.4 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.0 口径 0.3 口径 1.0	色調 褐色 土質 良 焼成 良 丁寧な調整			

SK 6 出土遺物

番号	種類	器種	層	口径	高さ	角度	形状	調整	備考
1	瓦器	碗	1層	口径 台径 -	高さ 6.5	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 茶褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
2	瓦器	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 茶褐色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり
3	白磁	碗	1層	口径 台径 -	高さ -	-	底面は平直	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 灰白色 土質 良 焼成 良 少量の砂粒混じり

SK 8 出土遺物

番号	種類	器種	層	口径	高さ	角度	形状	調整	備考
1	土埴器	環	1層	口径 12.3 口径 6.8	高さ 3.6	49°	体部は角形60度で外筒して立ち口縁部で内筒する 体部最大径 5mm 底面は平中で僅かに窪み中央で盛り上がる	内外体面 内面 外面 横ナデ ナデ 永切り無し	色調 褐色 土質 良 焼成 良

2	土器群	環	I層	口径3.6 底径2.5	高3.5 58°	体部は内径5度で内筒して立ち口縁部で内縮する 体部最大径5mm 底径2.5平直	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	褐色 少量の砂粒混じり 良
3	土器群	皿	I層	口径3.8 底径2.7	高2.0 47°	体部は内径5度で内筒状に立ち上がる。 体部最大径5mm 底径2.5から中央に向けて緩む	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
4	土器群	皿	I層	口径7.5 底径4.8	高2.0 51°	体部は内径5度で内筒して立ち口縁部で外縮する 体部最大径4mm 底径2.5から平直に向けて緩み中央は緩り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	青褐色 少量の砂粒混じり 良
5	瓦器 (土師製)	椀 高台	I層	口径— 口径5.9	高—	内径面は平直 高台は直い。斜行高台でやや外に離れ出す	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 回数ベテリ	色黒 粘土 褐色	灰色 褐色 少量の砂粒混じり 良
6	白磁 瓦器	椀 口縁	I層	口径 底径—	高—	口縁部の玉縁が大きい	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 灰白色 厚い 灰白色
6-2	白磁 瓦器	椀 高台	I層	口径 底径6.0	高—	内筒見込部の輪を輪状にカキ取る	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 見込部の輪を輪状にカキ取る 高台は平直	磁胎 物	精良 厚い 灰白色 灰白色
7	青磁 I-5類	椀 口縁	I層	口径 底径—	高—	細い。逆弁	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 厚い 青白色 黄緑色
8	土塊		I層	長さ3.9 底径1.1	孔径0.4 重量0.3	色黒 褐色 粘土 砂粒混じり 褐色 良 丁寧な調整				
9	土塊		I層	長さ4.2 底径0.9	孔径0.3 重量3g	色黒 不褐色 粘土 良 褐色 良 丁寧な調整 やや粗粒				
10	土塊		I層	長さ4.2 底径0.9	孔径0.3 重量4g	色黒 茶褐色 粘土 良 褐色 良 丁寧な調整				
11	土塊		I層	長さ3.8 底径0.9	孔径0.3 重量2.3g	色黒 灰褐色 粘土 良 褐色 良 丁寧な調整				

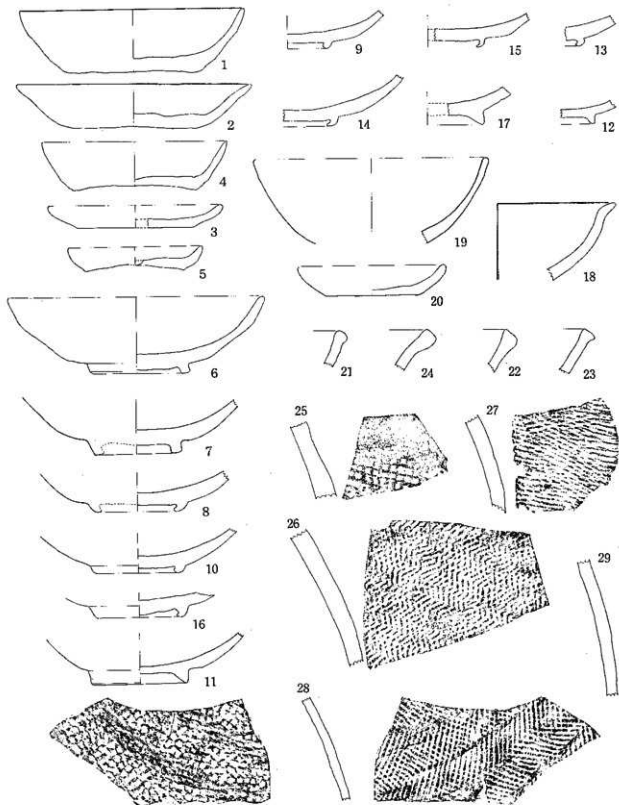
SK9 出土遺物

番号	類別	種類	層	口径	底径	高・角度	形態	調整	備考	
1	土器群	環	I層	口径3.5 底径1.0	高3.6 56°	体部は内径5度で内筒して立ち上がる。 体部最大径9mm 底径2.5平直で中央で僅かに盛り上がる	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	褐色 少量の砂粒混じり 良
2	土器群	環	I層	口径4.8 底径1.2	高2.6 58°	体部は内径5度で内筒して立ち上がる。 体部最大径5mm 底径2.5平直	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
3	土器群	環	I層	口径4.0 底径1.5	高2.8 52°	体部は内径5度で内筒して立ち口縁部で外縮する 体部最大径5mm 底径2.5平直	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
4	土器群	皿	I層	口径3.4 底径1.4	高1.0 39°	体部は内径5度で直線的に緩く立ち上がる。 体部最大径3mm 底径2.5からへこむ	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	灰褐色 少量の砂粒混じり 良
5	土器群	皿	I層	口径3.0 底径1.1	高1.0 32°	体部は内径5度で内筒して緩く立ち上がる。 体部最大径3mm 底径2.5からへこむ 腹面は厚い	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	褐色 少量の砂粒混じり 良
5-2	土器群	皿	I層	口径3.3 底径1.1	高1.6 53°	体部は内径5度で内筒状に立ち上がる。 体部最大径5mm 底径2.5平直	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	赤褐色 少量の砂粒混じり 良
6	瓦器	杯	I層	口径3.2 底径3.0	高3.0 38°	体部は内径5度で直線的に立ち口縁部で内縮する 体部最大径5mm 底径2.5平直	内外体面 内径面 外径面	横ナデ、へら磨き ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	灰褐色 黄灰色 少量の砂粒混じり ややあまい
7	瓦器	杯	I層	口径3.6 底径3.2	高2.3 42°	体部は内径5度で直線的に立ち上がる 体部最大径5mm 底径2.5から中央に向けて緩やかに緩む	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	灰褐色 良 あまい
8	瓦器	皿	I層	口径3.4 底径2.0	高1.2 54°	体部は内径5度で緩く内筒して立ち上がる。 体部最大径5mm 底径2.5平直	内外体面 内径面 外径面	横ナデ ナデ 丁寧な調整 糸切り難し	色黒 粘土 褐色	灰褐色 良 ややあまい
9	実器系須恵製土器	椀口縁	I層	口径— 底径—	高—	口縁部のみ半筒状	内面 外面	クシ目 ナデ、縦方向のクシ目	色黒 粘土 褐色	灰色 褐色 少量の砂粒混じり 良
10	実器系須恵製土器	椀口縁	I層	口径— 底径—	高—	口縁部のみ半筒状であるが僅かに下方側につまむ	内面 外面	クシ目、クシ目 ナデ混じり	色黒 粘土 褐色	灰褐色 褐色 少量の砂粒混じり 良
11	実器系須恵製土器	底面	I層	口径— 底径—	高—	体部は内径5度で立ち上がる (10と同一個体)	内面 外面	クシ目 ナデ	色黒 粘土 褐色	灰褐色 褐色 少量の砂粒混じり 良
12	実器系須恵製土器	椀口縁	I層	口径— 底径—	高—	体部は内径5度で立ち上がる (9と同一個体)	内面 外面	クシ目 ナデ、縦方向のクシ目	色黒 粘土 褐色	灰色 褐色 少量の砂粒混じり 良
13	白磁 瓦器	椀 口縁	I層	口径— 底径—	高—	口縁部の玉縁が大きく体部は厚い	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 厚い 灰白色 淡灰白色
14	白磁 瓦器	椀 口縁	I層	口径— 底径—	高—	口縁部の輪がカキ取られた「口突」 口縁部は外反する	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 厚い 灰白色 灰白色
15	白磁 瓦器	椀 口縁	I層	口径— 底径—	高—	内径面上部に二つの紋線を有する 内面には花文を有する	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 厚い 灰白色 黄褐色
16	青磁 I-4類	椀 口縁	I層	口径3.7 底径1.5	高さ6.7	六輪花文口縁文 内面は上部に二つの紋線を有する	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 厚い 青白色 黄緑色
17	青磁 I-5類	椀 口縁	I層	口径— 底径—	高—	逆弁は縦立に形は無い	内外体面 内径面 外径面	—	磁胎 物	精良 厚い 灰白色 黄緑色

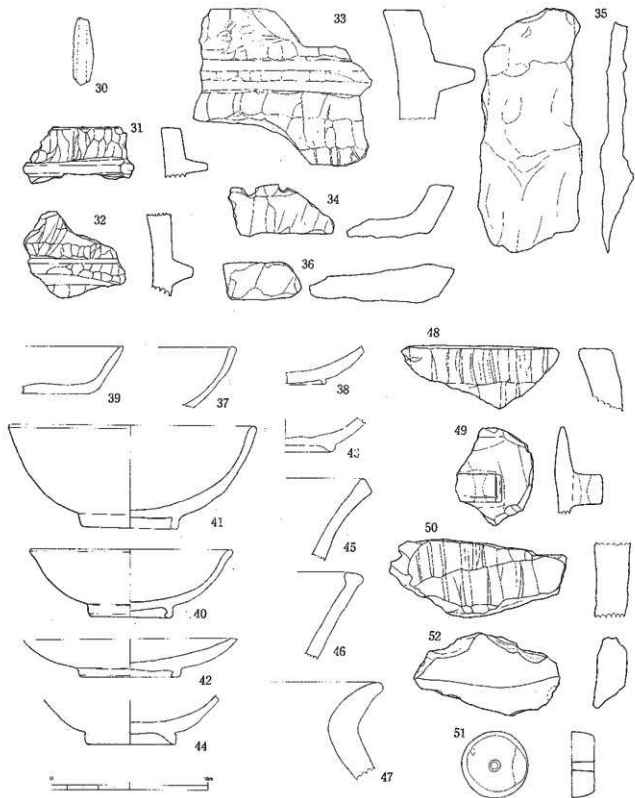
18	白磁 瓦葺	皿	I層	口径10.4 底径6.9	高 1.7	口縁部部の釉を削り取る「口欠」	内外面 外表面	見込中央がやや盛り上がる 底面まで施装する	磁白 釉	褐色 深い	白色 黄灰白色
19	陶器	不明	I層	口径 底径	- 高 -	器表面はザラつく	内外面 外表面	褐色色の釉 口縁部から緑褐色 体部に黄褐色	色調 緑土	赤褐色 黄	褐色 少量の砂粒混じり
20	陶器	不明	I層	口径 底径	- 高 -	器表面はザラつく	内外面 外表面	緑褐色色の釉 口縁部から体部にかけて赤褐色	色調 緑土	赤褐色 黄	褐色 少量の砂粒混じり
21	石函	口縁	I層	口径 底径	- 厚 - 高さ	内面 丁字な調整 外面 丁字な隅り調整 体部に孔を穿つ					

SK10 出土遺物

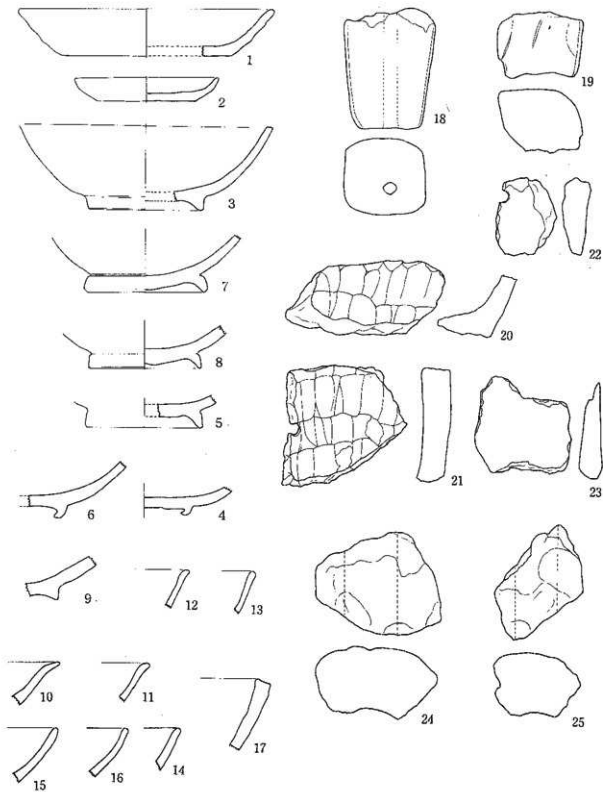
番号	類別	器種	層	口径	底径	高	角度	形態	調査	備考			
1	土師器	坏	I層	口径16.6 底径11.3		高 3.0 22°		体部は角径50度で内筒して立ち口縁部が外続する 体全長大厚 8 mm 底面は平皿	内外面 内表面 外表面	黄ナデ ナデ 未切り施し	丁字な調整	色調 褐色 緑土	褐色 黄 少量の砂粒混じり
2	土師器	坏	I層	口径 底径		高 3.7 23°		体部は角径50度で浅く立ち縁やかに内筒する 体全長大厚 5 mm 底面は平皿	内外面 内表面 外表面	黄ナデ ナデ 未切り施し	丁字な調整 カーボン付着	色調 褐色 緑土	褐色 黄 少量の砂粒混じり
3	土師器	坏	I層	口径 底径		高 3.1 54°		体部は角径50度で直線的に立ち口縁部で内筒する 体全長大厚 6 mm 底面は平皿	内外面 内表面 外表面	黄ナデ ナデ 未切り施し	丁字な調整	色調 褐色 緑土	褐色 黄 少量の砂粒混じり
4	土師器	皿	I層	口径 3.2 底径 6.7		高 1.5 53°		体部は角径50度で外筒状に深く立つ 体全長大厚 5 mm 底面は平皿で浅く盛り上がり平皿	内外面 内表面 外表面	黄ナデ ナデ 未切り施し	丁字な調整	色調 褐色 緑土	褐色 黄 2mmの砂粒混じり 少量の全盛母
5	白磁 瓦葺	丸 口縁	I層	口径 底径		高 -		口縁部の玉縁は大きく体部は深い 外面は底上位に一条の線がめぐる	内表面 外表面	コケロの線引く 僅かに気色を有する		磁白 釉	褐色 深い 黄灰白色



第1圖 SD1 I層・II層・III層・IV層出土遺物実測図①(1~29)

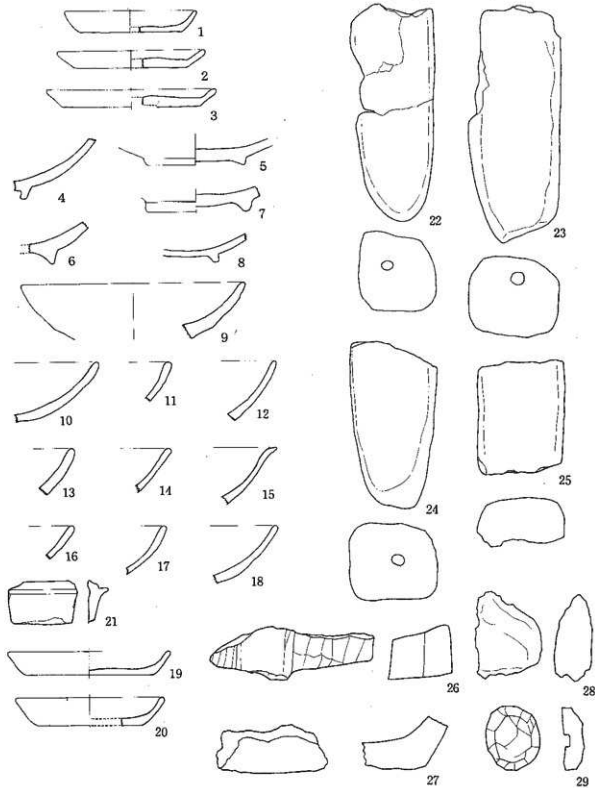


第2圖 SD1 I層・II層・III層・IV層出土遺物実測圖②(30~52)



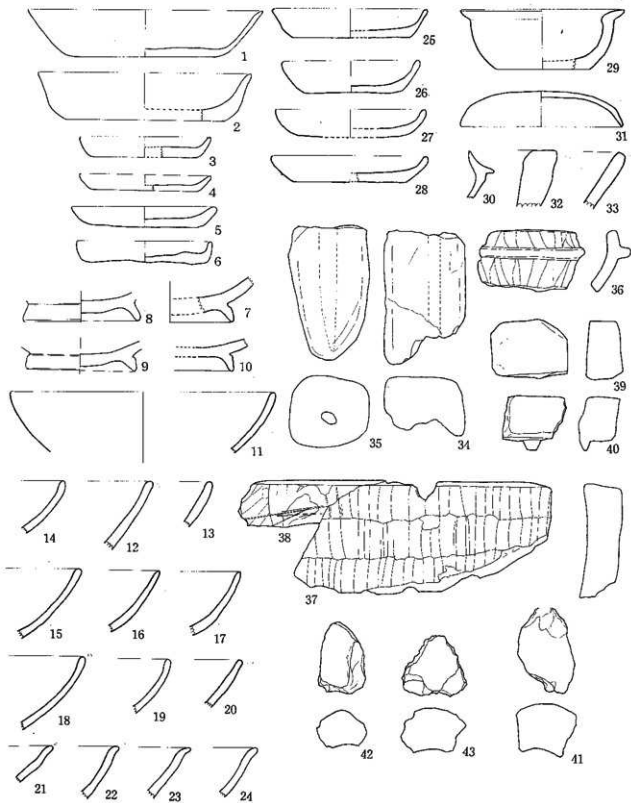
第3圖 SD2 II層出土遺物実測圖(1~25)





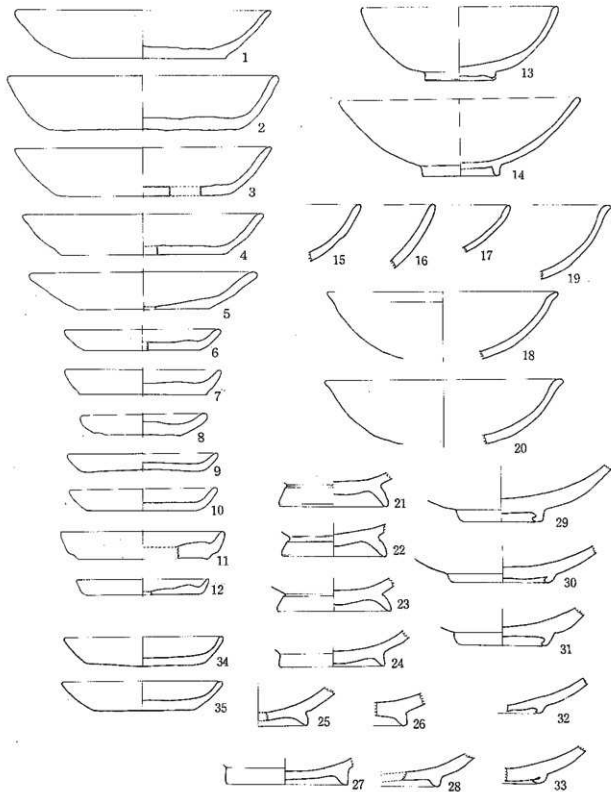
第4图 SD2 Ⅲ層出土遺物実測図(1~29)





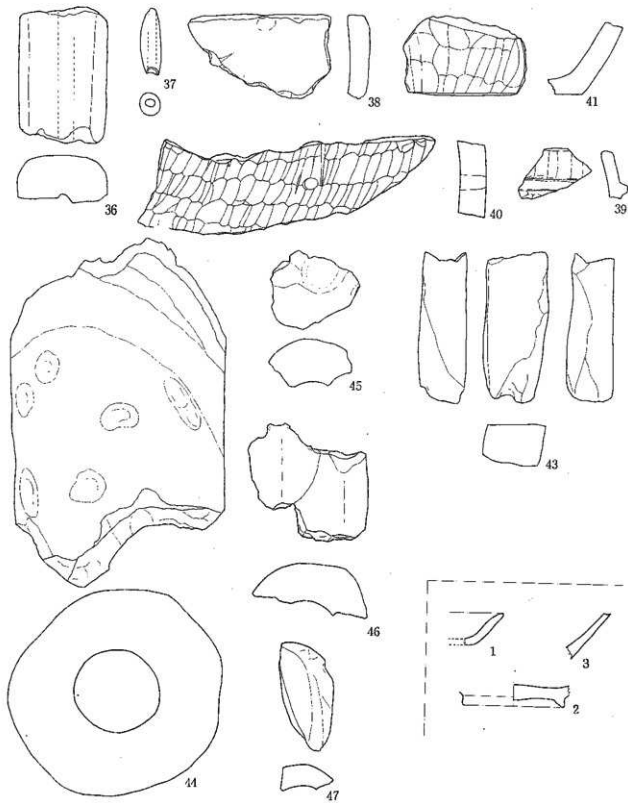
第5图 SD2 拡張Ⅱ層出土遺物実測図(1~43)





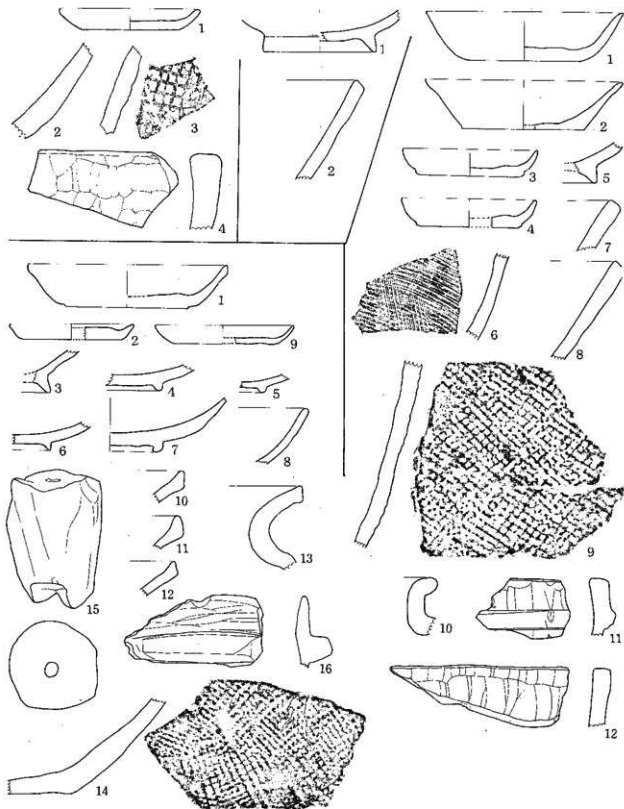
第6圖 SD2 坩張Ⅲ層出土遺物實測圖①(1~35)



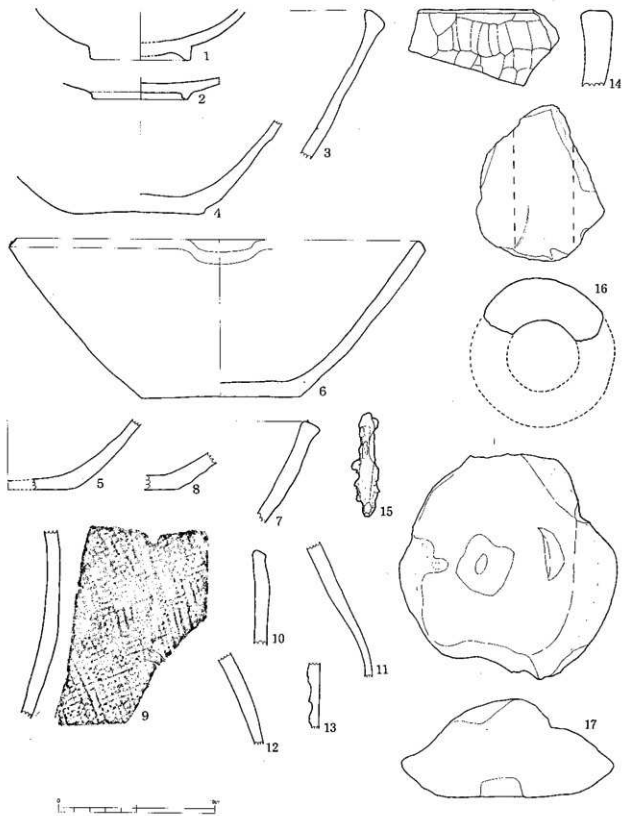


第7图 SD2 拡張Ⅲ層出土遺物実測図② (36~47)
 SD2 拡張井戸遺構出土遺物実測図 (1~3)

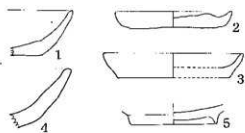
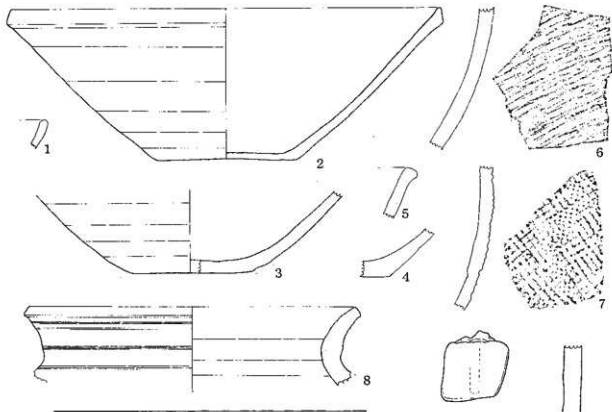
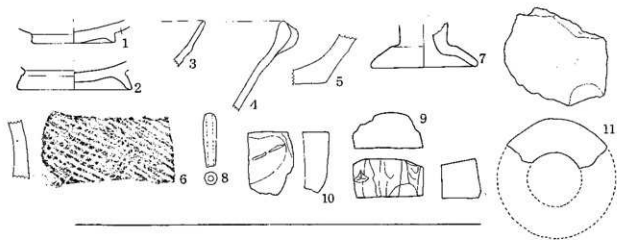




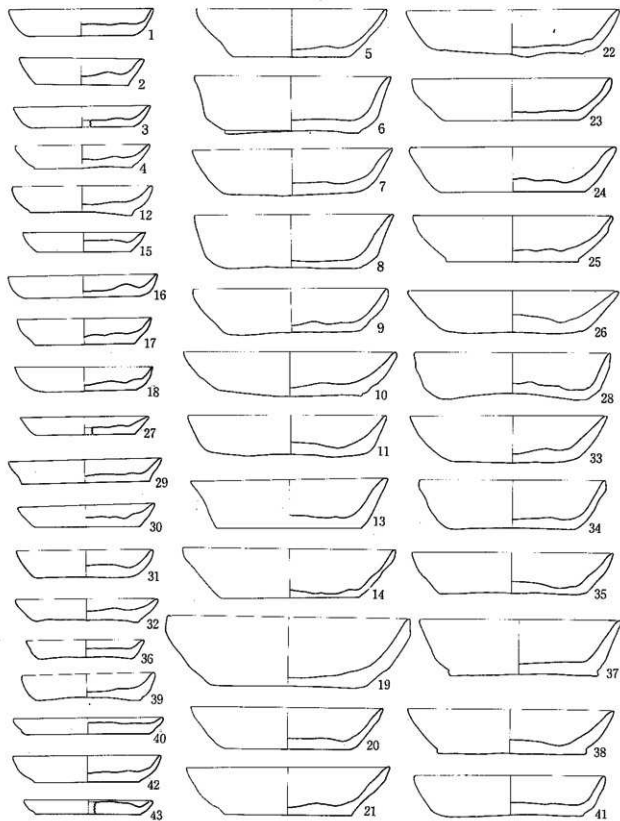
第8圖 SD3 IV層出土遺物實測圖(1~4)左上
 SD4 II層出土遺物實測圖(1~16)左下
 SD5 III層出土遺物實測圖(1~2)中上
 SD6 I層、II層、III層、V層出土遺物實測圖(1~12)右



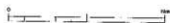
第9圖 SD8 II層出土遺物実測圖(1~17)

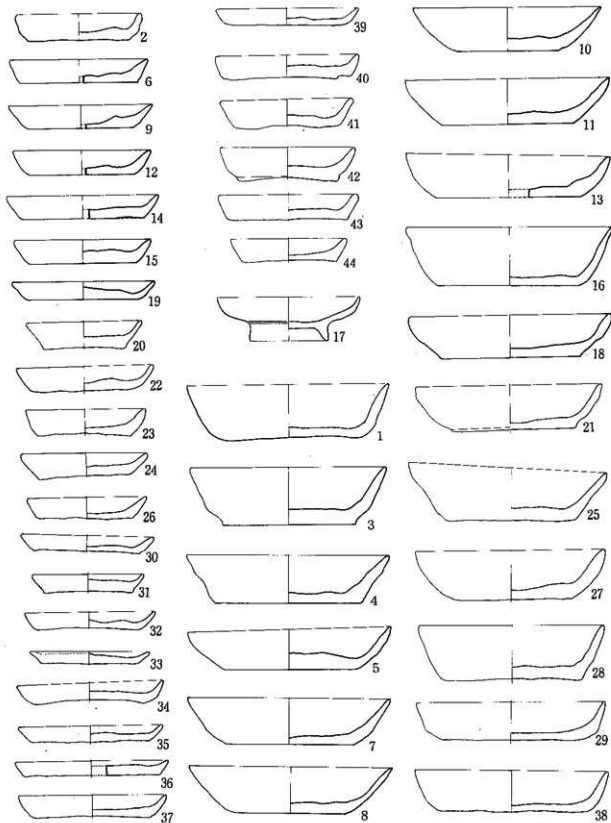


第10圖 SD8 IV層出土遺物実測図(1~11)上
SD8 VII層出土遺物実測図(1~10)中
SD8 VIII層出土遺物実測図(1~5)下

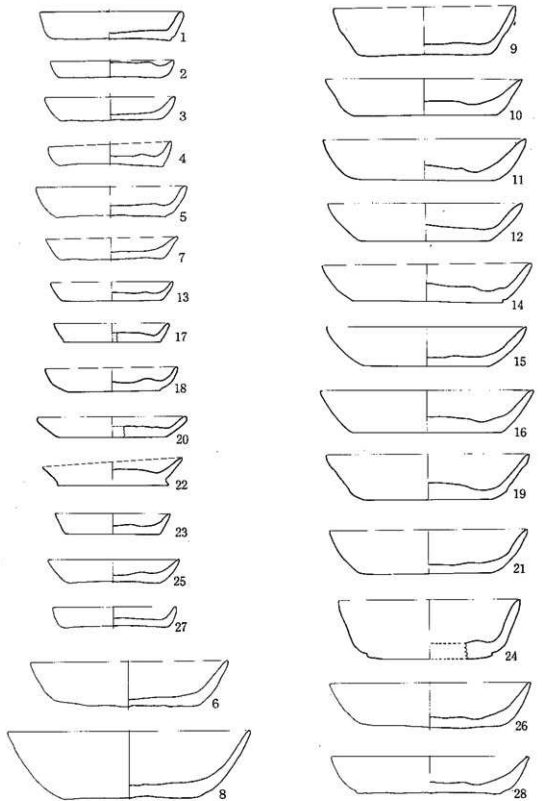


第11圖 SDB II層出土土師器実測圖(1~43)

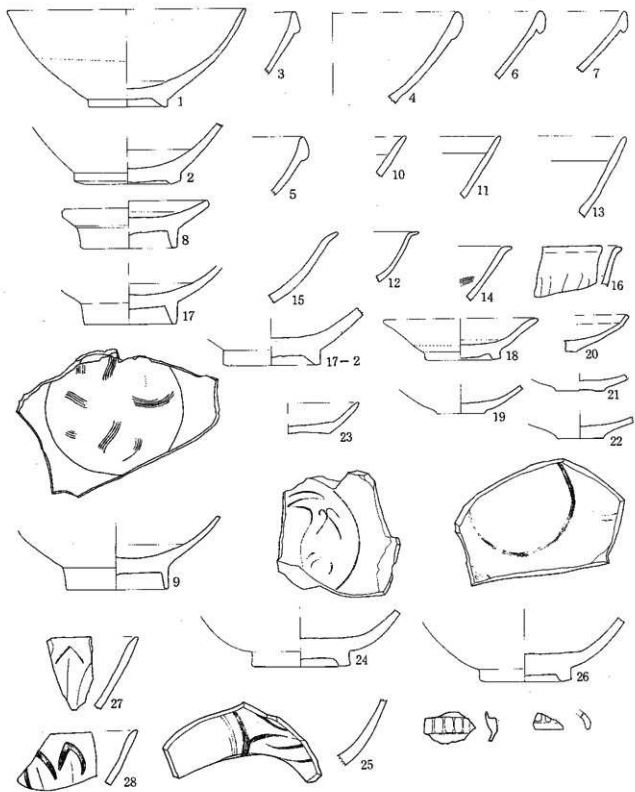




第12圖 SDB IV層出土土師器実測圖(1~44)

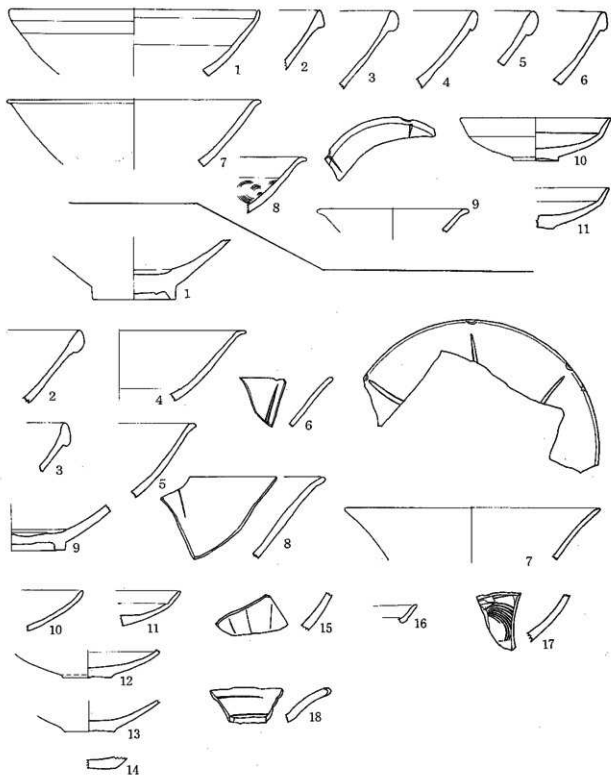


第13圖 SD8 VII層出土土師器実測圖(1~28)



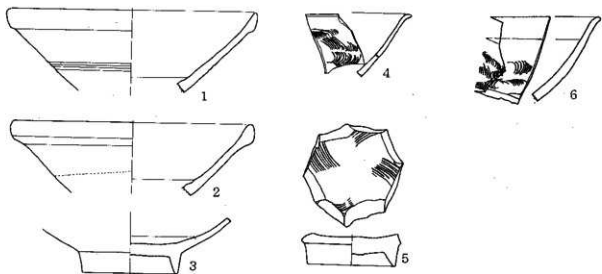
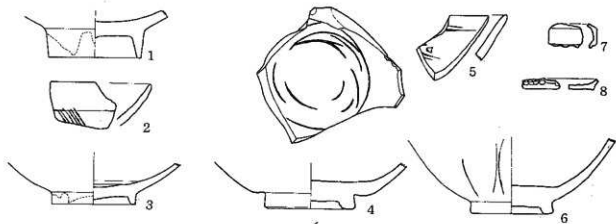
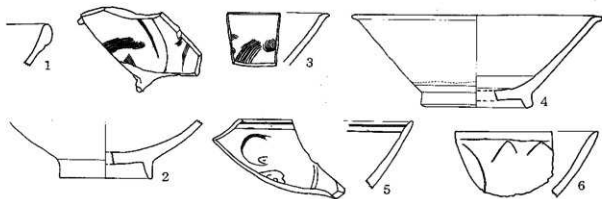
第14圖 SD1 出土白磁・青磁突圓圖(1~29)





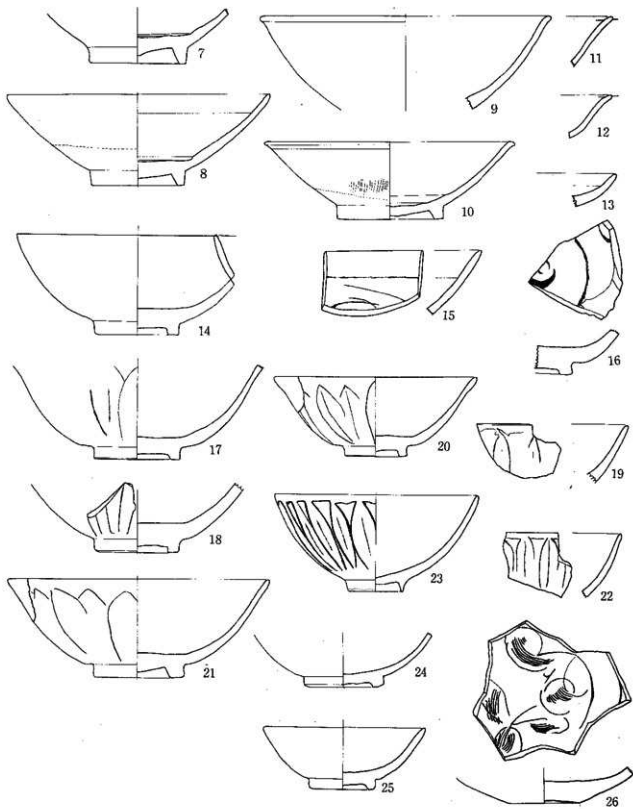
第15圖 SD2 出土白磁実測圖(1~11)上
SD2 拡張出土白磁・青磁実測圖(1~18)下





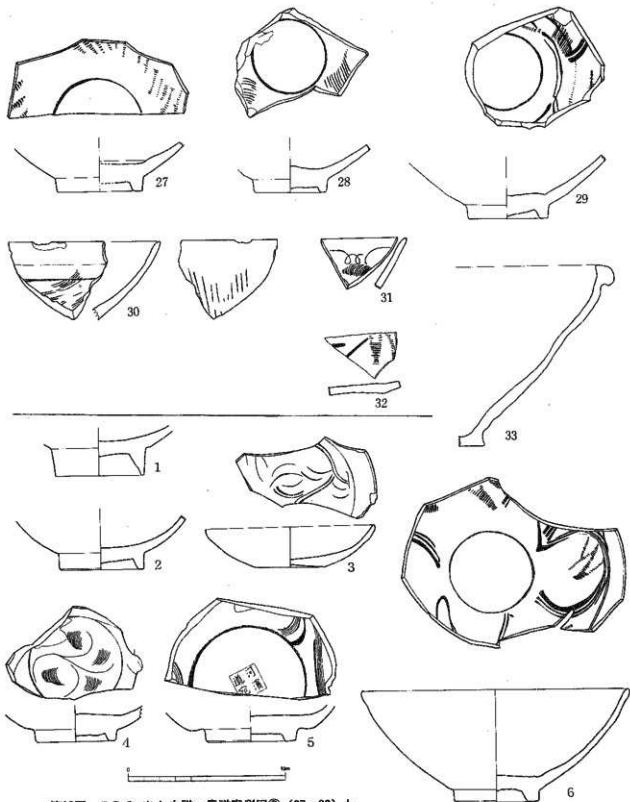
第16圖 SD4 出土白磁・青磁実測圖(1~6)上
 SD6 出土白磁・青磁実測圖(1~8)中
 SD8 出土白磁・青磁実測圖①(1~6)下



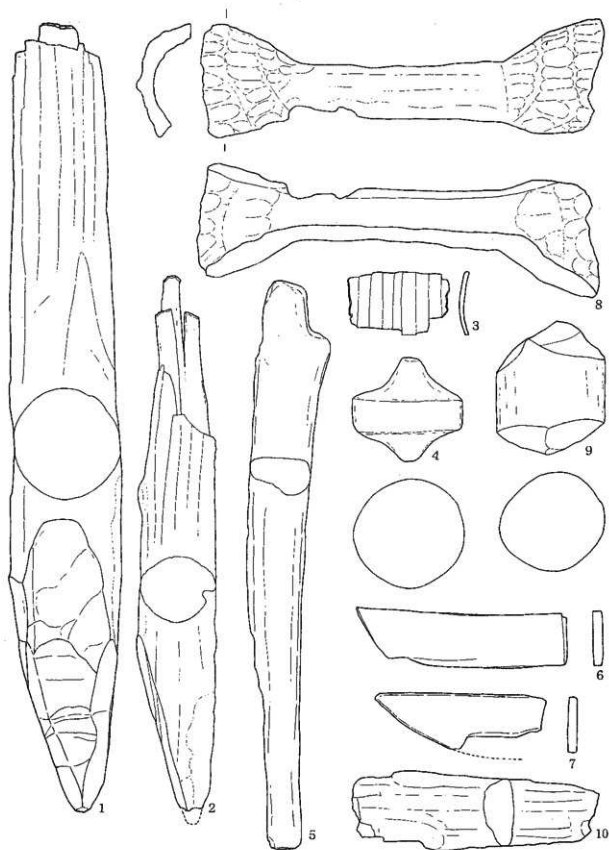


第17图 SD8 出土白磁·青磁实测图②(7~26)



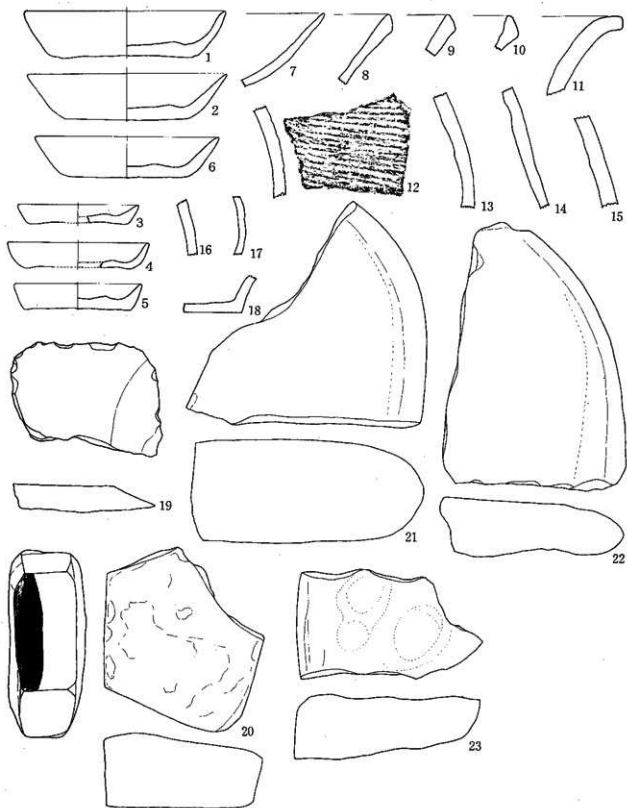


第18図 SD8 出土白磁・青磁実測図③ (27~32) 上
 SD8 出土輸入陶器実測図 (33)
 SD2、4、6、8 出土墨書、刻印のある白磁・青磁 (1~6) 下

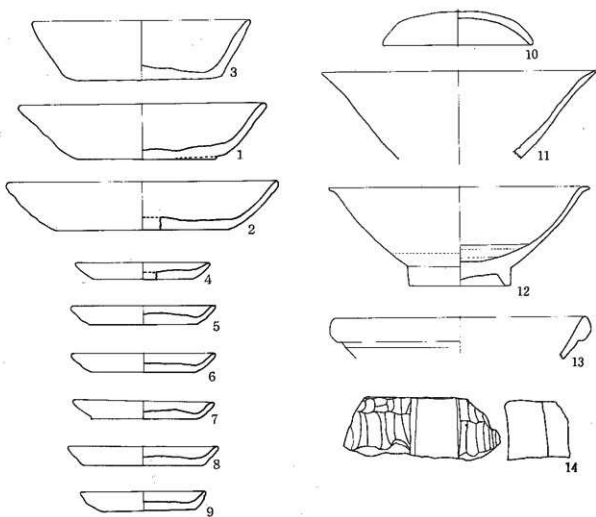
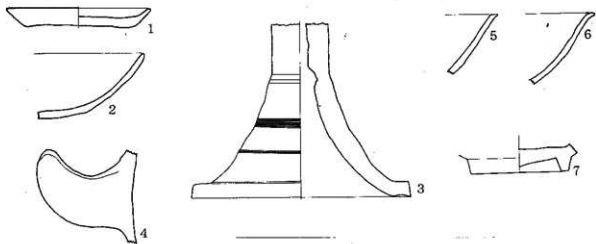


第19圖 SD 1、2、4 出土木製品実測圖 (1~10)



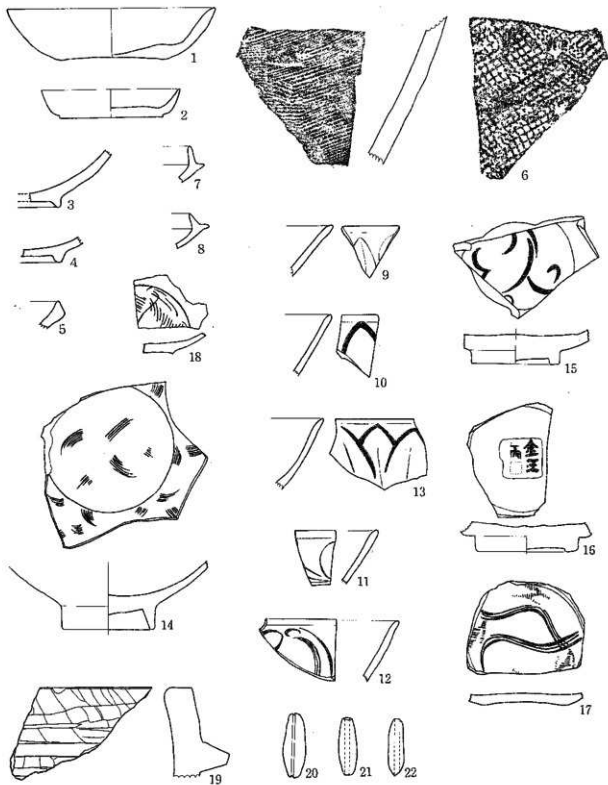


第20图 G-4·5区 SX1 出土物实测图(1~23)



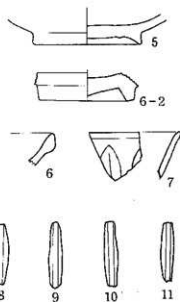
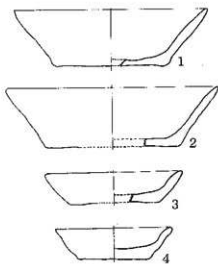
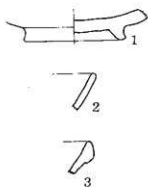
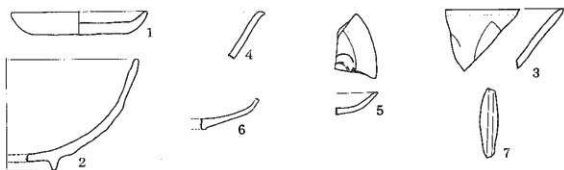
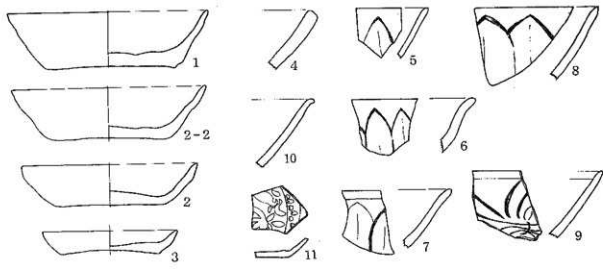
第21図 SK1 出土遺物実測図(1~7)上
SK2 出土遺物実測図(1~14)下





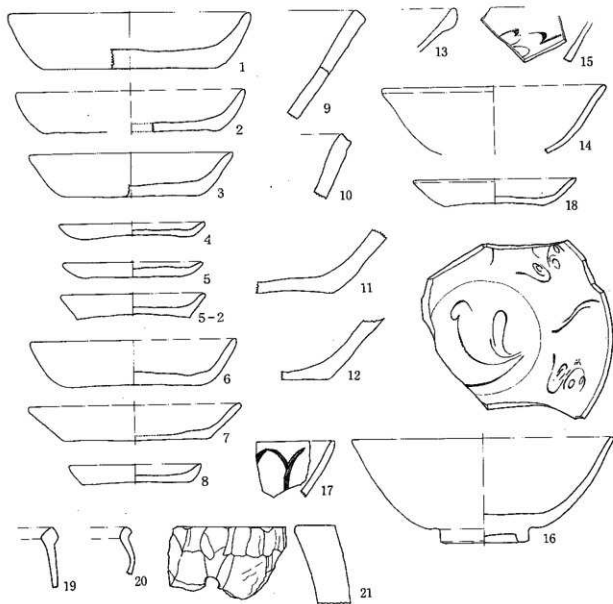
第22圖 SK3 出土遺物実測圖(1~22)





第23图 SK4 出土遺物実測図(1~11)上
 SK5 出土遺物実測図(1~7)中
 SK6 出土遺物実測図(1~3)左下
 SK8 出土遺物実測図(1~11)右下





第24図 SK9 出土遺物実測図(1~21)上
SK10 出土遺物実測図(1~5)下



浜崎遺跡出土遺物の調査

1. 浜崎遺跡出土の貝類について…………… 菊池 泰二(九州大学)
2. 浜崎遺跡出土の動物遺体…………… 西中川 駿(鹿児島大学)
3. 浜崎遺跡出土の木材について…………… 大迫 靖雄(熊本大学)
4. 浜崎遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査…………… 大澤 正己(新日本製鉄)
5. 浜崎遺跡出土遺物の¹⁴C年代測定…………… 山田 治(京都産業大学)
(¹⁴C年代と年輪年代の対照表の読み方)
6. 中世本渡と天草・志岐両氏…………… 鶴田 倉造(前本渡市史編纂委員)

1. 浜崎遺跡出土の貝類について

菊池 泰二 (九州大学)

浜崎遺跡出土の貝類遺骸標本についてその種類、組織について検討した。

材料と方法： 遺跡を大きく分割したうちE-2区中に貝殻の堆積地を発見し20m×20mの調査区を設定し、さらに1m毎に区切ってA, B, Cと1, 2, 3という符号の組合せによって各グリッドに番号をつけた。表土を剥ぎとり、貝殻を含む1mグリッドについて貝層上面から貝を含む層の底まで掘り返し、篩にかけて試料を採取。うち貝殻を多く含む1カ所については、45cm角のブロックサンプル(重量61kg)1個を採取した。またやや離れたところに発見された土壌のうち、SK5, SK9の2個について底までの全遺物を掘り上げそのうちの貝殻試料について検討した。それらの検討結果は別表の通りである。貝殻はできるだけ計数したが、すでに食用に供する時に殻を破砕しているものがある上に、ハイガイ、マガキ、ハマグリなど過半数が堆積中あるいは発掘処理時に破損しているものが多く、破片は多寡の記号で表現するにとどめた。二枚貝の場合、双方の殻片が共に残っていれば生時個体数は全殻片数の半分になる理屈であるが、保存状態が異なるため一方にかなり偏る事が多い。この場合実在の貝の個数は多い方の殻片数、もし左右が対合しなければそれ以上あることになる。今回は一応双方の殻片数を分けて記録したが、破損数の比率が大きいため正確な実数を把握することはできず、概数を示唆するにとどまる。巻貝については故意に破砕したものが多く、殻頂や殻軸など個体に1箇所しかない部分の残存数を用いて計数した。また、サザエ、スガイについては保存のよい石灰質の蓋を計数した。殻のおおくは破損し検出困難な状況にあるため蓋の数のほうが実際の消費個体数をよりよく反映しているといえるだろう。

結果と考察：

- 1) 結論をさきに述べると、上記のグリッド試料、土壌試料を通じて食用に供された貝類の組成はほとんど均質で、量的に重要なのはハイガイとマガキの2種であり、この2種だけで各試料を構成する貝殻の90%以上になる。ハマグリ、カガミガイなど砂干潟あるいはその低潮線下にすむ大型二枚貝は各試料に出現するがその数は極めて少なく、巻貝のサザエやアカシシも同様に1個体は大きく食品価値は高くても量的にはほとんど重要でない。それ以外の多くの種は個体の大きさも数量も小さい。
- 2) 二つの土壌出土貝類の組成を比較するとSK5はハイガイが上部黒色炭化層、中部貝層共に圧倒的に多く、貝層ではマガキがこれに次ぐが、上部黒色炭化層ではマガキがない。それ以外の種は種数、個体数共に少なく多様性は低い。一方SK9では上部黒色粘土層ではハイガイがまったくなく、中位貝層でもやや少ないこと、これに対して岩礁性巻貝の種類が多く、砂泥地の巻貝ウミナ、フトヘナタリが多数出現していることが特徴である。しかし、マガキの量の多さを考えると基本的性格はグリッド試料と大差ないものと見て良い。

3) 出現各種の生息環境を組成表の各種名の前に記号で示した。泥地干潟及び泥底に生息するものにハイガイ、サルボウガイ、ヒメアカガイ、オキシジミがあり、一方典型的な砂干潟、浅海砂底にすむものに大型二枚貝のハマグリ、カガミガイがあり、アカニシ、ツメタガイ、イボキサゴなども砂浜、砂底にすむ。アサリ、ウミナなどは泥混じりの砂地から泥地にまで広く分布する。固着性二枚貝のマガキは岩礁・転石地の石や岩の表面に多産する。その他数多くの岩礁性巻貝はいずれも本渡付近で現在でも普通に採集できるものである。今回の出土品をみるとこれら三つのすみ場所型にすむものが混合しており、目前の海岸だけでなくやや遠出して漁獲していたことが分かる。瀬戸大橋をはさんで対岸になる上島側の干潟は砂地で、近年照め立てと汚染でほとんど姿を消したが、以前はハマグリなどを多産したと聞いている。

マガキ（有明海型のやや小型でカップ状の殻をもったもの）は現在でも本渡の有明海沿岸に多産するが、砂泥地の二枚貝の中でハイガイが著しく多く、アサリがほとんど出ないことは現在の本渡周辺の下潟生物相と大きく異なっている。ハイガイは瀬戸内海と九州の有明海に分布するフネガイ科のアカガイ、サルボウガイに近縁の貝で、有明海では湾奥の泥干潟、熊本市背後の坪井川、白川河口の泥干潟には現在も多産するが、天草諸島の有明海沿岸では現在は生息していない。松島町の前島の泥干潟や下島富岡の湾奥にある小さな泥干潟に古いハイガイの双殻そろった死殻が出現することから比較的近年まで天草沿岸にも生息していたことがうかがわれる。浜崎遺跡が中世の遺構であるとすれば、その当時本渡地先の干潟にはハイガイが多量に生息していたことは充分有り得ることである。その場合、現在の浜崎遺跡近くの湾入部に泥質、砂泥質の干潟が発達していた可能性が高い。現在はごく普通に産するアサリが出土品にごく少量しか出てこないのはやや奇異な感じがするが、当時と現在の間の環境の変化に起因するものかも知れない。

浜崎遺跡出土貝類種名一覧表

軟体動物	二枚貝綱	ハイガイ	<u>Tegillarca granosa</u> (Linnaeus)
		サルボウガイ	<u>Scapharca subcrenata</u> (Lischke)
		ヒメアカガイ	<u>Scapharca troschli</u> Dunker
		マガキ	<u>Crassostrea gigas</u> (Thunberg)
		オニアサリ	<u>Protothaca</u> (<u>Notochione</u>) <u>jedoensis</u> (Lischke)
		アサリ	<u>Ruditapes philippinarum</u> (A. Adams et Reeve)
		ハマグリ	<u>Meretrix lusoria</u> (Roeding)
		カガミガイ	<u>Phacosoma japonicum</u> (Reeve)
		オキシジミガイ	<u>Cyclina sinensis</u> (Gmelin)
	腹足綱 (巻貝)		
		サザエ	<u>Turbo</u> (<u>Batillus</u>) <u>cornutus</u> (Lightfoot)
		スガイ	<u>Lunella coronata coreensis</u> (Reeluz)
		クマノコガイ	<u>Chlorostoma xanthostigma</u> (A. Adams)
		コシダカガンガラ	<u>Omphalius rusticus</u> (Gmelin)
		オオコシダカガンガラ	<u>O. pheifferi carpenteri</u> (Dunker)
		イボキサゴ	<u>Umbonium</u> (<u>Suchium</u>) <u>moniliferum</u> (Lamarck)
		アマガイ	<u>Nerita</u> (<u>Heminarita</u>) <u>japonica</u> Dunker
		オオヘビガイ	<u>Serpulorbis imbricatus</u> (Dunker)
		ウミナナ	<u>Batillaria multiformis</u> (Lischke)
		フトヘナタリ	<u>Cerithidea rhizophorarum</u> A. Adams
		ツメタガイ	<u>Glossaulax didyma</u> (Roding)
		オニサザエ	<u>Chicoreus asianus</u> Kuroda
		アカニシ	<u>Rapana venosa</u> (Valenciennes)
		レイシガイ	<u>Thais</u> (<u>Reishia</u>) <u>bronni</u> (Dunker)
		イボニシ	<u>Thais</u> (<u>Reishia</u>) <u>clavigera</u> (Kuster)
		アラムシロガイ	<u>Retcunassa festiva</u> (Powys)

(附)腔腸動物 花虫綱 石さんご目

マルキクメイシ Plesiastrca versipora(Lamarck)

SK 8より1塊出土

表1 浜崎遺跡E-2区 出土貝類遺骸 (1)

種名	サンプル名	B3						B8		ブロック サンプル
		B3	B4	B5	B7	B8	B8			
二枚貝	● ハイガイ {左殻 右殻 破片}	10 17 +++			520 675 +++		8 11 ++	115 125 ++		
	● サルボウガイ {左殻 右殻}				2 4					
	● ヒメサルボウ {左殻 右殻}				7 4					
	△ マガキ {左殻 右殻 破片}	25 30 +++			320 410 +++		22 85 +++	73 250 +++		
	○ ハマグリ {左殻 右殻 破片}		1 8	4 3	1 5 3		1	5 4		
	○ カガミガイ		2		5					
巻貝	△ スガイ {蓋}	19	215	7	36 89		6	31 86		
	△ クボガイ		1							
	○ アカニシ		1	1	2					
	○ イボキサゴ				86		25	3		
	○ ツメタガイ	1	4	5	13		1	2		
	● ウミニナ		6		52		1	6		
	△ サザエ 蓋			1大	5					
	△ レイシガイ				1					
	△ イボニシ				3			1		
	△ オオヘビガイ				1					

●泥地 ○砂泥地 ○砂地 △岩礁、転石地
ブロックサンプル、45cm立方、61kgの泥地を採取

表2 浜崎遺跡E-2区出土貝類遺骸 (2)

種名	サンプル名	C1								
		C1 上層	C2 上層	C3	C4	C5	C6	C8	C9	
二枚貝	● ハイガイ {左殻 右殻 破片}	20 18 +++	30 40 +++	1 1 ++			1	26 31 +++	6 4 +	
	△ マガキ {左殻 右殻 破片}	26 112 +++	24 158 +++	0 0 +++	1	2	3	31 132 +++	23 76 +++	
	○ ハマグリ {左殻 右殻 破片}	3 2 ++	3		3			2 2		
	○ カガミガイ					2				
	○ オニアサリ					1				
	巻貝	△ スガイ {蓋}	1 20	11 62		2 58	1 140	24 230	4 22	
△ クマノコガイ								1		
△ サザエ 蓋								1大		
● アラムシロ					1					
○ ツメタガイ			1		3	5	4			
○ アカニシ 殻部			2		2	1				
○ イボキサゴ					2		4			
● ウミニナ			1		1	1	15	4		

●泥地 ○砂泥地 ○砂地 △岩礁、転石地
C7は、B7と一緒に保有されていたため分離できずB7として扱った。

表3 浜崎遺跡F-2区出土貝類遺骸 (3)

		サンプル名	D6 上部	D8	D9	D10	E11 貝層	F12 貝層	G12 貝層	A6
二枚貝	●	ハイガイ {左殻 右殻 破片}	81 74 +++	66 74 +++	20 17 ++	34 25 ++	20 18 +++	90 92 +++	15 18 ++	7 6 ++
	△	マガキ {左殻 右殻 破片}	++++	++++	++++	12 50 ++++	++	+++	22 6 +++	23 ++
	○	ハマグリ	1		4	1				
	○	カガミガイ		2	1	4				
巻貝	●	オキシジミ						1	1	
	△	スガイ蓋}		12						
				65			36	56	33	
	○	ツメタガイ	1			1		1		
	○	アカニシ殻軸部	1	1	1	2				
	○	イボニサゴ		66					1	
	●	ウミニナ	1	13						

●記地 ○砂泥地 ○砂地 △岩礁、転石地

表4 浜崎遺跡土壌出土貝類遺骸

		サンプル名	SK 5 黒色炭化層	SK 5 貝層	SK 9 上部褐色土層	SK 9 貝層	SK 9 西側最下層
二枚貝	●	ハイガイ {左殻 右殻 破片}	121 129 +++	201 159 ++		42 37 ++	
	△	マガキ {左殻 右殻 破片}		61 64 +++	241 199 +++	256 261 +++	143 111
	○	ハマグリ {左殻 右殻}		1 2	2	21 18	2
	○	アサリ {左殻 右殻}		3		5 2	2
巻貝	●	サルボウガイ				1	
	●	オキシジミ				1	
	○	カガミガイ {左殻 右殻}				14 13	
	△	ナミマガシワ				4	1
	△	スガイ蓋}				52 229	
	△	イシダタミガイ				1	
	△	コシダカガンガラ				5	
	△	サザエ蓋				2大	
	△	オオヘビガイ				3	1
	△	アマナガイ				2	
	○	フトヘナタリ				24	
	○	ウミニナ				525	2
	○	ツメタガイ				19	
	○	オニサザエ				2	
○	アカニシ				4		
△	レイシガイ				1		
△	イボニシ				7		
△	ハネナシヨウラク				2		

●記地記底 ○砂泥地 ○砂地 ○岩礁、転石地

2. 浜崎遺跡出土の動物遺体

西中川 駿 (鹿児島大学)

1. はじめに

遺跡から出土する動物遺体は、当時の人々の生業、即ち狩猟や採集などを知る手がかりとしても、また、食生活を知る上に貴重な資料を提供している。1921年長谷部が、鹿児島県山木貝塚からはじめて動物遺体について報告して以来、これまで直良や金子ら多くの研究者により全国各地から報告され、熊本県内でも養貝塚、黒橋貝塚、西平貝塚、曾畑貝塚や宇土城三丸遺跡など数多くの遺跡から動物遺体の出土がみられている。しかし、これらは縄文遺跡が多く、中世の遺跡からのものは極めて少ない。

今回調査を依頼された動物遺体は、木渡市浜崎遺跡から出土したもので、木渡市教育委員会と熊本県教育委員会が、区画整理事業対象区のために初めて発掘調査を行い、13~14世紀の人工遺物と伴したものである。ここでは主に哺乳類遺体について、その概要を報告する。

2. 自然遺物の出土状況と出土骨量

自然遺物（貝類を除く）のトレンチ別ならびに動物別出土状況は、表1に示した。出土動物遺体の総重量は1273.6gで、それらは哺乳類1230.6g、魚類43.0gであり、哺乳類が全体の96.6%を占め、魚類は3.4%と極めて少ない。また、哺乳類の中にはイノシシ、シカのものではあるが、種を同定できない細骨片が含まれている。次に出土量をトレンチ別にみると、DⅠ区Ⅱ層が50.6%を占め、次いでSK9のⅡ層が42.2%で、他のトレンチは少ない。

表1 木渡市浜崎遺跡の動物別およびトレンチ別出土骨量 (単位: g)

トレンチ 層	哺乳類				魚類	トレンチ別 出土骨量
	イノシシ	シカ	イヌ	細骨片		
DⅠ Ⅱ	253.6(22)	189.0(20)	49.5(8)	145.8	6.2(9)	644.1
DⅠ Ⅳ		21.1(4)		2.7		23.8
SK5 Ⅰ		11.6(2)	33.8(3)	1.5		46.9
SK6 Ⅰ		18.1(5)		2.9		21.0
SK9 Ⅱ	198.2(22)	168.4(23)	39.2(7)	95.2	36.8(2)	537.8
動物別出土骨量	502.6(60)	391.2(46)	88.7(10)	248.1	43.0(3)	1,273.6

3. 出土動物種の出土骨の概要

ここでは主に哺乳類の出土骨について詳求する。哺乳類は以下に示す2目3種である。

A. 偶蹄類

- 1) イノシシ (*Sus scrofa* LINNAEUS)
- 2) シカ (*Cervus nippon* TEMINCK)

B. 食肉目

- 3) イヌ (*Canis familiaris* LINNEUS)

以上3種の哺乳類が同定されたが、トレンチ別ならびに動物別出土重量は表1に示した。なお、下段には骨片数を示した。まず、出土量をみると、イノシシが502.6g (60個) で最も

表2 本渡市浜崎遺跡の動物別および骨格別出土骨片数

動物	頭骨			肩胛骨							前肢骨				後肢骨				合計
	頭骨	上顎骨	下顎骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	肩胛骨	
イノシシ	3	2	1																60
シカ		1																	46
イヌ		2																	15
分格別 出土骨数	35 (29%)			6 (5%)							44 (36%)				36 (30%)				121

多く、次いでシカの391.2g (46個)であり、イヌは少ない。次に各動物の出土骨について述べる。表2には動物別ならびに骨格別出土骨片数を示した。

イノシシ (図版Ⅰの1～12)

イノシシは表2に示すように、下顎骨5 (左側2、右側3、以下同じ)、上腕骨6 (2、4)、脛骨14 (6、8)個など合計60個の骨片が出土しているが、脛骨の数から少なくとも8個体以上のものと推定される。長骨は割断されており、完形骨は極めて少ない。ほぼ完全な第4指基節骨の最大長は3.4cmで、第3趾基節骨の最大長は3.9cmであり、また、上腕骨遠位端の幅は、3.5cm、4.4cm、4.2cmであり、これらの計測値は、現生のイノシシのものとはほぼ同じ大きさである。

シカ (図版Ⅰの13～21)

シカは46骨片が同定されたが、角12 (7、5)、橈骨6 (4、2)、脛骨5 (2、3)などが多く、肩胛骨、橈骨の数から少なくとも4個体のものである。長骨はイノシシと同じように割断されており、ほぼ完全な中手骨の最大長は15.8cm、踵骨のそれは3.4cmであり、これらは現生のキュウシュウジカより小さく、マゲシカと同じ大きさである。また、中足骨を縦に割断した加工品もみられる。(図版Ⅰの21)

イヌ (図版Ⅱの1～18)

イヌは上腕骨4 (3、1)、橈骨3 (1、3)など15個の骨片が出土しているが、少なくとも3個体以上のものと推定される。ほぼ完全な橈骨の最大長は14.3cmで、上腕骨の骨体最小幅は $12.5 \pm 0.3\text{mm}$ ($n=3$)であり、橈骨の最大長から山内の方法で体高を推定すると、45.5cmであり、これは現生の柴イヌより大きく、長谷部のいう中型犬に属する。

魚類 (図版Ⅱの12～18)

魚類の出土は、ブダイ、フエフキダイなどタイ科の前上顎骨、歯骨、ハタ科の歯骨、マグロの椎骨など21個の骨片が出土している。詳細は専門家の分析を期待したい。

4. 考察

動物遺体の全国の出土例は、これまで縄文、弥生遺跡からの報告が多く、中世の遺跡からは極めて少ない。熊本県内でも灘貝塚、曾畑貝塚など縄文の遺跡で数多く報告されているが、本遺跡のような鎌倉時代のものは少ない。

今回調査した浜崎遺跡は、13～14世紀の遺跡で、イノシシ、シカ、イヌや魚類が検出され、当時浜崎で生活した人々が、イヌを伴侶としてイノシシ、シカを狩猟し、魚貝類を採集していたことがうかがわれた。

イノシシは縄文後、晩期に繁栄した動物で、九州の遺跡ではシカよりも多く出土する。本遺跡からも最も多い出土であり、当時天草地方にもイノシシが生息していたことがわかる。出土骨の形状は現生のホンドイノシシとほぼ似ており、同じ系統のものであろう。長骨はイノシシ、シカ共に割断されており、これは金子らのいうように骨髄食があったことが考えられる。本遺跡から出土したシカは、現生のキュウシュウジカより少し小さく、マダシカと同じ大きさである。これは天草島に島嶼型個体群として孤立し、小型化したものと考えられる。また、シカの中手骨、中足骨はカンザシなど加工品としてよく利用されているが、本遺跡からも加工品が出土している。イヌは、縄文早期からすでに飼養されていたといわれ、鎌倉時代の遺跡からもその出土例はウシ、ウマと同様に数多く報告されている。本遺跡から出土したイヌは、体高45.5cmと推定され、縄文時代の小型犬より大きく、中型犬に属し、鎌倉市などからの出土例と似ている。中世に中型犬が多くなることについて、金子は外国との交易により外国種が導入され、体型が大きくなったとしている。

以上、イノシシ、シカ、イヌの出土例について少し考察を加えたが、浜崎遺跡を遺した人々は、ある時にはイヌを伴侶として、イノシシ、シカを狩猟し、魚貝類を採集し、動物蛋白質源として食膳を賑やかにしていたことがうかがわれる。

5. まとめ

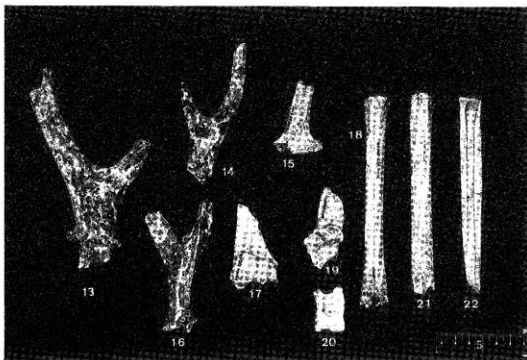
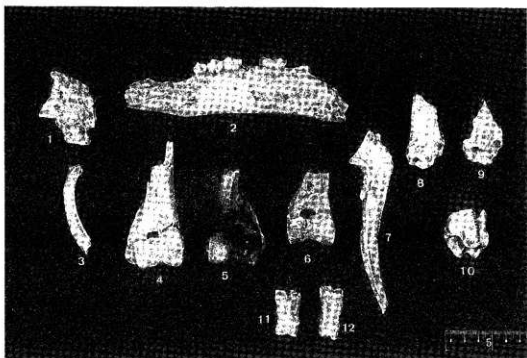
本渡市浜崎遺跡出土の動物遺体について調査した。

- 1) 自然遺物は総重量1273.6g(貝類を除く)で、それらは哺乳類1230.6gおよび魚類の43.0gである。
- 2) 哺乳類はイノシシ、シカ、イヌの2目3種で、魚類はタイ科、ハク科などである。
- 3) 出土量はイノシシが502.6g(60骨片)で、ついでシカ391.2g(46骨片)、イヌ88.7g(15骨片)である。

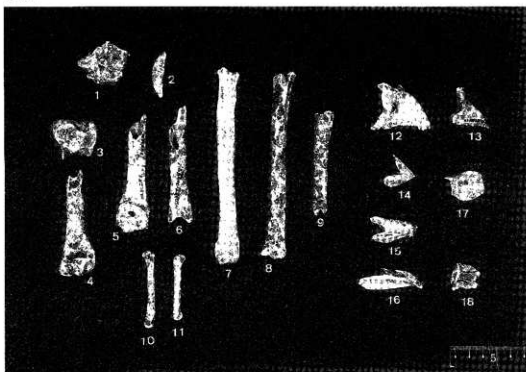
参考文献

- 長谷部 吾人：出水貝塚貝殻・獣骨及び人骨、京都大学文学部考古学研究室報告、6・13-27(1921)
- ：日本石器時代家犬に就いて、人類学雑誌、40・1-10(1925)
- 金子 浩 昌：縄文時代の狩猟・漁撈、歴史公論、2・67-71(1979)
- 金子 浩 昌：中世遺跡における動物遺体——鎌倉市内遺跡の調査例を中心として——鎌木義昌先生古稀記念論文集、P405~435(1988)
- 直 良 信 夫：古代遺跡発掘の脊椎動物遺体、P6~197、校倉書房(1972)
- 西中川 駿：宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について、「宇土城三ノ丸跡」宇土城三ノ丸跡発掘調査会、P71-83(1982)
- ：セツ江カキワラ貝塚、下の下貝塚出土の動物骨、熊本県文化財調査報告、79、77-85(1986)
- 芝 田 清 吾：日本古代家畜史、P1~99、日本学術出版(1969)
- 山 内 忠 平：犬における骨長より体高の推定法、鹿大農学術報告、7・125~131(1958)

图版 I



図版Ⅱ



図版の説明

図版Ⅰ：1～12：イノシシ 13～23：シカ

1. 左側頭骨 2. 右下顎骨 3. 右肋骨 4. 右上腕骨 5. 左上腕骨
6. 右上腕骨 7. 右尺骨 8. 9. 右脛骨 10. 左脛骨
11. 右第三指基節骨 12. 右第四趾基節骨 13. 14. 15. 16. 角
17. 左上腕骨 18. 右中手骨 19. 右踵骨 20. 左距骨 21. 右中足骨
22. 左中足骨

図版Ⅱ：1～11：イヌ 12～15：タイ 16. ハタ 17. 18. マグロ？

1. 右上顎骨 2. 左下顎犬歯 3. 左上腕骨 4. 左上腕骨
5. 右上腕骨 6. 左上腕骨 7. 左橈骨 8. 左脛骨 9. 右脛骨
10. 左第四中手骨 11. 左第五中手骨 12. 13. 14. 前上顎骨
15. 16. 歯骨 17. 18. 椎骨

3. 浜崎遺跡出土の木材について

大迫 靖雄 (熊本大学)

1. 観察対象とした出土木材について

本遺跡は、低地にあり遺跡が存在した場所が湿地帯であったこともあって、多くの木製品や流木が発掘されている。このうち、加工痕が明白なものも多数あり、これらの樹種の鑑定を行うこととした。目視したところ、流木は別にして、加工痕が残る製品には種々のものが観察された。ただ、加工痕が残るといっても、丸太の先を削った杭状の出土品がかなり多数出土している。この中には、焼き目が入ったものもかなり見られたが、防腐のためにこのような処置が行われたのか、または、薪として使用されたのか定かではない。

本原稿では、これらの出土品の中から、13種類の出土品について鑑定を行う。保存状態は種々であったが、目視で樹種の鑑定が可能なものはなかったため、いずれの木片も顕微鏡切片を作成して検眼することとした。

まず、本原稿の鑑定の対象とした出土木材については、出土層順に資料番号を付して、木質材料の出土状況を併せて表1に示す。

表1 鑑定を行う出土木材とその特徴

木材番号	出土層	出 土 木 材 の 特 徴
No.1	SD-1	木杭：樹皮つき丸太の状態
No.2	SD-1	木杭：同上
No.3	SD-1	薄い板状製品（厚さ3.45mm）で、まさ目板で1側は平滑に削られており木目と直行して筋目がつけられている。他面は粗い仕上げとなっている。周囲にヤマザクラの樹皮が散乱しており、曲げ器具が作られていたことがうかがえる（写真1）。
No.4	SD-2	独木の形状をした木製品（写真7）。
No.5	SD-2	工具の柄と思われる木製品（写真5）。
No.6	SD-2拡張	板状物質で厚さ5.25mm、年輪幅0.6mmのまさ目板状物質で両面は平滑に切削されていた。保存状態はよい（写真3）。
No.7	SD-2拡張	厚さ4.45mmのまさ目板（写真4）。
No.8	SD-2拡張	丸太状の木材の中央部を細く削った状態の木製品。一見形状はつちの子に類似しているが、内部がくりぬかれている（写真6）。
No.9	SD-4	丸太の両端が円錐状に削られており、稜状の形態を示している（写真8）。
No.10	SD-4	最下層にたまった状態で出土した木片で、流木と思われる。ただ、先端部に加工痕が見られ、杭として使用されたものとも思われる。形状は、丸太の状態で、直径は26.5mmであった。
No.11	SD-8	板状製品：SD-8には、サクラの樹皮が散乱していた。この状況から、この板も曲げ器具の材料として使用されていたことが考えられる（写真2）。
No.12	SD-2	井戸を囲っていた板。かなり大きな形状を示している（写真9）。
No.13	SD-2	井戸の囲いをとめていた杭。直径38.85mmの樹皮つき丸太のまま使用されていた（写真10）。

* () 内の番号は顕微鏡写真番号を示す。

表1に示した出土木材について、樹種の鑑定を行ったが、いずれも材料の老化が激しいため、巨視的には鑑定が困難であった。したがって、いずれの出土木材についても、顕微鏡検眼用のプレパラートを作成して観察を行った。鑑定結果を以下に示す。

II. 木製品と思われる出土木材について

a) 板状木製品

鑑定の対象とした出土木材の中には、かなり薄い板状の木片が見られた (No. 3, 6, 7, 11)。このうち、No. 3は最も薄い板状の物質で、その厚さは3.45mmのまさ目板となっており、1側は平滑に仕上げられているのに対して、1側は粗削りの状態となっている。また、平滑な面には、繊維方向に直角に、刃物によると思われる筋目が刻まれている。周辺には、多くの細く刻まれた樹木の樹皮(ヤマザクラの樹皮と思われる)が散乱していた。これらの樹皮は、通常、曲げ物器具の接合もしくは止め具として使用されており、これらの板を使用した曲げ物の器具の製造が行われていたことが伺える。本木片は、幅が狭いため、とくにまさ目面の検眼用の切片の作成が困難であるが、顕微鏡による観察によると、写真1①~③に示すように、組織構造は、主として、仮道管と放射組織からなっている。木口面(写真1①)は、下方が樹心側、上方が樹皮側を示すが、早・晩材の移行は緩やかで、放射組織は軸方向柔細胞を欠いている。まさ目面(写真1②)、板目面(写真1③)から、仮道管壁に2本対となったらせん肥厚の発達が見られ、早材部の有縁壁孔は、楕円形であることが示されている。以上の結果から木樹種は、カヤ(*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)と鑑定される。

No. 11(顕微鏡写真2①~③)も板状の加工された製品で、No. 3と同様に、周囲にヤマザクラのものと思われる樹皮が散乱しており、この出土木材も曲げ物等として使用された可能性が大きい。木口面(写真2①)から、早・晩材の移行はやや急で、構成している組織は、大部分が仮道管からなり、他に単列放射組織と晩材部に樹脂細胞が点在する。まさ目面(写真2②)は、早材部を示しているため、樹脂細胞は現れていない。仮道管壁に多く有縁壁孔がみられる。また、放射組織は、全て放射柔細胞からなっている。分野壁孔はスギ型で、1分野の2個存在している。板目面(写真2③)は、早材部を示している。仮道管と放射組織からなることが示されている。仮道管壁に有縁壁孔の断面が現れている。以上の状況から、本板状製品は、スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)と鑑定される。

以上、2つの板状製品については、周辺状況から曲げ物容器の製造のために使用されていた可能性を述べた。かつて報告された古墳からの出土品の中にも、曲げ物容器は多く見られ、樹種としては、ヒノキが圧倒的に多く、続いて、スギ、モミ、アスナロが報告されている。この他、わずかであるが、サワラ、マツ、ケヤキ、ヤマグワの各樹種も報告されている。この中に、カヤとする報告は見られていない。しかしながら、カヤは、木理通直、堅硬、緻密、弾性強く、水湿への抵抗性、耐久性が大である等から、器具類としての使用も十分に考えられる。

このほか、板状物質であるNo. 6, 7(顕微鏡写真3, 4)はいずれも、木口面(写真3①, 4①)から、年輪幅が狭く、早・晩材の移行が緩やかとなっており、晩材部の幅がき

わめて狭いことが示されている。構成する組織は、ほとんどが仮道管で、単列放射組織と樹脂細胞が存在している。まさ目面（写真3②、4②）からいずれも、早材部を示しているが、仮道管壁に有縁壁孔が1列に配列している。また、No.6（写真3②）では中央部に2本、No.7（写真4②）では1本の樹脂細胞が見られる。放射組織はいずれも放射柔細胞で、分界壁孔は、ヒノキ型で1分界に2個見られる。板目面（写真3③、4③）では、仮道管壁に有縁壁孔の断面がみられる。No.6（写真3③）に、1本樹脂細胞が見られる。放射組織は単列で、2～18の細胞高のものが見られる。以上の結果から、No.6、7の樹種は、ヒノキ(*Chamaeyparis obtusa* Endl.)であると鑑定される。しかしながら、それらの用途については、明らかではない。ただ、これらの板は、いずれもまさ目板で、両面とも平滑に仕上げられている。また、年輪幅が狭く、材質も均一な状態となった上質の板である。しかし、No.3などと比較すると厚く、曲げ物容器用材料として使用するには問題があるように思われる。

b) 工具の柄と思われる木製品

No.5の出土木材は、加工痕の状況から工具の柄と思われる。顕微鏡写真5から微視的観察を行うと、木口面（写真5①）において、道管が放射方向に配列し、放射孔材であることを示している。また、道管にはチロースの発達が見られる。放射組織は、写真左側に広放射組織が見られるが、他はすべて単列放射組織であることが示されている。柔細胞は、接線方向に配列し、独立柔組織を形成している。まさ目面（写真5②）において、中央に道管が見られ、左側の道管に単せん孔板の残骸が見られる。また、右側の道管にはチロースが発達している。他の組織としては、木繊維が多数を占めるが、道管の周囲に柔細胞ストランドが現れている。放射組織は平伏細胞のみからなる同性であることが示されている。板目面（写真5③）において、中央部やや右側に道管が1本現れており、断面に残るせん孔縁から、単せん孔板を示している。また、中央部に広放射組織が現れており、集合型、複合型の中間の型を示している。その他の放射組織は、いずれも単列放射組織であることが示されている。

以上の結果から、本樹種はカシ類(アカガシ亜属: *Cyclobalanopsis*)と鑑定される。工具あるいは農機具の柄に使用された木製品が、出土された例はかなり多い。この場合の樹種としては、カシ類が圧倒的に多い。

c) 鼓状木製品

No.8は、中央部がくびれた状態となった木製品で、外見は榎の子あるいは糸巻きなどに類似しているが、内部がくりぬかれており、楽器かなにかに使用されたことが考えられる。微視的な特徴から、木口面（写真6①）において、道管が全体的にほぼ均一に分布しており、散孔材であることが示される。道管はおおむね単独であるが、2個が放射方向に連続しているものも見られる。また、道管内にチロースが発達したものも見られる。道管の周囲には周囲柔組織が発達している。また、道管と見違えるほど大きい柔細胞が点在してい

る。これは油細胞と思われる。放射組織は、1～3列のものが見られる。まさ目面(写真6②)は、中央部に2個連続した道管が見られ、せん孔縁から半せん孔であることが示されている。また、拡大した顕微鏡写真6③から、道管壁の残骸に交互壁孔が見られる。道管と隣接して、鞘状周囲柔組織が見られる。このほか多くの柔細胞が見られるが、その中に大型の油細胞が多数見られる。放射組織は平伏細胞が多くを占めるが、上下に直立細胞が見られ、異性であることが示されている。また、直立細胞の一部に、大型の油細胞が見られる。板目面(写真6④、⑤)において、拡大した顕微鏡写真6⑤に、2本道管が見られ、その周囲に柔細胞ストランドが周囲柔組織をなしている。その一部に大型の油細胞が見られる。また、写真6④から、放射組織は1～3列で、上下縁の細胞は中の細胞と比較して脊が高い細胞が見られる異性放射組織であることが示されている。また、上下縁に特に大型の油細胞をもつものが見られる。

以上の状況から、本樹種はクスノキ(*Cinnamomum camphora* Presl)と鑑定される。

外見が本木製品に類似した出土品としては、前述した榎の子、糸巻き、布巻きなどがある。ただ、これらの製品には、内部がくりぬかれたものは報告されていない。また、これらの製品の樹種としては、榎の子の場合、ツバキ、カシ、シイノキ、糸巻きの場合、スギ、ヒノキ、布巻きの場合、ヒノキ、シイノキ、サカキ、スギ、アカマツなどが報告されている。しかし、クスノキが使用されたという報告はない。クスノキが使用されたものとしては、伎楽面(奈良県:正倉院)、木棺(大阪府)、容器(佐賀県、岡山県)、槽(福岡県)、榎(福岡県)等がある。これらのことも考慮に入れ、本木製品の使用について推定する必要がある。

d) 独楽状木製品・毬状木製品

No.4、9に示した出土木材は、丸太の両端を円錐状に加工してある。このような状態の木製品は、独楽・毬として使用されたという報告がある。当時の独楽は、現在のように、中央部に鉄芯を入れたものではなく、木材を削ってとがった状態にしてあったとされる。No.4、9はすでに報告されている独楽・毬と類似しているといえる。この場合も樹種を特定するため微視的観察を行った。

まず、No.4の顕微鏡写真7①～③に示す。木口面(写真7①)において、道管は放射方向に配列されており、放射孔材であることが示されている。また、道管中にチロースの発達が見られる。放射組織は、写真の左右に2本の広放射組織が見られるが、他の放射組織は単列放射組織を示している。柔細胞は、接線方向に独立帯状に配列している。まさ目面(写真7②)において、中央部に2本の道管があり、いずれの道管にもチロースの発達が見られる。他の軸方向組織は大部分木繊維が占めるが、柔細胞ストランドが見られる。放射組織は、平伏細胞のみからなる同性放射組織であることが示されている。板目面(写真7③)において、軸方向組織として、木繊維、柔細胞ストランドが見られる。放射組織は、集合型、複合型の中間的な広放射組織が1本見られるが、他はすべて単列放射組織であることが示されている。

以上の結果から、木製品の樹種は、カシ類(アカガシ亜属: *Cyclobalanopsis*)と鑑定される。次に、No.9の顕微鏡写真を写真8①～③に示す。本製品は、保存状態が悪く、顕微鏡検査用のプレパラートの作成が困難であったため、明瞭な顕微鏡写真の撮影はできていない。木口面(写真8①)は、下方が樹心側、上方が樹皮側を示している。道管は早材部で形状が大きいもので、晩材部に移行するにつれて小さくなり、晩材部では火炎状となっている。環孔性の放射孔材であることを示している。また、道管の一部にチロースの発達が見られる。他の組織は、木繊維が大部分を占めているが、柔細胞は、接線方向独立帯状に分布している。放射組織は、単列放射組織のみが示されている。まさ目面(写真8②)において、中央部に2本の道管が見られ、道管内に単せん孔のせん孔縁が見られる。他の軸方向組織としては、大部分が木繊維であり、柔細胞ストランドが見られる。放射組織は平伏細胞からのみなる同性放射組織である。板目面(写真8③)においては、道管が1本見られ、チロースの発達が見られる。他の組織としては、大部分が木繊維で柔細胞が点在している。放射組織は、すべて単列放射組織からなり、細胞高は1～12のものが見られる。

以上の結果から、本製品の樹種は、スダジイ(*Castanopsis cuspidata* var. Sieb. Nakai)と鑑定される。

古墳から出土した独葉として、現在報告されている樹種としては、一部マツ類のものがあるが、大部分が常緑樹で、カシ類が多いとされている。この場合、カシ類、スダジイと鑑定された。これらの樹種はいずれも常緑広葉樹であり、すでに報告されたものと大差がないものである。このことから、本製品は独葉・莖として使用された可能性が高い。

Ⅲ. 井戸用木製品

井戸用に使用されていたと考えられる物質として、No.12, 13がある。このうち、No.12は井戸を囲っていたと考えられる大型の板で、No.13は、前述の板を止めるための杭として使用されていたものである。

まず、No.12の板についてみる。本板は、形状が大きく、原型を止めていたが、老化が進んでおり、顕微鏡検査用の切片の作成が困難であった。木口面(写真9①)は、下方が樹心側、上方が樹皮側を示している。年輪界に沿って大きな道管が複数層並び孔圏を形成し、孔圏外で道管の直径が小さくなり、半径方向に配列している。木繊維と道管の周囲に柔細胞が見られる。放射組織は広放射組織と単列放射組織からなることが見られる。まさ目面(写真9②)においては、中央部に道管が見られ、せん孔板の形状は、単せん孔板であることが示されている。また、道管に接した周閉仮道管と柔細胞ストランドが点在し、他の大部分が木繊維であることが示されている。放射組織は、平伏細胞のみからなる同性放射組織を示している。板目面(写真9③)においては、中央部に道管が見られ、軸方向組織は、柔細胞ストランドが僅かに点在している以外は、大部分が木繊維からなることを示している。放射組織は、左側に集合型、複合型中間の広放射組織が見られ、他の放射組織は、すべての単列放射組織であることが示されている。

以上の結果から、本樹種はコナラ(*Quercus serrata* Murray)あるいはコナラ亜属:
Lepidobalanus)と鑑定される。

出土木材の中で、井戸用材として使用されていた最も多い樹種は、スギ、ヒノキとなっており、このほかに、マツ、クリ、モミ、コウヤマキ、カヤなどが見られ、コナラとする報告はないが、シイも1例示されており、広葉樹も使用されていたものと思われる。

次に、No13は、井戸用板を固定していた杭であるが、この場合、表1にも示したように、直径38.85mmの樹皮が付着した丸太の状態で使用されていた。形状は止めていたが、保存状態は悪く、検眼用切片の作成は困難であった。木口面(写真10①)においては、下方が樹心側、上方が樹皮側を示している。道管は年輪界にあまり関係なく放射方向に配列した放射孔材であることを示している。柔細胞が接線方向に独立帯状柔組織を形成している。他は、木繊維もしくは繊維状仮道管であることが示されている。放射組織は中央部に2本の幅広い広放射組織が見られるが、他は単列放射組織を示している。まさ目面(写真10②)においては、2木の道管が走っており、いずれも単せん孔板であることが示されている。また、道管に接して、周囲仮道管が見られる。このほかの軸方向組織としては、大部分が木繊維であるが柔細胞ストランドも点在している。放射組織は、平伏細胞のみからなる同性放射組織であることを示している。板目面(写真10③)においては、中央部に道管が1本走っており、せん孔縁の状態から単せん孔を有することが明らかである。また、道管壁に接して周囲仮道管が見られる以外は、木繊維が大部分を占めている。放射組織は、単列放射組織のみが示されているが、集合型と複合型の中間の広放射組織が多数存在している。

以上の結果から、本樹種はカシ類(アカガシ亜属: *Cyplobalanopsis*)と鑑定される。

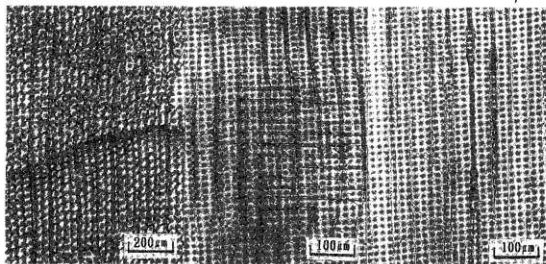
IV. 杭および流木

同遺跡内には、数本の溝が存在していたことが明らかとなっている。この溝から出土した木材も多い。これらの中には、先端部が鋭角に加工された丸太もしくは加工木材が多く存在する。これらの木材は多くが溝の沿線すなわち河川等の工事用の杭と思われる。これらの杭は樹皮つきの丸太の状態で使用されているものが多い。巨視的判定ではいずれも広葉樹で、カシ類もしくはシイノキなどと思われる。このほか、用途不明の多くの木材が出土している。

これらは、河川周辺からの流木と思われるもので、たまたま堰などによって、河川内に止まったため、腐朽等によって消滅することを免れたと思われる。このような流木を詳細に分析することによって、当時の森林の植生などを推定することも可能となろうが、これらの分類には多大な労力を必要とする。今回は、このような膨大な流木を詳細に検討する時間的な余裕もないので、これらの鑑定は省略する。

参考文献

- *埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料：木製農具について、1983
- *島地 謙、伊東隆夫、図説 木材組織、地球社、1982

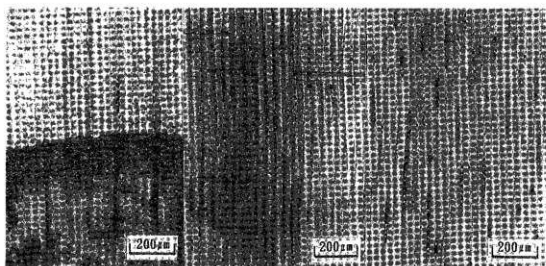


1①木口面

1②まさ目面

1③板目面

写真1 板状木製品（資料番号No.3）

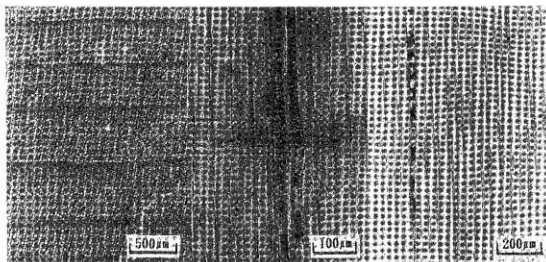


2①木口面

2②まさ目面

2③板目面

写真2 板状木製品（資料番号No.11）

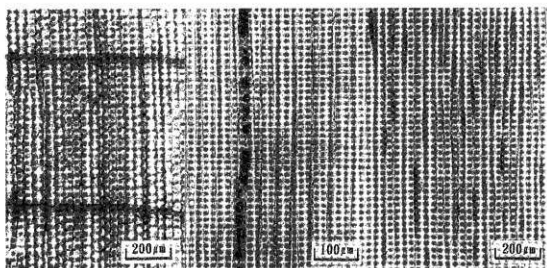


3①木口面

3②まさ目面

3③板目面

写真3 板状木製品（資料番号No.6）

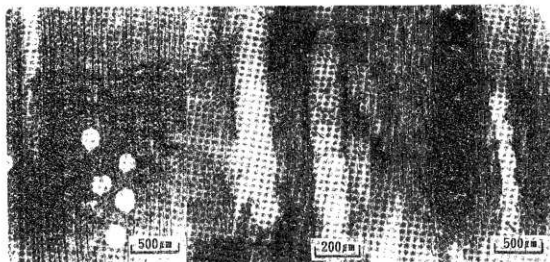


4①木口面

4②まさ目面

4③板目面

写真4 板状木製品（資料番号No.7）

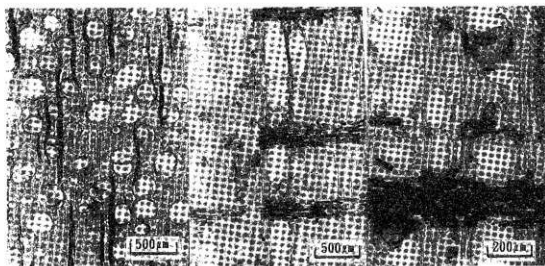


5①木口面

5②まさ目面

5③板目面

写真5 工具の柄状木製品（資料番号No.5）

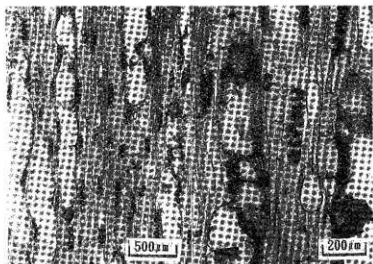


6①木口面

6②まさ目面

6③まさ目面

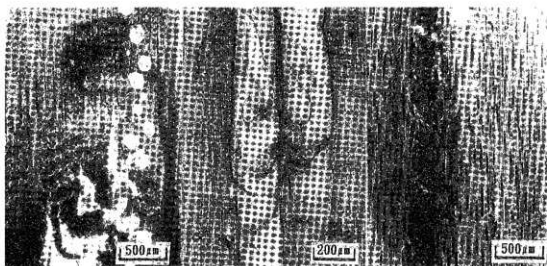
写真6 鼓状木製品（資料番号No.8）



6④板目面

6⑤板目面

写真6 鼓状木製品(資料番号No.8)

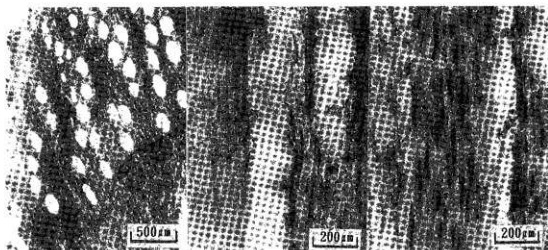


7①木口面

7②まさ目面

7③板目面

写真7 独楽状木製品(資料番号No.4)

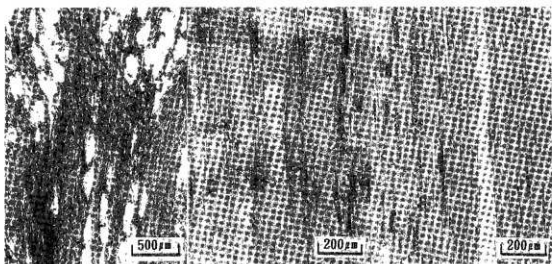


8①木口面

8②まさ目面

8③板目面

写真8 織状木製品（資料番号No.9）

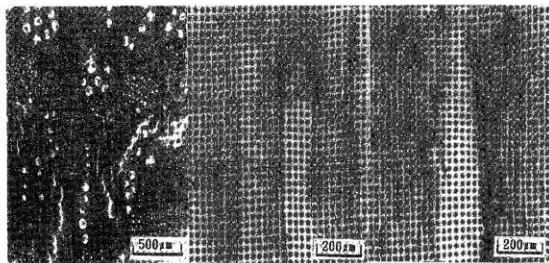


9①木口面

9②まさ目面

9③板目面

写真9 井戸用板状木製品（資料番号No.12）



10①木口面

10②まさ目面

10③板目面

写真10 井戸用杭製品 (資料番号No.13)

4. 浜崎遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己(新日本製鉄)

概 要

13世紀に属する浜崎遺跡出土の鍛冶関連遺物(鉄滓、鍛造剥片、粒状滓)を調査して、次の事が明らかになった。

- (1) B区の出土鉄滓は、塩基性砂鉄を始発原料とした荒鉄(製錬生成鉄で、表皮付着スラグや捲込みスラグ、時には炉材粘土などの不純物を含む鍛冶原料鉄)の成分調整を行った精錬鍛冶滓から、鉄器製作時の折返し曲げ高温鍛接を行った鍛錬鍛冶滓の2種が存在していた。
- (2) A区は6基の鍛冶炉から多くの鍛造剥片や粒状滓が検出された。鍛造剥片は、赤熱鉄素材の鍛打に際して飛散した酸化スケールである。粒状滓は、酸化防止に塗布された粘土汁と突起面をもつ赤熱鉄素材の羽口近傍高温個所での熔融物である。両者はグスタイト(Wüstite: FeO)主体の鉱物組成で、鍛錬鍛冶の後段階工程での派生物と想定される。明確に鍛冶操作があった事が証明された。

1. いきさつ

浜崎遺跡は、熊本県本渡市本戸馬場字北原に所在する縄文時代後期から中世・近世へかけての複合遺跡である。当遺跡は中世が中心となるが、これより鍛冶関連遺物が検出されて、当時の鍛冶技術の実態を把握するため、本渡市教育委員会より専門調査の要請を受けた。なお、浜崎遺跡は3区に大別されて、A区は6基の鍛冶炉より鍛造剥片や粒状滓を検出、B区は鍛冶滓の他に鉄の鑄造を行った溶解炉の下部構造が遺存し、ガラス質滓などの出土があった。更にC区は近世に属する青銅の溶解が想定される黒曜石に似たガラス質滓の検出があったが、こちらは予算が間に合わなかったので今回は調査を割合している。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table. 1 に示す。B区出土鉄滓は4点、A区は鍛造剥片と粒状滓を1、2号鍛冶炉から山上したものを調査した。鍛造剥片と粒状滓は、大きさが種々あるのでフルイを使って4、2.8、1.4、0.71mmで止まったもので選別してある。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	計測値		調査項目			
			大きさ(mm)	重量(g)	マクロ組織	顕微鏡組織	ピッコーズ断面硬度	化学組成
HAMA-1	鉄滓	B区 HSG44P2	100×70×58	276	—	○	○	○
2	"	"	78×53×50	106	—	○	○	○
3	"	B区 IIcE ₁ 貝層内(上部)	92×75×25	282	—	○	—	○
4	"	"	45×25×24	35	—	○	○	○
5-(1)	鍛造剥片	A区 1号鍛冶炉	4.2.8.1.4.0.71		○	○	○	—
5-(2)	"	" 2号鍛冶炉	"		○	○	—	—
6-(1)	粒状滓	" 1号鍛冶炉	0.71以下		○	○	—	—
6-(2)	"	" 2号鍛冶炉	"		○	○	○	—
7-(1)	"	" 1号鍛冶炉	1.4, 0.71		○	○		
7-(2)	"	" 2号鍛冶炉	"		○	○		
8-(1)	"	" 1号鍛冶炉	4.2.8		○	○		
8-(2)	"	" 2号鍛冶炉	"		○	○		

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) マクロ組織

鍛造剥片と粒状滓の断面埋込み試料を5~10倍で投影機を使って撮影している。

- (3) 顕微鏡組織

各試料は水道水で十分に洗浄乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3 μ と1 μ で仕上げ、光学顕微鏡観察を行った。

- (4) ビッカース断面硬度

鉄滓、鍛造剥片、粒状滓の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

- (5) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法で行った。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第1鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化磷(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果と考察

3-1. B区 HSG44P(土壌レキ)出土品

- (1) HAMA-1. 鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

- ① 肉眼観察

鍛冶炉の炉底に堆積形成した椀形滓で、2回操業の2段重ねとなっている。上段表面は黄褐色地に黒色を混じえ、滑らか肌に木炭痕や赤錆を発生する。裏面は青灰色に変色した粘土と灰色石粒を付着する。

- ② 顕微鏡組織

Photo.1の①~③に示す、鉱物組成は白色粒状のヴスタイト(Wüstite: FeO)と、その粒間に淡灰色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)と暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉄素材の折返し曲げ鍛接時に排出された鍛錬鍛冶滓に分

類される。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 1の③にヴスタイト粒を測定した硬度圧痕を示す。硬度値は457Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450~500Hvなので当白色結晶は、ヴスタイトと同定される。

④ 化学組成

Table. 2に示す。珪石成分少なく鉄分の多い鉄滓である。全鉄分(Total Fe)は57.28%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.30%、酸化第1鉄(FeO) 53.46%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 22.06%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は少なく18.57%である。二酸化チタン(TiO₂)は0.31%、バナジウム(V) 0.01%と砂鉄特有成分の2種も低値である。酸化マンガン(MnO) 0.19%、銅(Cu) 0.001%も少ないところから砂鉄系鍛錬鍛冶滓に分類される。

(2) HAMA-2. 鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

表皮は灰黒色ガラスが凹凸をもちながら覆っており、裏面は赤褐色を呈して炉底粘土を付着した不定形の滓である。鍛冶作業において、赤熱鉄素材の酸化防止に粘土汁を塗布した時点でガラス化した滓の一種であり、鍛冶滓として時折り見受けられるタイプである。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の④~⑥に示す。鉱物組成の大半は⑦に示す淡灰色長柱状ファイヤライトが基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出し、局部的に④~⑥にみられるようなヴスタイト粒内に淡茶褐色微小析出物の鉄(Fe)-チタン(Ti)化合物のウルボスピネル(Ulvö spinel: 2FeO·TiO₂)を析出する組織が認められた。砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛冶作業を証明する鉄滓である。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 1の⑥に白色粒状結晶の硬度測定を行った硬度測定圧痕と、淡灰色盤状結晶の硬度圧痕を示す。硬度値は前者が502Hvでヴスタイト文献硬度値の範ちゅうに入り、後者はファイヤライトの文献硬度値の600~700Hvの範囲内に収まるものである。白色粒状結晶はヴスタイト、淡灰色盤状結晶はファイヤライトに同定される。

④ 化学組成

Table. 2に示す。該品は顕微鏡組織で酸化鉄のヴスタイトが少なくファイヤライトが多かったように成分は鉄分が低減してガラス質成分が多いものである。全鉄分(Total Fe)は、20.67%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.21%、酸化第1鉄(FeO) 16.48%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 10.94%の割合である。ガラス質成分は逆に増大し、68.545%を占める。また、少量のヴスタイト粒内にウルボスピネルが認められたのは、二酸化チ

タン (TiO₂) が若干増加していて0.88%、バナジウム (V) 0.02%と砂鉄特有成分は上昇気味であった。酸化マンガン (MnO) 0.14%、銅 (Cu) 0.001%から、やはり砂鉄系素材が裏付けられる。

3-3. B区 HSE2 (溝状遺溝) 出土品

(1) HAMA-3. 鉄滓 (精練鍛冶滓)

① 肉眼観察

表皮は赤褐色を呈し、凹凸が少なく平坦面を有した碗形滓である。裏面は白黄灰色粘土を付着し、反応痕を僅か残す。

② 顕微鏡組織

Photo. 2の①～③に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイトと、その粒内に微小のウルボスピネルを品出したものと、木ずれ状の淡灰色ファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。ウルボスピネルの明瞭な析出から荒鉄成分調整の精練鍛冶滓に分類される。

③ 化学組成

Table. 2に示す。鉄分は多くガラス質成分の少ない鉄滓である。すなわち、全鉄分 (Total Fe) は58.56%に対して金属鉄 (Metallic Fe) は0.15%、酸化第1鉄 (FeO) 55.34%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 22.01%の割合である。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は17.865%で、このうち、塩基性成分 (CaO+NgO) は少なくとも1.51%留りであるが、砂鉄特有元素の二酸化チタン (TiO₂) が1.63%、バナジウム (V) 0.07%から砂鉄系鉄素材の精練鍛冶滓に分類される。酸化マンガン (MnO) 0.11%、銅 (Cu) 0.001%の値も精練鍛冶滓を裏付ける。なお、該品は前述したG4出土鉄滓のHAMA-1, 2の鉄素材とは別系統であろう。これは塩基性成分や五酸化磷 (P₂O₅) の含有量が低め傾向にシフトするからである。

(2) HAMA-4 鉄滓 (精練鍛冶滓)

① 肉眼観察

表面は黒色の基地で、これに黄褐色を交え、滑らか肌に木炭痕を残す小型の碗形滓である。裏面は黄白色の粘土を付着する。

② 顕微鏡組織

Photo. 2の④～⑤に示す。鉱物組成は白色粒状ヴスタイトと、その粒内微小析出物を含めて淡茶褐色多角形ウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)、淡灰色盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。精練鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度

Photo. 2の⑥に淡茶褐色多角形結晶に硬度測定を行った圧痕写真を示す。硬度値は733

Hvであった。マグネタイトの文献硬度値が500~600Hvであって、これにチタン(Ti)^④を固溶すると硬化する。当硬度値はウルボスピネルに同定できる。

④ 化学組成

Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)が54.82%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.11%、酸化第1鉄(FeO)59.87%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)11.69%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は20.725%あって、このうち、塩基性成分(CaO+MgO)が1.77%と、これも低値で前述したHAMA-3に近似する。該品は脈石成分が急増し、二酸化チタン(TiO₂)5.13%、バナジウム(V)0.12%と高く、酸化マンガン(MnO)も0.26%と多い。製練滓成分に近づく値であって精練鍛冶滓に分類される。

3-3. A区 1, 2号鍛冶炉出土品

(1) 鍛造剥片(1号鍛冶炉出土)

① 肉眼観察

赤熱した鉄素材を空気中で鍛打すると表面の薄い被膜が剥落飛散する。これをスケール、金肌、鍛造剥片などと呼ぶ。工程が進むと厚いものから薄いものへ、色調は黒色から銀色へと変化する。各遺跡の鍛冶工程の段階を押さえる上で重要な遺跡となり、鍛冶作業を実証する。

鍛造剥片は微細な遺物である。鍛冶跡床面の土砂を水洗することにより検出されてメッシュを組んで土砂を取上げ、水洗秤量後分布状態を調べれば鍛冶工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる。^⑤

当遺跡の鍛造剥片は、6基の鍛冶炉から採取されていたので、フルイ分けして、4mm、2.8mm、1.4mm、0.71mmの4種の大きさの異なるものの組織を調査した。Table.3の外観観察を参照されたし。

② マクロ組織

Photo.3, 4に5倍の断面全体像を示す。

サイズの大きいものは厚く、小さいものは薄くなる。また気泡は大きく厚いものに多く発生する傾向をもつ。

③ 顕微鏡組織

Photo/3の①~④は4mmのフルイに留まった剥片である。②は50倍で全体像を提示した。左側に小剥片2枚を抱え込んでいてヴスタイトの凝集部で構成される。右側は同じくヴスタイトの凝集部あり、小粒ヴスタイトとファイヤライト共存部ありの雑多集合体となっている。③と④は拡大組織である。

⑤⑥は2.8mmフルイに掛かった剥片の組織であってヴスタイトが大きく成長した結晶と暗黒色ガラス質スラグが共存する。

1.4mmサイズの剥片はPhoto.4の①に示す。該品もヴスタイトの凝集組織であった。

0.71mm剥片はPhoto.4の②に示すようにヴスタイトの凝集組織で表層側は酸化されてヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3) となっている。上面は鍛打加工で平坦性を保つが、母材接触側の下面は一種の強制剥離なので凹凸喰い込み面を呈するものであった。各サイズ共通する。

④ ビッカース断面硬度

Photo.3の①に4mmサイズ剥片のヴスタイト凝集部の硬度測定を行った圧痕写真を示す。硬度値は412Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450~500Hvで、下限値を外れているが、圧痕周囲にクラックが発生し、若干の誤差を生じている。この程度の外れは時折り起こることなので、一応ヴスタイトの同定間違いないと考えている。

(2) 鍛造剥片 (2号鍛冶炉出土品)

① 肉眼観察

1号鍛冶炉出土品に準じたものである。詳細はTable.3を参照されたい。

② マクロ組織

Photo.4, 5に示す。これも1号鍛冶炉出土品と大差ない。ただし、2.8mm品は錆化鉄剥片のゲーサイト (Goethite: $+\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) の混入となっていた。

③ 顕微鏡組織

4mmサイズ剥片の鉱物組成は、Photo.4の③④のように白色粒状ヴスタイトの凝集組織で形成される。2.8mmサイズ剥片は試料の選択が悪く錆化鉄剥片のゲーサイト (Goethite: $+\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) であった。ただし、ゲーサイトの傍らにヴスタイト凝集極小剥片を付着していた。

1.4mmサイズ剥片はPhoto.5の①に示す。これもヴスタイトの粒界がみえぬ凝集型であった。0.71mmサイズ剥片をPhoto.5の②に示す。こちらも凝集ヴスタイト組織である。

1、2号鍛冶炉出土鍛造剥片は、4~0.71mmの間に鉱物組成の変化はなく、いずれもヴスタイト凝集型であった。このタイプは鍛錬鍛冶も最終工程 (4次目前後が想定される) での派生物とみる事が出来る。鉄器製作最終段階を考えて良からう。^⑧

(3) 粒状滓 (1号鍛冶炉出土)

① 肉眼観察

粒状滓も鍛造剥片と同様に鍛冶作業を実証する有力な遺物である。鍛冶作業に際してまだ平坦化されてない鉄素材は、酸化・焼減防止を目的として粘土汁が塗布される。これが鍛冶炉の羽口吹出し高熱部において突起部は溶解溶落し、表面張力の関係から球状化する。このため粘土汁と鉄の酸化物 (Wüstite: FeO)、時には金属鉄の溶け込みなどから形成される。鍛錬鍛冶も前半時に派生して、鉄素材の平坦度が出て突起箇所がなくなると発生しなくなる。Table.3に個々の外観は示してある。只々この粒状滓

は製鍊時の銑鉄玉、精鍊鍛冶の鉄滓玉など粉れやすいのが、鍛鍊鍛冶の粒状滓の特徴は、表面に1ヶ所空気抜け気孔を有する事である。

② マクロ組織

4、2.8、1.4、0.71、0.71mm以下の5ランクの粒状滓の埋込み試料断面を観察するといずれも中核部は空洞化し、更に肉厚部に対しても気泡を内蔵する。

③ 顕微鏡組織

4mmサイズの粒状滓組織をPhoto.5の③に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイトの凝集で占められる。黒色円形部は気泡である。

2.8mmサイズは④に提示した。これも白色粒状ヴスタイトが中核側で認められるが表層側は粒界のない凝集ヴスタイトとなっている。

1.4mmサイズは⑤にあるように、暗黒色ガラス質スラグ中金属鉄が不定形状に混在している。粘土汁部溶融物であった。

0.71mmサイズは、表層側に金属鉄の錆化したゲーサイト (Goethite: $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) を残し、これに亀裂が走る。0.71mm以下は2種を撮影した。②はヴスタイトの凝集組織、⑤は暗黒色ガラス質スラグ中に淡灰白色樹枝状のマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) を品出する。

④ ピッカース断面硬度

Photo.6の④に0.71mm以下粒状滓を形成する凝集ヴスタイトの硬度圧痕を示す。硬度値は436Hvであった。ヴスタイト文献硬度値の450~500Hvの下限から若干外れるがクラックの影響もあって、一応ヴスタイトと同定される。

(4) 粒状滓 (2号鍛冶が出土)

① 肉眼観察

1号鍛冶炉出土品に準じていて差異はない。

② マクロ組織

中核部の空洞化や気泡があって1号鍛冶炉出土品と大差ないものである。

③ 顕微鏡組織

4mmサイズ粒状滓の組織をPhoto.7の①~③に示す。鉱物組成は、白色粒状ヴスタイトであるが、表層側は酸化されてヘマタイトになっている。

2.8mmサイズ粒状滓は④の組織にあるようにヴスタイト凝集であった。

1.4mmサイズは⑤~⑦の如く白色粒状ヴスタイトが品出しており、やはり表層側は酸化を受けてヘマタイト化していた。

0.71mmサイズの粒状滓は、前述1.4mmサイズと同様な白色粒状ヴスタイトであるが、こちらの表層は酸化されていなかった。

0.71mm以下の2種の粒状滓は、いずれもマグネタイトの品出であって羽口近傍高温

側の派生物と考えられる。

Table 3 鍛造剥片・粒状滓の外観観察

鍛冶炉No 1	粒 状	鍛 造
4.00mm	4 g 球状、粒状を呈し、サビている	2 g 不定角形を呈し、サビている
2.80mm	2 g 球状、粒状を呈し、黒色、サビているものが多い	2 g 不定角形を呈し、サビているものが多い
1.40mm	1.5 g 球状を呈し、黒色、サビているものが多い	2 g 不定角形を呈し、サビているものが多い
0.71mm	1 g 球状を呈し、光沢を放つものと黒色のものがある	2.5 g 不定角形で光沢のあるもの、黒色、サビているものがある

鍛冶炉No 2	粒 状	鍛 造
4.00mm	1 g 球状でサビている	2 g 不定角形を呈し、青黒色、サビているものが多い
2.80mm	3 g 球状を呈し、青黒色の光沢を放つもの、黒色、サビているものがある	7 g 不定角形を呈し、光沢を放つものは少なく、黒色、サビているものが多い
1.40mm	3 g 球状を呈し、光沢を放つもの、黒色、サビているものがある	9 g 不定角形を呈し、光沢を放つものは少なく、黒色、サビているものが多い
0.71mm	1 g 球状を呈し、黒色のものが多い	1 g 不定角形を呈し、光沢を放つものと黒色のものがある

注) フルイのメッシュ4、2.8、1.4、0.71mmに止まったところを分類。

4. まとめ

浜崎遺跡は、木渡の地頭、天草氏の本拠地の可能性の高い集落である。中世に属する当集落内では、鉄器製作の自給がなされていて、鉄素材調達のための荒鉄（製錬生成鉄で、表皮付着スラグや捲込みスラグ、時には炉材粘土などの不純物を含む鍛冶原料鉄：鉄塊系遺物）の成分調整を行った精錬鍛冶（大鍛冶）から、鉄器製作の折返し曲げ鍛接の鍛錬鍛冶の鍛冶一貫作業が行われている。これらの作業内容を実証する精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の鉱物組成及び化学組成を押さえる事ができた。

更に重要な点は、6基の鍛冶炉より赤熱鉄素材の鍛打で飛散した鍛造剥片や、赤熱鉄素材の突起箇所より溶落した粒状滓が検出された。それらは6基のうち2基（1、2号鍛冶炉）分の鉱物組成（凝集Wüstite: FeO）から鍛錬鍛冶の後段階での派生物の確認がとれたことである。これらの遺物は、鍛冶工房の操業を証明し、多数の鉄製農具の製作があったと推定された。

なお、当遺跡C区では近世において、宵銅鑄造のあった痕跡も何われたが、こちらの調査検討は後日の課題となった事を付記して擱筆する。

《注》

- ① 平田恵弘「浜崎遺跡調査状況」木渡市教育委員会資料 1990.12.7
- ② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織および鑑別法』1968
- ③ ②と同じ
- ④ ②と同じ
- ⑤ 拙稿「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第13集）福岡県教育委員会 1991
- ⑥ 拙稿「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘年報』15（平成3年度）千葉県立房総風土記の丘 1992.10.1 塩基性砂鉄系荒鉄を鍛打してゆくと、第1次、第2次鍛錬時までの鍛造剥片は確実にUlvöspinel ($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) とWüstite(FeO)の混在組織であって、4次鍛錬となるとWüstite凝集組織となってくる。

Table 2 鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全成分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化鉄 第1鉄 (FeO)	酸化鉄 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 ケイ素 (SiO ₂)	二酸化 アルミ ニウム (Al ₂ O ₃)	酸化チ タン (TiO ₂)	酸化 マンガン (MnO)	酸化 カルシ ウム (CaO)	酸化 マグネ シウム (MgO)	酸化 ナトリ ウム (Na ₂ O)	二酸化 チタン (TiO ₂)	酸化 クロム (Cr ₂ O ₃)	酸化 珪素 (SiO ₂)	五酸 化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナ ジウム (V)	銅 (Cu)	渣滓成分		注	
																							Total Fe	Total Fe	Total Fe	Total Fe
HAMA-1	浜崎	B区 HsG ₄ 492	錠 練	13C	57.29	0.30	53.46	22.06	10.75	3.11	2.30	0.85	1.36	0.200	0.19	0.31	0.02	0.02	0.55	0.11	0.01	0.001	18.570	0.324	0.005	
2	"	"	"	"	20.67	0.21	16.48	10.94	54.01	10.12	1.62	0.81	1.43	0.555	0.14	0.88	0.02	0.01	0.35	0.13	0.02	0.001	68.545	3.316	0.043	
3	"	B区 HsA1004上層	錠 練	"	58.56	0.15	55.34	22.01	12.05	3.94	0.76	0.75	0.23	0.135	0.11	1.63	0.02	0.03	0.25	0.08	0.07	0.001	17.865	0.305	0.026	
4	"	"	"	"	54.82	0.11	56.87	11.69	14.01	4.44	0.88	0.89	0.39	0.115	0.26	5.13	0.04	0.01	0.29	0.11	0.12	0.001	20.725	0.378	0.094	

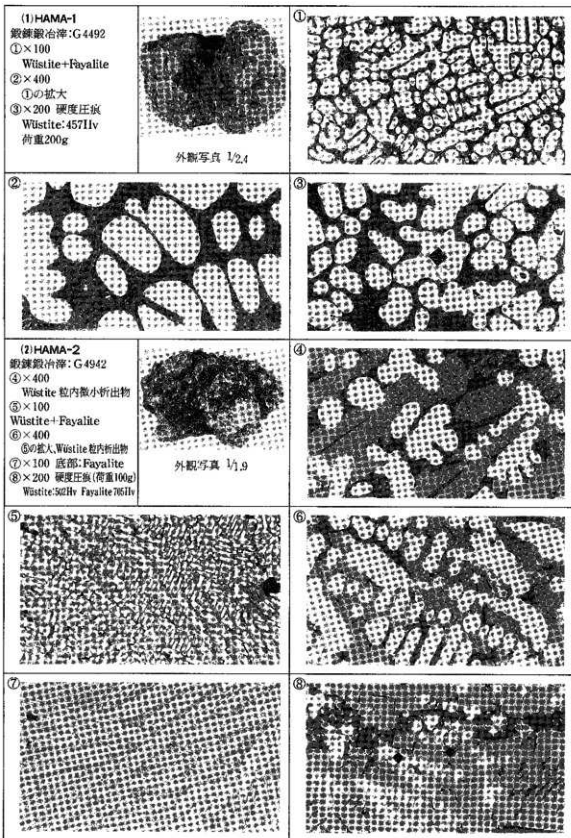


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織

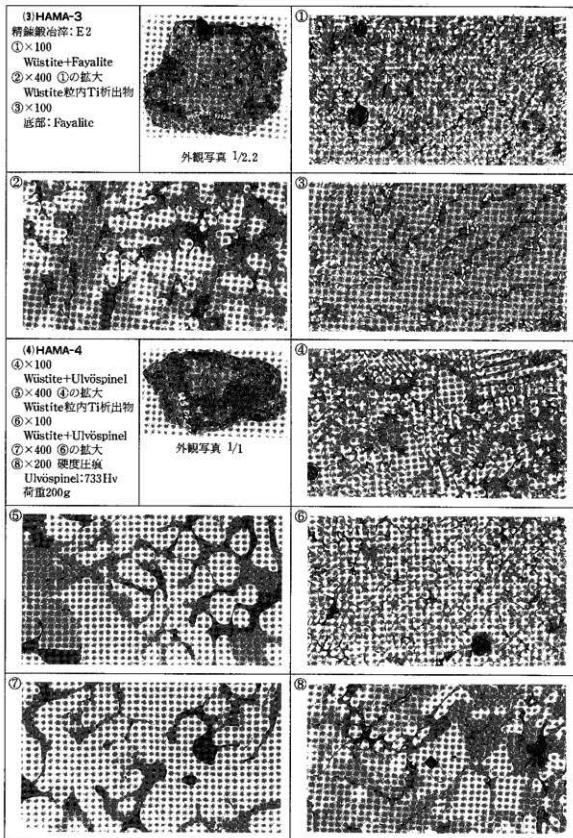


Photo.2 鉄滓の顕微鏡組織

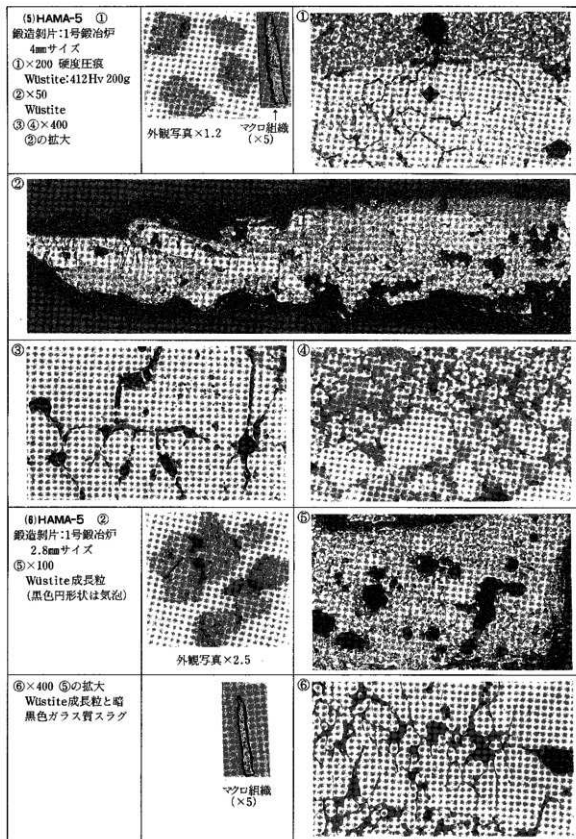


Photo.3 鍛造剥片の顕微鏡組織

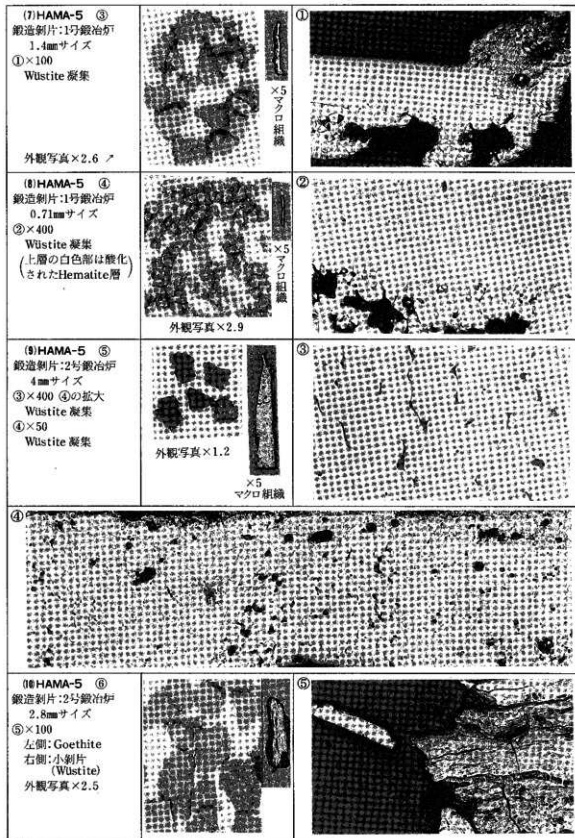


Photo.4 鍛造剥片の顕微鏡組織

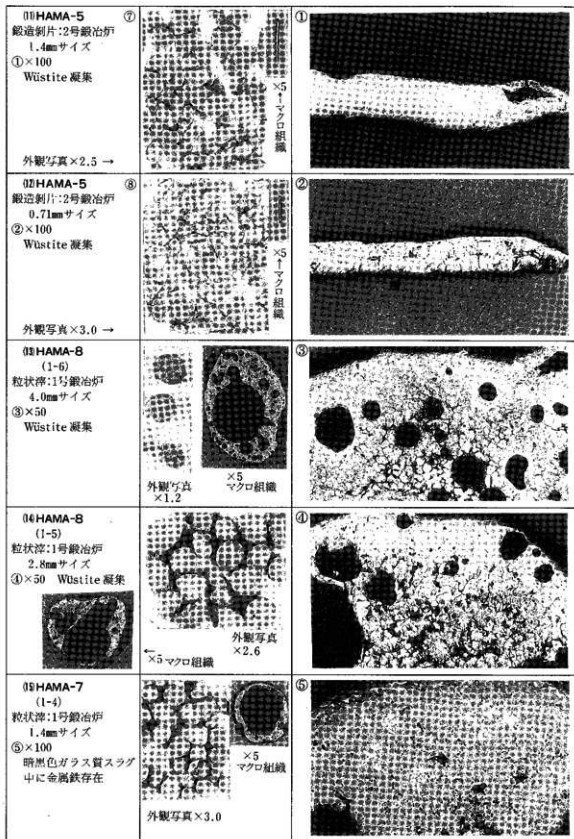


Photo.5 鍛造剥片、粒状滓の顕微鏡組織


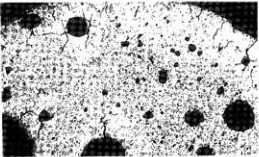


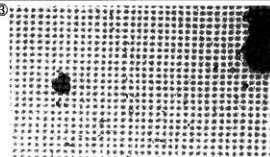
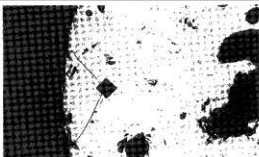


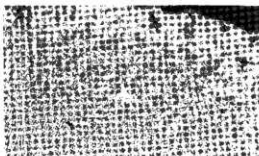
<p>06HAMA-7 (1-3) 0.71mmサイズ ①×50 表層側は金属鉄の錆 化組織で亀裂が認め られる。</p>	 <p>×5 マクロ組織</p> <p>外観写真×3.0</p>	<p>①</p> 
<p>07HAMA-6 (1-2) 0.71mm以下のサイズ ②×50 Wüstite 凝集 ③×400 ②の拡大 ④×200 硬度片痕 Wüstite:436Hv 荷重200g</p>	<p>外観写真なし</p>  <p>×10 マクロ組織</p>	<p>②</p> 
<p>③</p> 	<p>外観写真なし</p>	<p>④</p> 
<p>08HAMA-6 (1 1) 0.71mm以下のサイズ ⑤×50 暗黒色ガラス質スラグ とMagnetite樹枝品</p>	<p>外観写真なし</p>	<p>⑤</p> 
<p>⑥×400 ⑤の拡大 Magnetite樹枝品</p>	 <p>×10 マクロ組織</p>	<p>⑥</p> 

Photo.6 粒状滓の顕微鏡組織

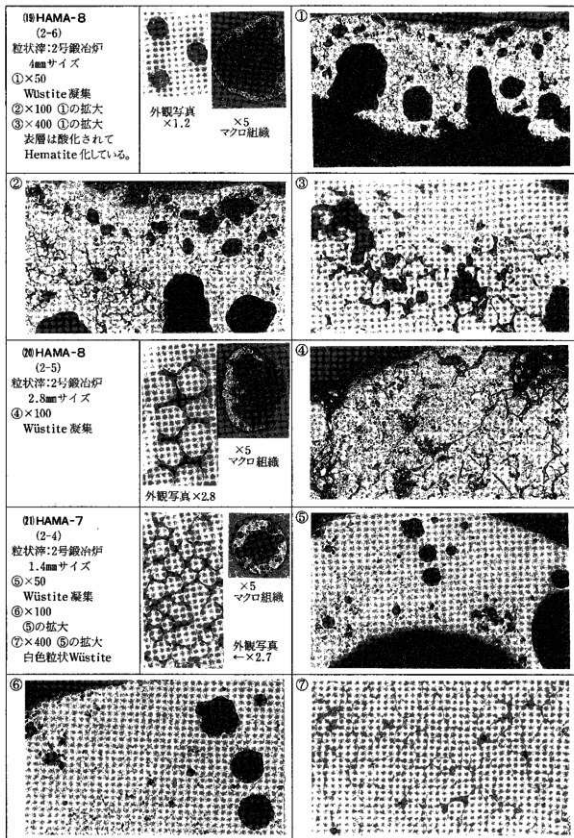


Photo.7 粒状滓の顕微鏡組織

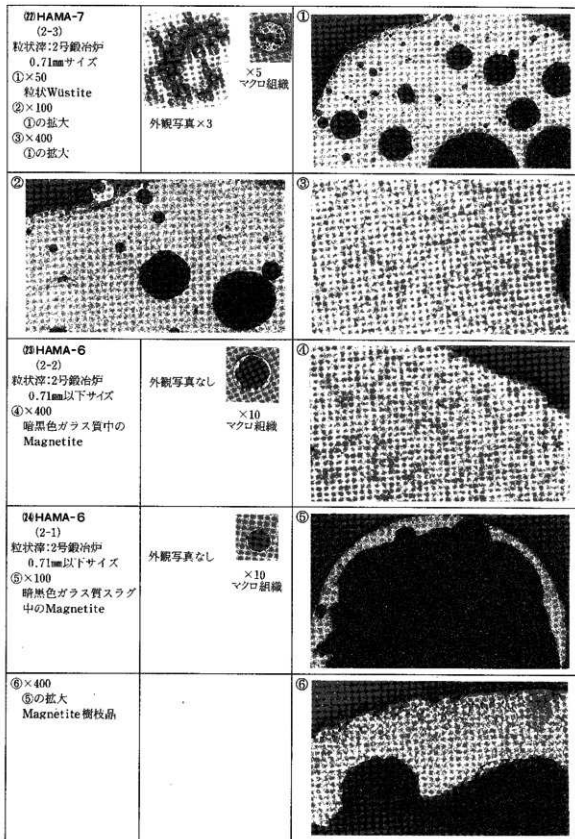


Photo.8 粒状滓の顕微鏡組織

5. 浜崎遺跡出土遺物の¹⁴C年代測定

(¹⁴C年代と年輪年代の対照表の読み方)

山田 治 (京都産業大学)

¹⁴C年代は適切な修正を加えれば完全な絶対年代に置き換えることが可能である。最も理想的な年代を示すと考えられる試料は、確実な年数のわかっている年輪である。

次の表は¹⁴C年代と年輪年代の対照表である。アメリカのアリゾナ大学の年輪研究所で、古い木材の年輪を今から1万年以上もさかのぼって数え、確実な絶対年代を誤差数年程度で得ている。その年輪を10年～20年の幅で切取り、それぞれの¹⁴C年代測定値を求めて両者の対照表を作っている。くわしいことは1986年のRadiocarbon誌にのっているので参照されたい。また、東村武信著「考古学と物理化学」改訂版、(学生社刊)にもくわしい説明がある。

この表を使って、¹⁴C年代から絶対年代へ換算することができる。¹⁴C年代測定結果の一つが¹⁴1080±20BPであるから、これを年輪年代に置きかえてみよう。

下表(1)の西暦紀元(AD)の部のBP Yearの欄を下に見て行くと、¹⁴1000¹⁴という数字がある。また、BP Yearの横に並んだ数の中に、¹⁴80¹⁴という数がある。この二つの数字の縦と横の交点に、¹⁴974¹⁴という数がある。つまり、¹⁴1080±20¹⁴という¹⁴C年代測定値は、年輪年代の補正をすると、AD974年に相当することになる。

単純計算では、1950-1080=AD870となるから、真実と考えてよい年代との間には百年の差が生じる。

次に、誤差を考えると、1シグマの範囲では、1060～1100BPであるから、表からAD985～961ということになるが、これは(±20)としておいてよいであろう。

なお、年輪年代についての修正の研究はこの表で終わったわけではなく、今後もまだまだずっと続けられていくものと思われる。したがって、この表の値はいまのところは一番真の年代に近いが、将来はまだ多少の変更がくわえられる可能性があるので、当分の間は十年以下の小さい数字までは絶対視しないほうがよいであろう。

正式には、あくまでも¹⁴C年代が基本である。公式記録には必ず測定機関記号、測定番号と¹⁴C年代測定値を記載しておかなくてはならない。その¹⁴C年代測定値さえあれば、そのときまでに得られた確実な絶対年代値に換算できるのである。

浜崎遺跡の¹⁴C年代測定結果

試料番号	試料名	¹⁴ C年代測定値
KSU-2279	本渡市浜崎遺跡 木炭 No.1 SD2+SD8 黒色泥炭層	年輪年代 990±10 AD1020±10
KSU-2280	本渡市浜崎遺跡 木炭 No.2 土壌4(SK4) 黒色炭化層	年輪年代 1080±20 AD 970±20

(註) 年輪年代については、「¹⁴C年代と年輪年代の対照表」参照。

¹⁴C年代では90年の差が見掛け上あるようになっていますが、年輪年代では50年であります。古いほうがSK4で、10世紀末、新しいほうがSD2、SD8で11世紀初頭ということになります。

(1)

¹⁴ C Age 西暦紀元後 A D の部					
BP Year	0	20	40	60	80
0					1898
100	AD1885	1696	1686	1679	1673
200	1666	1660	1654	1648	1642
300	1636	1523	1514	1486	1474
400	1460	1448	1443	1437	1431
500	1442	1414	1407	1401	1328
600	1317	1306	1295	1288	1283
700	1279	1275	1270	1265	1259
800	1245	1225	1217	1181	1166
900	1159	1047	1039	1030	1024
1000	1018	1012	999	985	974
1100	961	897	891	886	880
1200	811	785	776	725	689
1300	681	673	666	660	654
1400	647	637	620	605	596
1500	561	548	539	462	441
1600	429	420	412	398	381
1700	343	265	257	249	238
1800	227	214	140	129	118
1900	87	77	66	28	15

修正された年代
A D の部

(2)

¹⁴ C Age 西暦紀元前 B C の部					
BP Year	0	20	40	60	80
2000	BC 1	36	50	96	105
2100	151	168	187	196	339
2200	353	362	370	379	388
2300	392	395	399	402	405
2400	408	484	523	755	760
2500	765	770	786	793	797
2600	801	805	809	818	828
2700	838	892	901	909	920
2800	976	992	1003	1021	1045
2900	1093	1124	1159	1252	1258
3000	1263	1300	1314	1382	1394
3100	1406	1416	1424	1433	1445
3200	1506	1514	1519	1523	1590
3300	1607	1621	1643	1677	1685
3400	1733	1740	1746	1851	1872
3500	1877	1883	1888	1908	1936
3600	1961	2018	2032	2037	2123
3700	2133	2138	2181	2195	2202
3800	2278	2288	2316	2343	2453
3900	2457	2462	2466	2470	

修正された年代
B C の部

をきずき、使者に矢を放って抵抗したので果たせなかつたいう。この天草三郎大夫種世の時代には、本砥・亀川・河内浦・大江の他、島子までを支配地の中に入れていたことは注目すべきであらう。

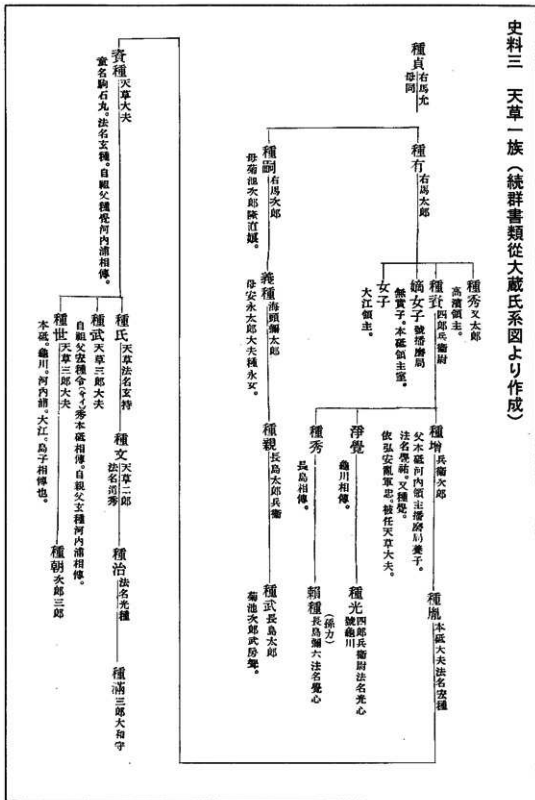
六、おわりに

以上、十三世紀のはじめから十四世紀のなかばにいたるまで約五十年間、本渡をめぐる天草氏と志岐氏の動静を見てきた。志岐氏は菊池の出であり、天草氏は原田党の出であるとの出自の相違をこえて、或るときは協力し、或る時は抗争しながら、それぞれ独自性を保ってきたさまは、まことにみごとであるともいえる。

しかもその関係は十六世紀末、両雄が共に天草から姿を消す時まで続くのであるが、そのことについてはここに関係ないので省略せざるを得ない。然もたえざる両雄の抗争の的となつたのが本渡であつた点も最後にあつて特に強調しておきたいと思ふ。

なお、本稿執筆に当たっては、続群書類従の大蔵氏系図や天草郡史料二の他、九州史学53・54合併号の藤野氏の「大宰府府官大蔵氏の研究」、山口修氏稿『天草の歴史』等、多くの資料を参考にさせて頂いた。記して謝意を表したい。

史料三 天草一族（続群書類從大藏氏系圖より作成）



分も見うけられた。この点「史料一」の種有の法名を極楽と言ったこととの関連が注目されるのである。もともと種有の子播磨局は一族の菩提寺として亀川に來迎寺をつくったとの史料もあり、亀川古寺にはその跡であろうとされる遺跡もあるが、當時は一族の菩提寺は一つと限ったことでなく、代々自分の寺を寄進するのが通例であつてみれば、これも種有本渡居住説の一つの証拠にならう。

ここで今一つ加えて申したい事は、「ホンド」の用字についてである。「ホンド」の用字は特殊なものとしては十六世紀の中国の図書編に「昏陀」とされたのがあるが、ほとんどは「本砥」、「本戸」、「本渡」が一般的である。一般に地名についての用字は表意的使用例もないではないが、ほとんどは表音文字としての使用で、用字そのものには大して意味がなく、古来そう説めさえすればどんな文字を使つてもよかつたのである。地名用字が統一されるようになるのは近代になつてからである。中世においてはほとんど「本砥」が使用されているのは、「と」と発音する場合、「砥」という漢字がまず頭にうかんだからにはかななるまい。

五、天草氏と志岐氏の關係

次に「史料一」の文書が天草氏関連文書であるのに、志岐文書の中にこの文書が伝存した理由である。

その為にはその後の天草氏と志岐氏の關係を考察する必要がある。

ある。先ず種有以後の天草氏系図「史料三」及び志岐氏系図「史料四」を参考に論を進めたい。

史料三・四は共に鎌倉期以後中世中期までの天草氏・志岐氏の系図を示したものである。

先ず天草氏について考えれば、種有の四人の子供はごらんの通り、高浜等を領した又太郎は種秀、河内浦を領した駒王は、四郎兵衛種資であつたことがわかる。嫡子播磨局は誰に嫁いだのか不明であるが、実子がなかつた為に、兄種資の子種増を養子としたことがわかる。又この播磨局は亀川の地を開拓しここに來迎寺をたて、明心をその住持とし、塩屋浦等の新開地を寺領に寄進した。実はこのことがあとで一大事に發展するのである。又播磨局の養子となつた種増は、弘安四年（一二八一）の元軍來襲に際し大矢野兄弟等と同じく出撃したと見え、その軍忠によつて天草大夫に任せられる。即ち彼等が天草氏を正式に称するのはこれからであらう。亀川は弟の淨覚の領地、長島も同じく種秀の領地になつてゐる。これが多分長島氏の祖になるものである。本渡について考えれば、種有から播磨局に相伝され、種増代に一時中絶して、その子種胤が本砥大夫に任せられて、ここに本砥氏が誕生。以後資種、種武、為種世とつづくのである。

ところで志岐氏はというと、最初に志岐を称したのは、元久二年（一二〇五）関東下文を受けた藤原光弘の祖父弘家がす

四、本砥島考

次に「史料一」にある本砥島のことについて考えてみよう。「史料一」によれば、種有が貞永二年（一二三三）に一族に配分した土地は次のようになっていた。これらはすべてそれまでは種有が所有していたわけである。

妻及び駒王相統分 河内浦

女子大隈相統分 大江

又太郎相統分

鍛冶山河内？ 平浦
産島・高浜

嫡女播磨局相統分

その他全部

ごらんの通り、この中には具体的には本砥の地名は見えないけれども、総称して本砥島と言っていることや、他の史料によつて播磨局分となつているその他の中に本砥が入つてゐることは確かであろう。概観すれば、現在の天草下島南東部の不知火海及び東支那海に面した一帯であるが、それを何故総称して本砥島としてあるのであらうか。ことに志岐氏の場合は、「天草郡内六ヶ浦の地頭」としてゐるのに、種有の場合、所領の中の一部の地名をとつて全体を表示してゐるのは、何としても異質である。

然し私は、その所領の中では本砥が最も開拓の進んだ所であつたし（前の時代の古墳の分布から考えても）、ことに種有が土

着し定住した所が本砥であつたからではないかと思う。これと似た例は十六世紀西洋人が天草に来航した時の記事に、「志岐島・上津浦島」等と表記した記事があるが、これもたまたま彼等が来航した場所が志岐であり、上津浦であつたからにほかならない。「天草由来」や「天草郡由記」等には、

肥後国天草郡は離島にして隠里の如く、古へは領主もなかりし処、いつの頃にや、漢の高祖の末孫とかや申す帝王、軍に對負け異国より日本へ渡海。天草の内に漂着ありけるよし。其所を今に軍ヶ浦と宮、大江村に属す。其王瀬戸村にこれあり、自分嶋の領主と成。姓名を日本の風に改められ瀬戸十郎兵衛大藏氏種元と名乗る。子孫繁昌ありけるよし。其後神と祝大王の宮と号す。今瀬戸村の氏神是なり。云々

とある。勿論これは伝承をもとにした後世の文献で、それをそのまま信用することは出来ないが、大藏氏が来島した所を軍ヶ浦とし、定住した所を瀬戸村としてゐることは注目すべきであらう。

ここでいま一つ注目すべきことは、平田氏も調査書本文で述べて居られる通り、本渡北地区浜崎に極楽寺跡と呼ばれる廃寺址があることである。附近からは十二、三世紀の遺物も出土しているというし、かつては附近には多数の五輪塔、宝篋印塔部

史料二 大藏系図における種有（統群書類従本より作成）

後漢光武皇帝秀 明帝暉 章帝和 清河王慶 安帝熹 順帝保 冲帝炳 質帝詡 桓帝志 靈帝詝 獻帝操 石秋王
孝德王當宗忌寸祖

阿智使主
孝德天皇之御宇年十七個人尖歸化、詔賜大和國高市郡高市村而居焉。郡内極斷墓寸及十七個人大福地高野、他數百十而一二。
 高貴王
 志驥直
本朝丹波國出生、賜款上姓。
 山本直
賜大藏姓。
 爾波木直
賜內藏姓。
 高市大領
 檜前領主
 家主
 泉

横佩
 岩三
 村主
仁明天皇十年賜岩三。

春實阿馬守兼五位下
天壽二年五月三日賜御賜大福刀。
退朝最良純友、其時大將四人、所謂大藏者其小對好古、德誠保、高直正也。
 種光大率大貫主
德若門將軍、太率大藏、天下無雙弓馬連者、後一條院明字夏仁、年百有餘、壽可九州觀人之出有其告、其時大藏村安原直而歸阿、命退治西夷、在西將軍或首領九州、依祖父例賜御旗。
 種材從五位下皇族等
 光弘從五位下太率少監
 種弘從五位下大率大藏
 女子

種通
 邦清
 種光
 種長
 種政
 種行
 種澄
 種親
 種成

種福從門守大率大藏
號若門少輔、又神貴兒。
 種宗號若平權守
號若國親子領知行。
 種高貫主
 種紀大率大藏
 女子原田妻

現在東京大学史料編纂所に所蔵されているこの文書は、本来志岐氏に伝存のものであつて、案文(写本)ではあるが、本砥島本主種有が貞永二年(一二三三)嫡女播磨局他一族に所領を配分したことを示す天草史上有名で又貴重な文書である。

しかしその反面、次のような数々の問題をはらんだ文書でもある。問題の第一点は、その種有とは一体いかなる人物で、いつ、又いかなる理由で本砥島の地頭職を与えられたかという問題がある。第二には、本文書には本砥島本主とあるが、本砥島とは何かという問題がある。第三には、内容から考えると本文書は純然たる天草氏の文書と思われるのに、それが何故志岐文書の中に入っているのかという問題もある。即ち志岐文書の中に入っているのは、志岐氏において何か本文書に対する必要性があつたからであろうが、それは何かという問題である。第四に前のことと関係があるうと思われるが、本文書には二個所の後世の書き込み(天草右馬太郎本砥之本主(本砥島本主右馬太郎法名極楽 是者字初之讀文)がある点についても検討を要しよう。以下の様な諸問題をめぐつて、本渡をめぐる両者の本渡とのかかわりをみてみたいと思う。

三、天草氏の出自

先ず第一点の、種有は一体いかなる人物なのかという点については、次に示す『統群書類従』の大蔵氏系図の中に種有につ

いて貴重な記録があるので、種有が大蔵原田の一統であることは確かであろう。(史料二)

もつとも大蔵系図には十指にあまる異本があり、殊に、はたして府官大蔵氏の祖とされる春実が、備化人阿智主の子孫であるかについては疑問もたれているが、春実以後については、ほぼ信頼に師するものとされている。

本系図によれば種有の父は有馬允種貞であり、母は菊池隆直の娘であつたかと思われる。又、従兄弟の種能は大屋野十郎とあり、彼が大矢野氏の祖になるものと思われる。

種有がいつ、又、どのような理由で本砥島地頭に取立てられたかは不明であるが、父種貞の従兄弟原田種直は、彼こそ原田一党中興の祖とも称すべき人物で、対奈貿易による財政力を背景に強大な軍事力を持ち、九州において絶大な権力をふるっていた。特に平氏にあらざれば人にあらずと言われた当時平氏と結んで大宰小式に任ぜられ、治承、寿永の戦乱にも平氏の為に働いた。殊に壇の浦合戦の直前には、自宅を転じて安徳天皇の皇居にしたといわれている。(ちなみに彼の室は内大臣平重盛の養女であつた)。

しかし事は平氏の敗戦に終わったので、一族は九州各地に離散せ居ることになつたのである。一族の種有や種能が本砥島や大矢野に渡つたのは或はこの時ではなかつたらうか。勿論その裏には、彼等が菊池氏と姻戚関係があつたことがあるが、御所浦等に平氏落人伝説が残つていふこととあわせて気になる。

中世本渡と天草・志岐両氏

鶴田倉造

一、はじめに

中世の本渡と関係深い豪族は天草氏と志岐氏であるが、中心になるのは何といつても天草氏である。両者は共に十三世紀はじめから天草との関係をはじめ、十六世紀末までの約四百年間、天草における支配をつづけている。その中、特に本稿においては、本渡北地区調査に焦点を合わせ、初期の段階を中心に、本渡をめぐる両氏の関係を考察してみたい。



二、本渡についての初出史料とその問題点

本渡についての初出史料は、次にかかげる貞永二年（一二三三）の「天草種有讓状案」（志岐文書）である。

史料一 天草種有讓状案（志岐文書）

ゆつりわたす

ひこのくにあまくさのこほりのうちたねあり入道かりやう
天草右馬太郎本渡之本主
ほんとのしま乃ちとうしき乃事

右、くたん乃しまのちとうしきハ、はりま乃つほぬをちやくしとして、代々乃御くたしふミをあひくして、ゆつりわたすところなり、このうちかうちのうらハ、めにて候も乃ならひに、こまわうにおもひあて候ぬ、又おほミと中候むらハ、女子をくまにゆつり候ぬ、かちやまかうち、をなしきしんひらきたかハま・ひらうら・うふしまハ、又太郎入道にゆつり候ぬ、そのほかハ、はりまのつほねに一向に知行せられ候へし、たゝしめの女・こまわう・をくまかふんも、はりまのつほねを入道かあとそむして、そのめいにたかふへからず、又はりまのつほねも、をやのゆいこんをたかへす、これらをおやのかたミとそむして、まとハかさす、れんみんすへし、のちのそうもんのために、ゆつり状をわたすところ、くたんのことし

ちやう急い二年~~三月~~二月十六日

たねあり入道 在判

本渡島本主右馬太郎法名鑑案
是省當初之讓文

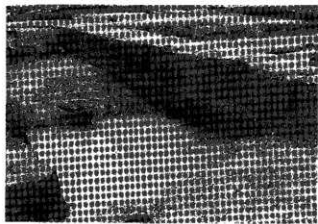
中世本渡と天草・志岐両氏

鶴田倉造

圖 版



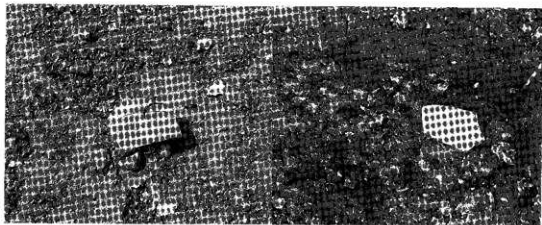
▲遺跡近景 (1990年7月30日)



▲SD1 検出状況

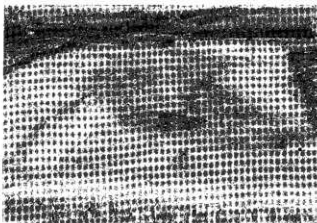


▲SD1
遺物出土状況 (獸骨)



▲SD1 遺物出土状況 (瓦器) (白磁)

第1図版 SD1 調査状況



▲SD2拡張 確認状況

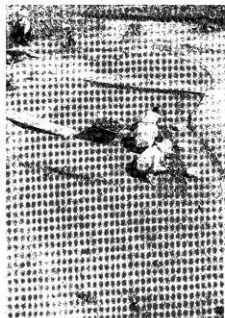


▲SD2拡張 検出状況

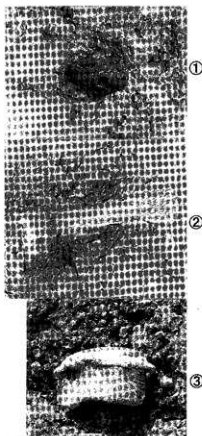


▲SD2拡張 水がたまった遺構

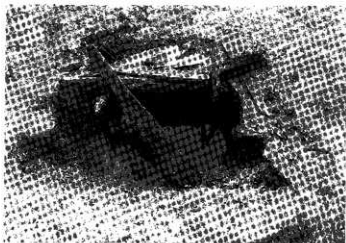
第2図版 SD2拡張 調査状況



▲SD2拡張 発掘状況



▲SD2拡張 遺物出土状況
(コマ形木製品①)(鼓②)
(石鍋③)



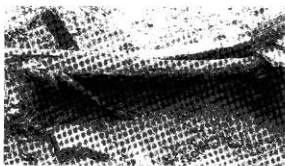
▲SD2 拡張 井戸検出状況



③

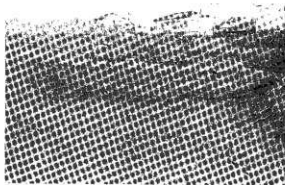
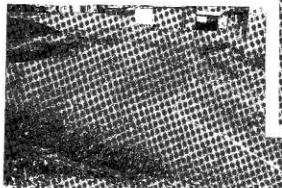


①



②

▲SD2 拡張 井戸検出状況
(各部拡大①②③)

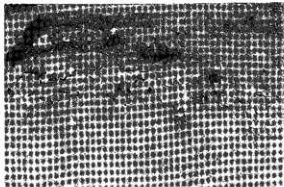


▲SD6 検出状況
◀SD5・SD6 検出状況

第3図版 SD2 拡張 井戸調査状況(上) SD5・SD6 調査状況(下)



▲SD8 確認状況

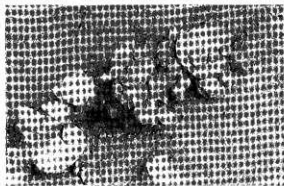


①



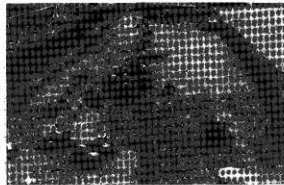
②

▲SD8 検出状況

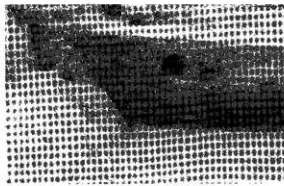
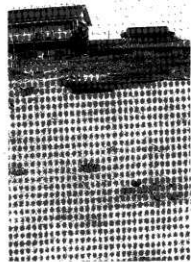


③

▼SD8 検出状況



▲SD8 遺物出土状況①②③

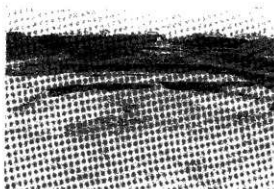


▲SD8 土層確認状況

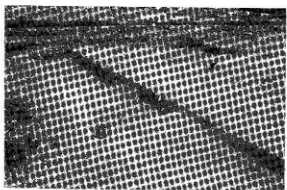
第4図版 SD8 調査状況



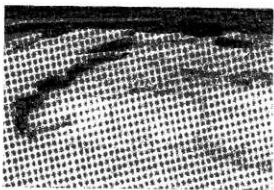
▲G-4・G-5区 土壌確認状況



▲G-4・G-5区 SX 検出状況



▲G-4・G-5区 SX 検出状況

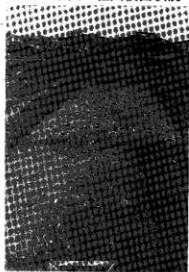


▲G-4・G-5区 SX 検出状況



▲G-4・G-5区 SX 検出状況

▼K-6区 柱穴検出状況



第5図版 G-4・G-5区 調査状況

K-6区 調査状況

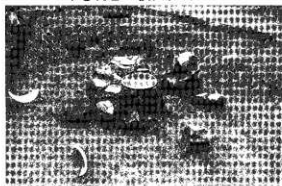


◀ H-11・12
I-11・12区
土壌、柱穴検出状況

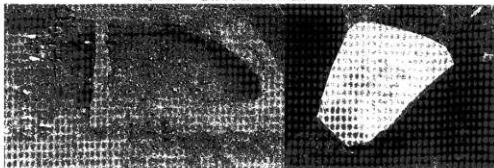
▼ SK 1 検出状況



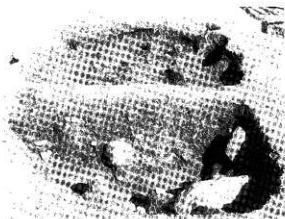
▼ SK 2 検出状況



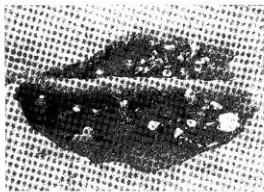
▼ SK 3 検出状況及び遺物出土状況



第6図版 H-11・12 I-11・12区 調査状況 1



▲SK4 検出状況



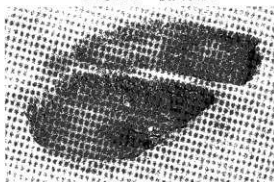
▲SK8 検出状況



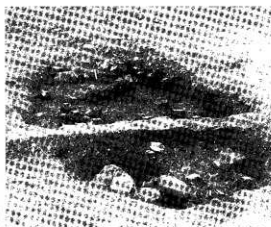
▲SK5 検出状況



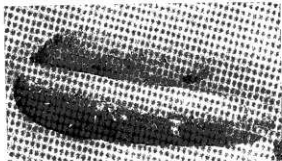
▲SK9 検出状況



▲SK6 検出状況

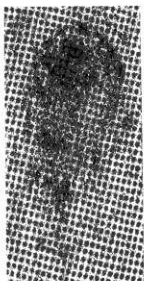


▲SK10 検出状況

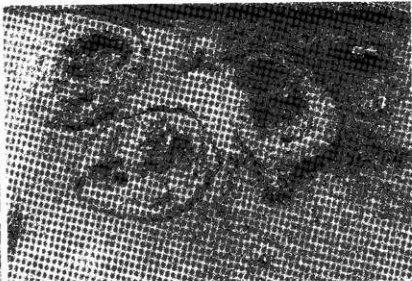


▲SK7 検出状況 (近世土壌)

第7図版 H-11・12 I-11・12区 調査状況2



▲かじ炉No 1
検出状況

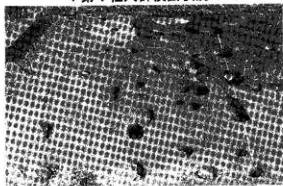


▲かじ炉検出状況 (No 1 ~ No 3)

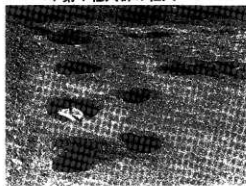


◀H-11・12
I-11・12区
柱穴検出状況

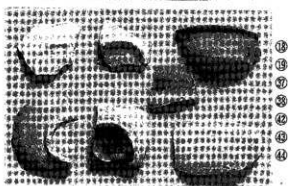
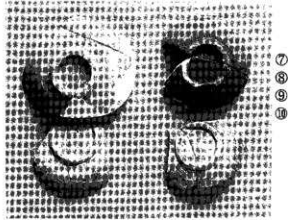
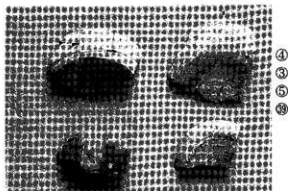
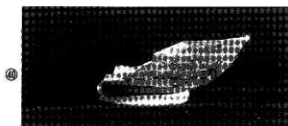
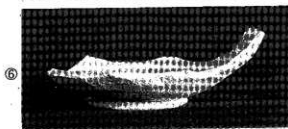
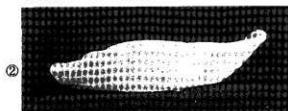
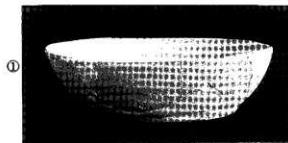
▼第1柱穴群検出状況



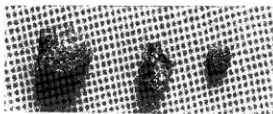
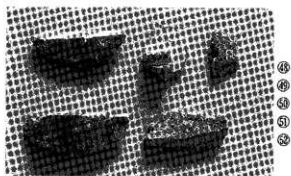
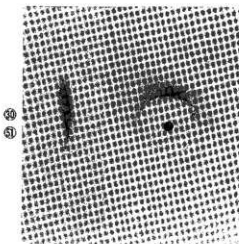
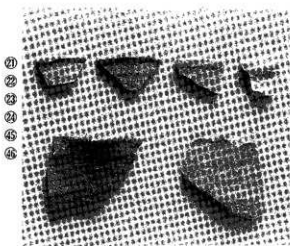
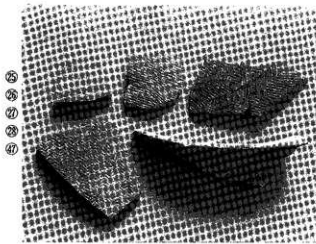
▼第1柱穴群の柱穴



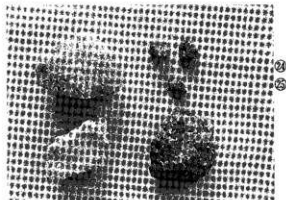
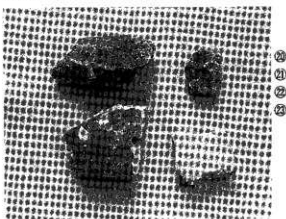
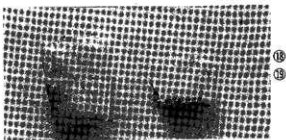
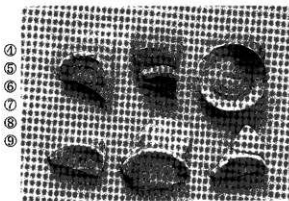
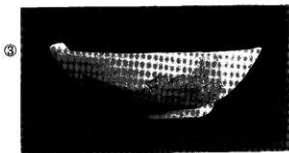
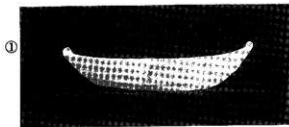
第8図版 H-11・12 I-11・12区 調査状況3



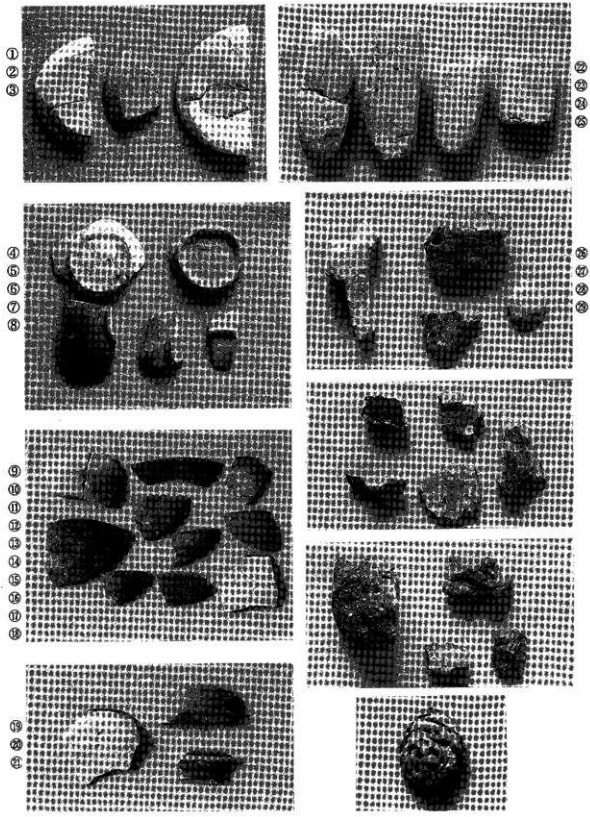
第9図版 遺物 SD1 (I層・II層・III層・IV層) ①



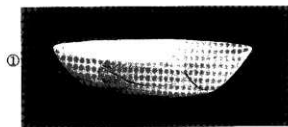
第10圖版 遺物 SD1 (I層・II層・III層・IV層) ②



第11圖版 遺物 SD2 (Ⅱ層)



第12圖版 遺物 SD2 (Ⅲ層)



①



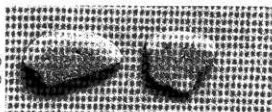
②



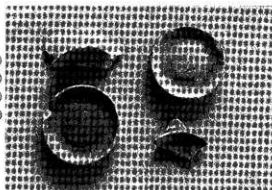
③



④



⑤



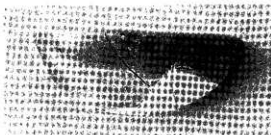
⑥

⑦

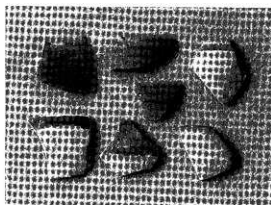
⑧

⑨

⑩



⑪



⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱



⑳

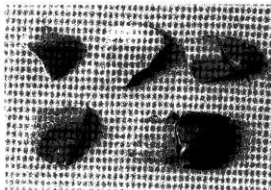
㉑

㉒

㉓

㉔

㉕



㉖

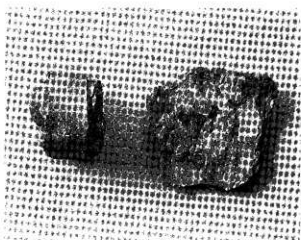
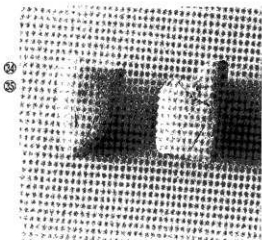
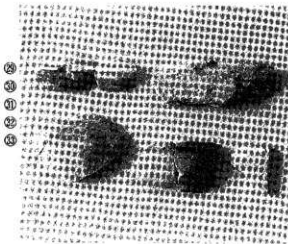
㉗

㉘

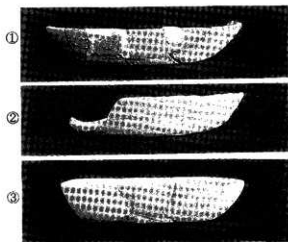
㉙

㉚

第13図版 遺物 SD2 拡張(Ⅱ層)①



第14図版 遺物 SD2 拡張 (I層) ②



①

②

③



⑦



⑧



⑨



⑩



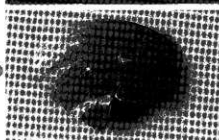
⑪



⑫



⑬



⑭



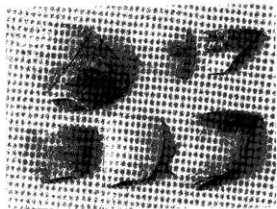
④

⑤

⑥

⑩

⑫



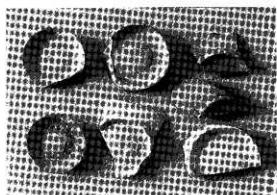
⑭

⑮

⑯

⑰

⑱



⑳

㉑

㉒

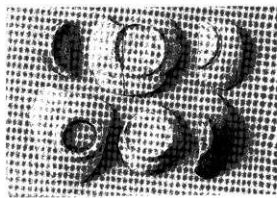
㉓

㉔

㉕

㉖

㉗



㉘

㉙

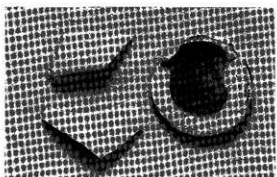
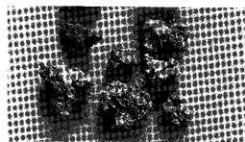
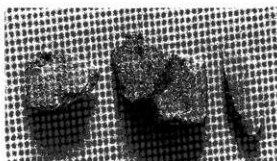
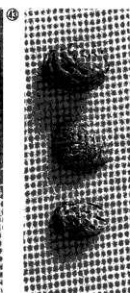
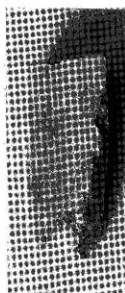
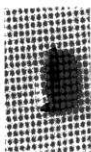
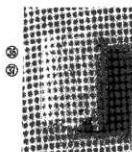
㉚

㉛

㉜

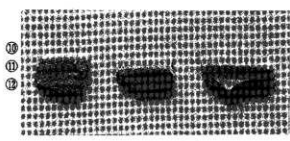
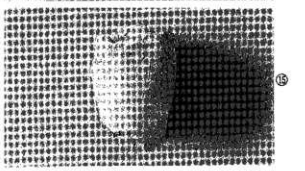
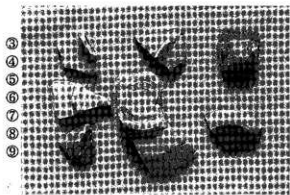
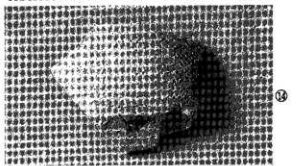
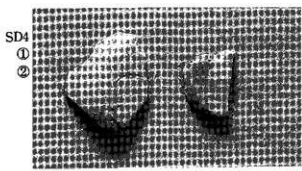
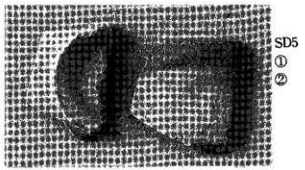
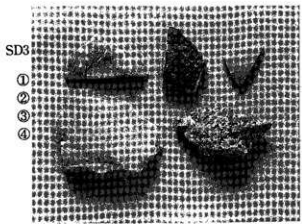
㉝

第15圖版 遺物 SD2 擴張(Ⅲ層)①

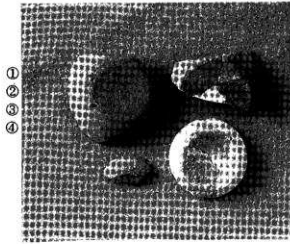


第16図版 遺物 SD2 抃張(Ⅲ層)②

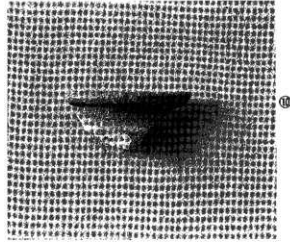
遺物 井戸内出土



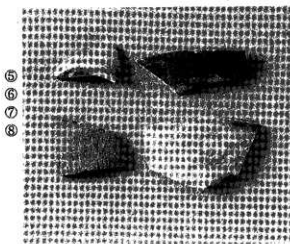
第17図版 遺物 SD3 (左上) SD4 (下) SD5 (右上)



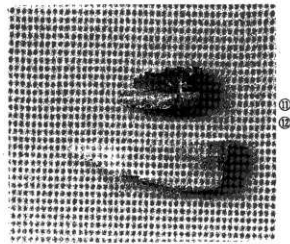
①
②
③
④



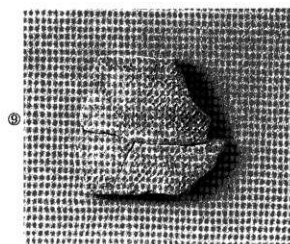
⑤



⑥
⑦
⑧



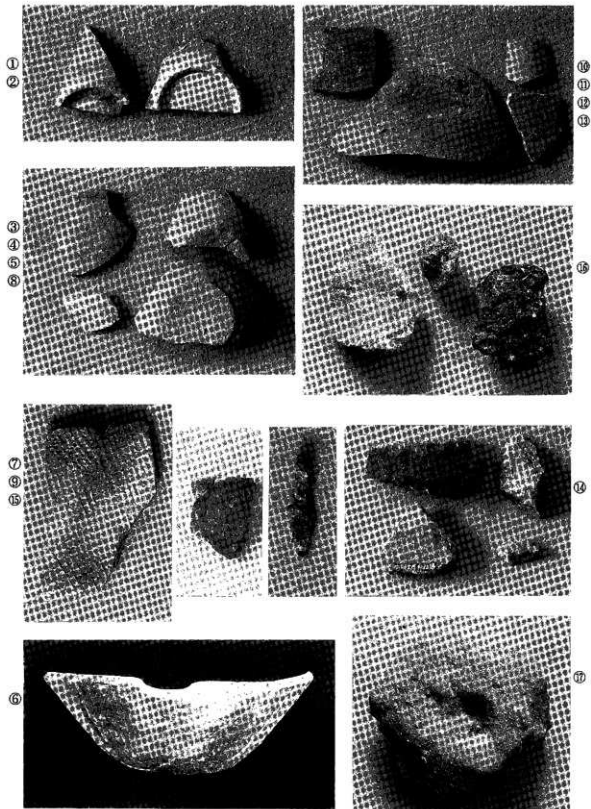
⑨
⑩



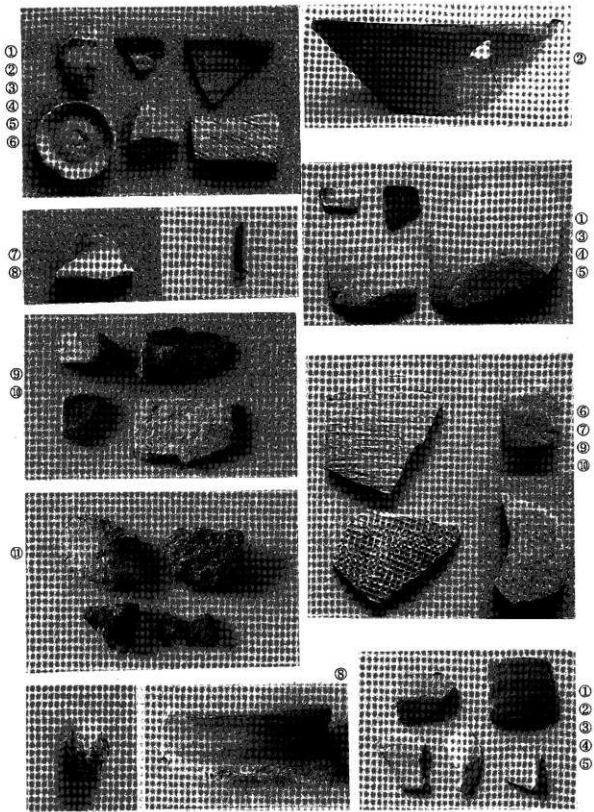
⑪



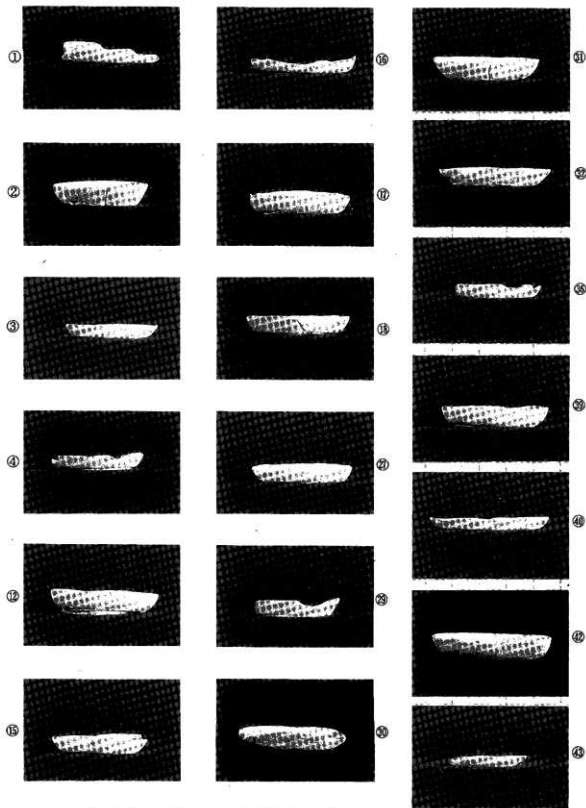
第18图版 遺物 SD 6



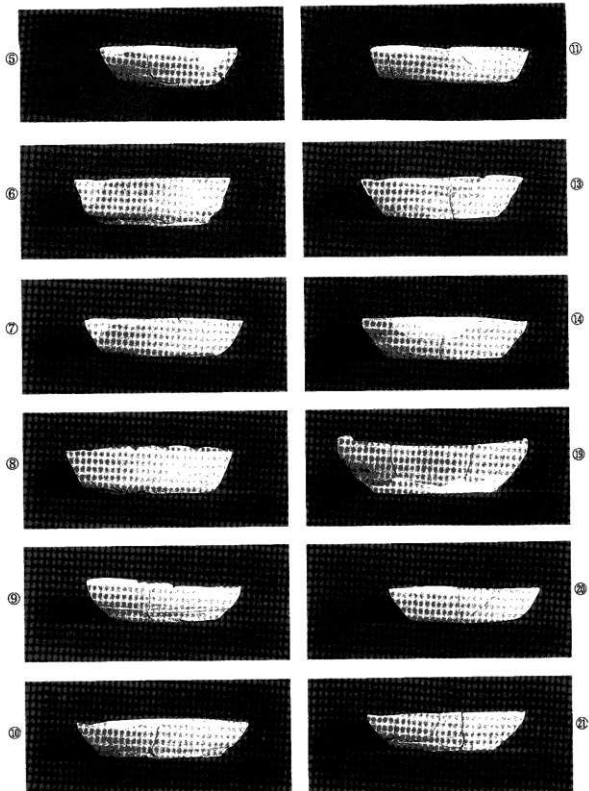
第19図版 遺物 SD8 (II層)



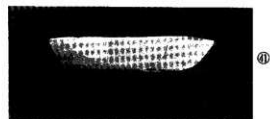
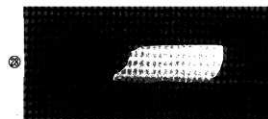
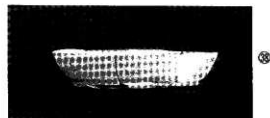
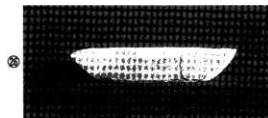
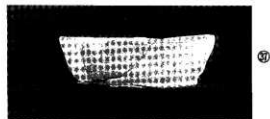
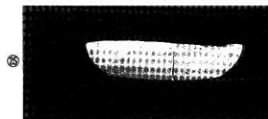
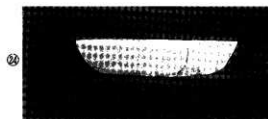
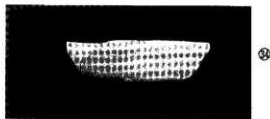
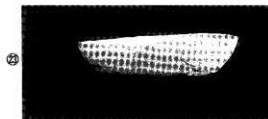
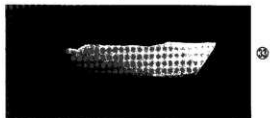
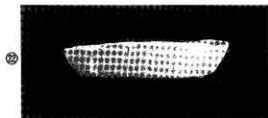
第20圖版 遺物 SD 8 (IV層)左 (VII層)右 (VIII層)下



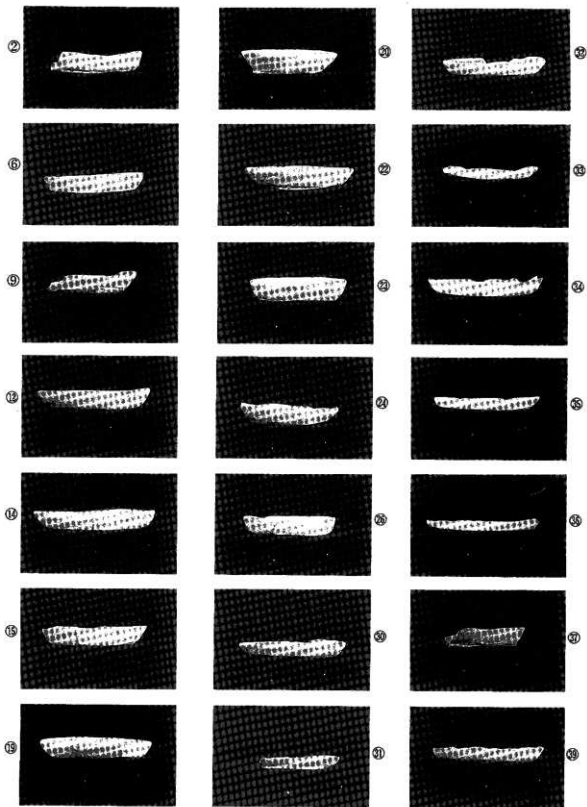
第21図版 遺物 SD8 (II層) 土師器



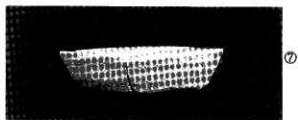
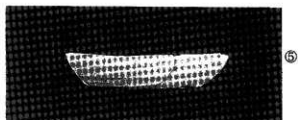
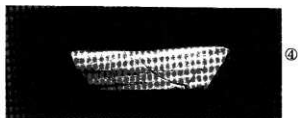
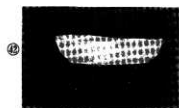
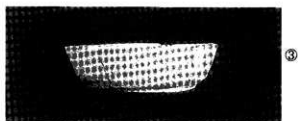
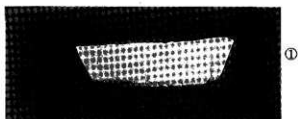
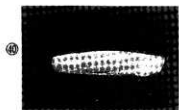
第22図版 遺物 SD8 (Ⅱ層) 土師器



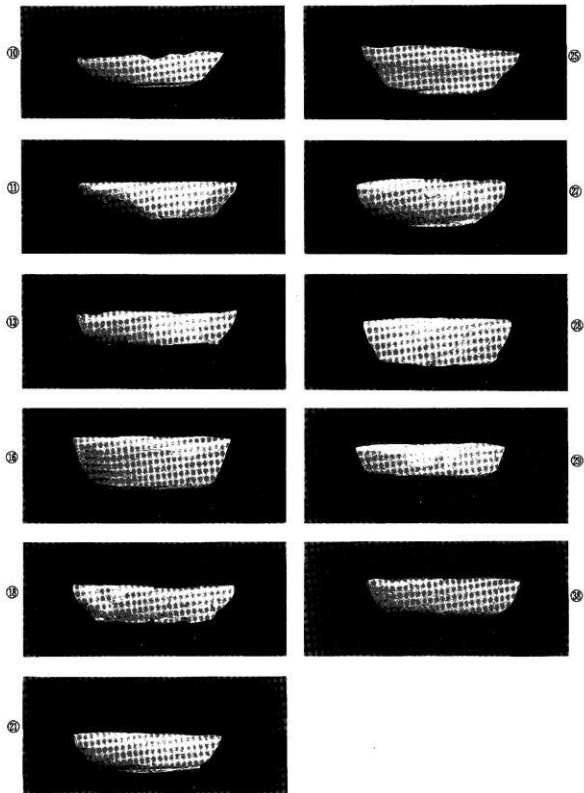
第23圖版 遺物 SD 8 (II層) 土師器



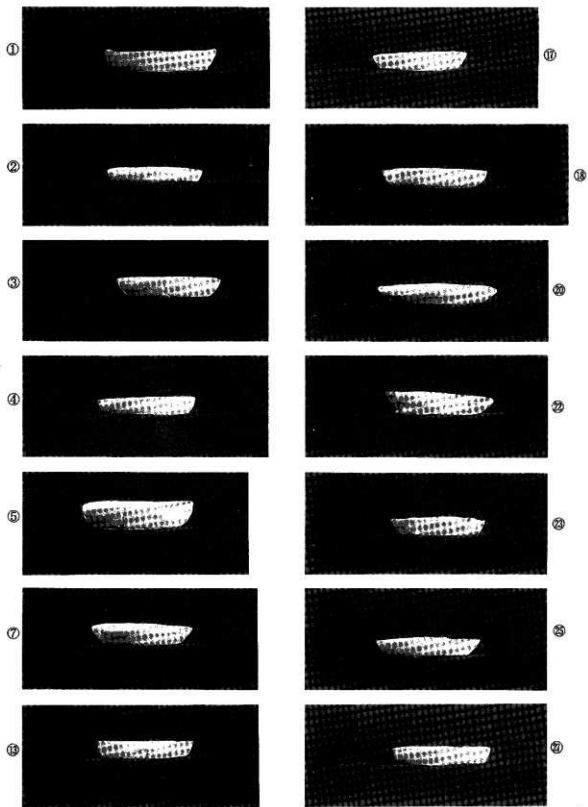
第24図版 遺物 SD 8 (IV層) 土師器



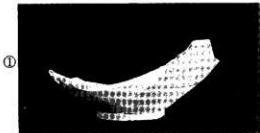
第25図版 遺物 SD8 (IV層) 土師器



第26圖版 遺物 SD 8 (IV層) 土師器



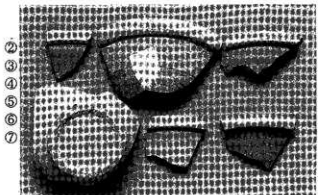
第27図版 遺物 SD 8 (VII層) 土師器



①



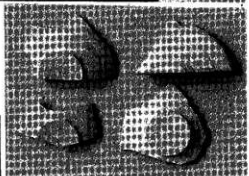
17-2



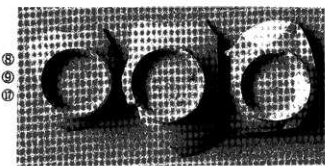
②
③
④
⑤
⑥
⑦



15



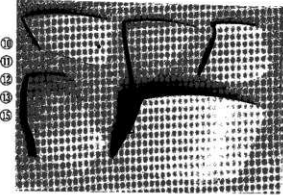
18
19
20
21
22



⑧
⑨
10



23
24
25



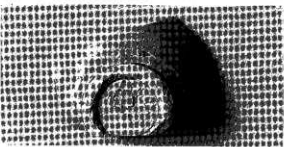
11
12
13
14
15



26
27

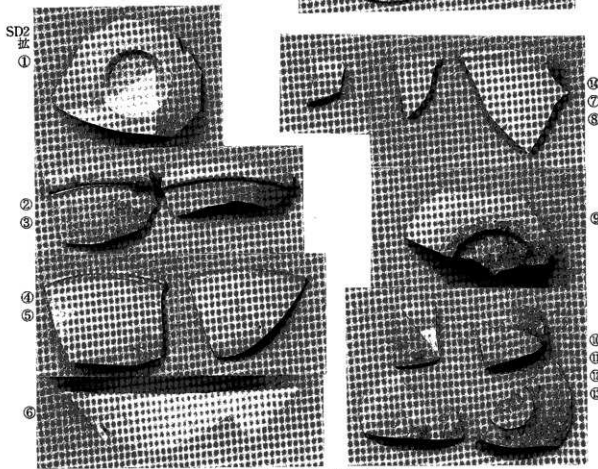
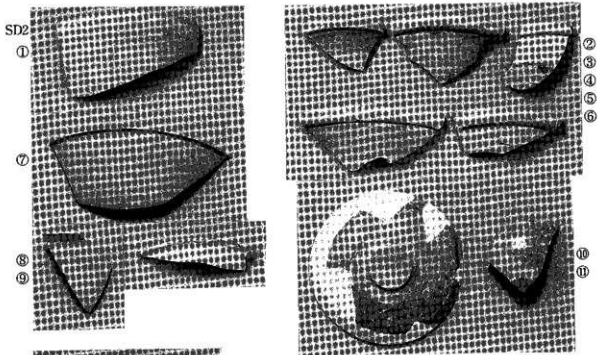


16
17



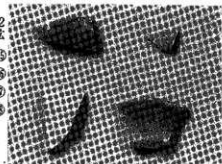
28

第29图版 遺物 SD1 白磁、青磁



第30圖版 遺物 SD2 白磁、青磁(上)
SD2 擴張 白磁、青磁(下)

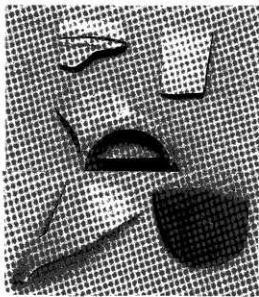
SD2
 ①
 ②
 ③
 ④



SD4
 ④



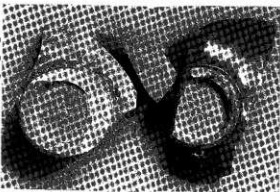
SD4
 ①
 ②
 ③



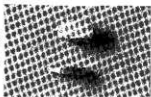
SD6
 ①
 ②
 ③



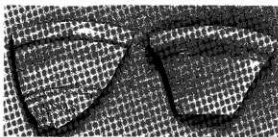
④
 ⑤
 ⑥



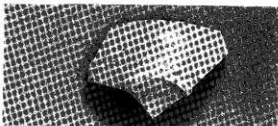
⑦
 ⑧



SD8
 ①
 ②



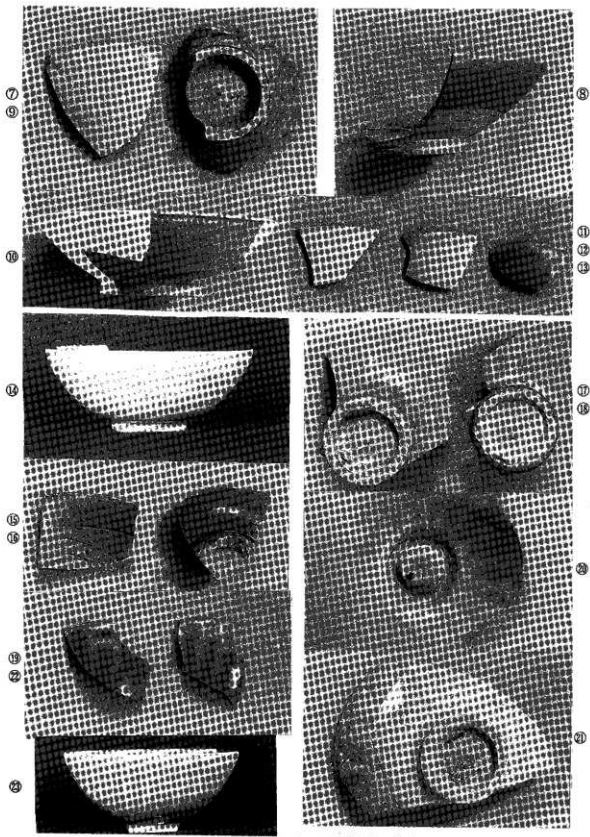
③



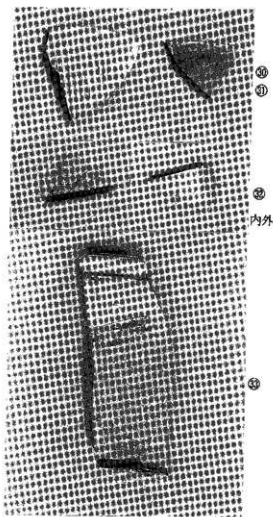
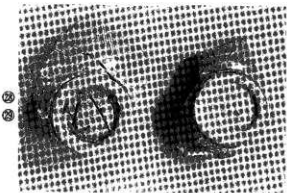
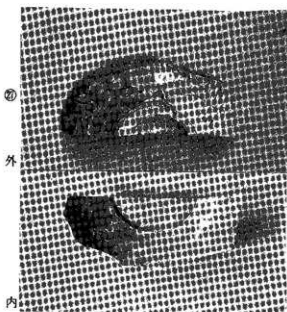
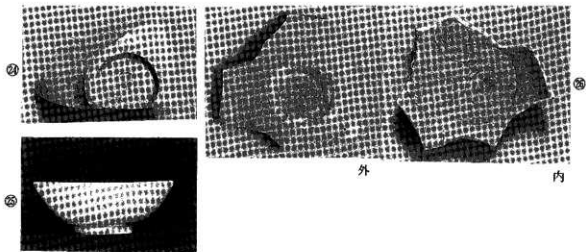
④
 ⑤
 ⑥



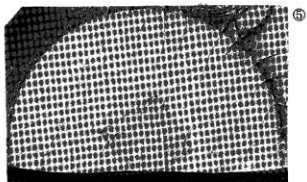
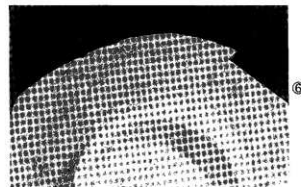
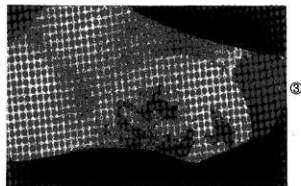
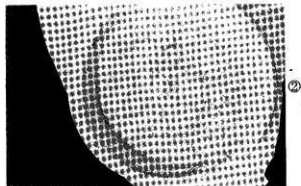
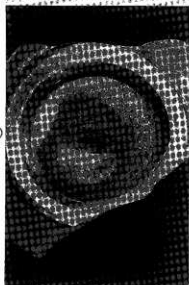
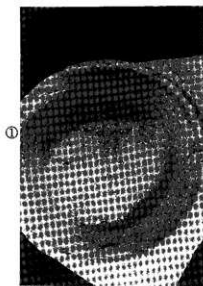
第31图版 遗物 SD2 磁石 白磁、青磁 (左上)
 SD4 白磁、青磁 (右上)
 SD6 白磁、青磁 (左下)
 SD8 白磁、青磁 (右下)



第32图版 遗物 SD8 白磁、青磁



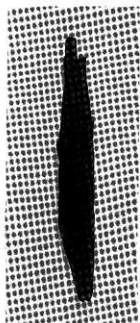
第33图版 遺物 SD 8 白磁、青磁 輸入陶器



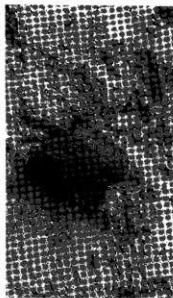
第34図版 遺物 SD 2、4、6、8出土 墨書、刻印のある白磁、青磁



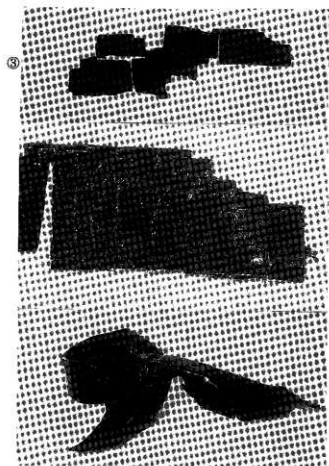
①



②



④

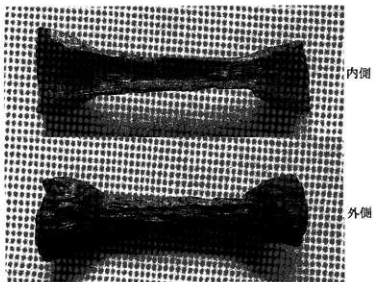
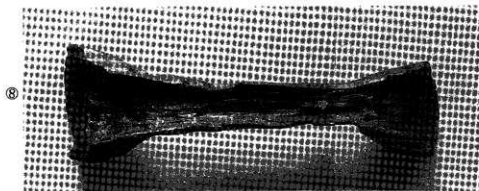
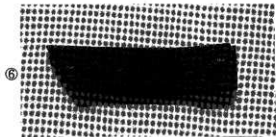


③

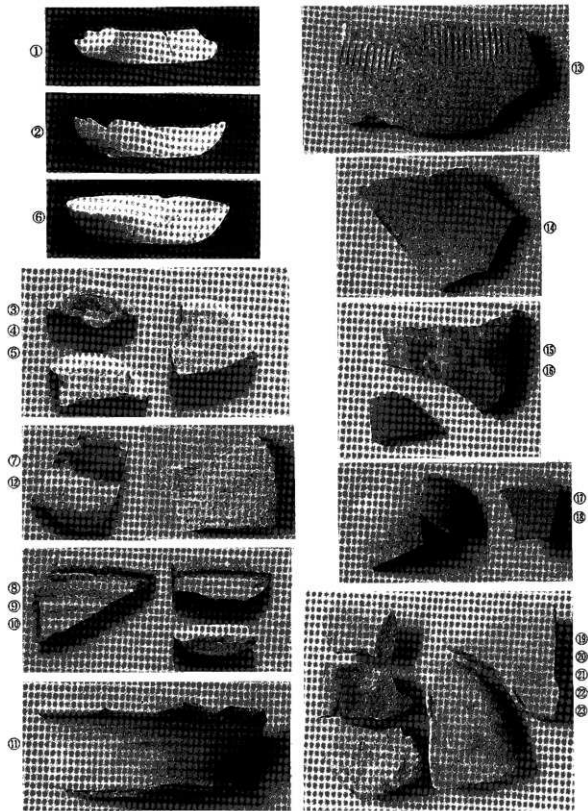


⑤

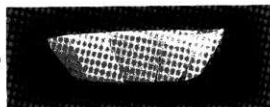
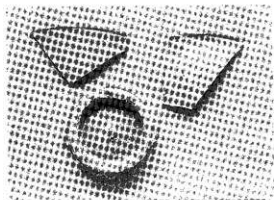
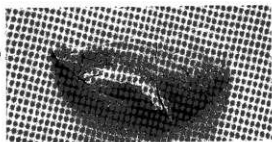
第35図版 遺物 遺物 木製品①~⑤



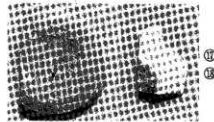
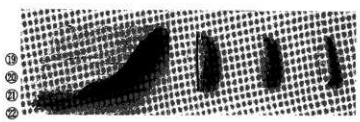
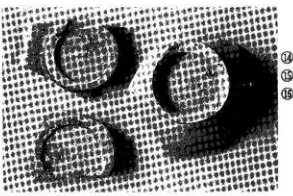
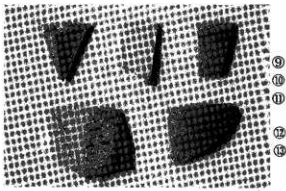
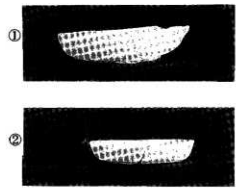
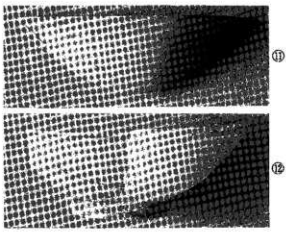
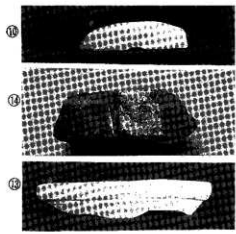
第36図版 遺物 木製品⑥～⑩



第37图版 遗物 G-4·5区 SX1



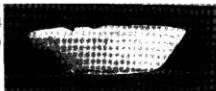
第38図版 遺物 SK 1(上)、SK 2(下)



第39図版 遺物 SK2(上)、SK3(下)

SK4

①



②



②-2



③



SK5

①



②



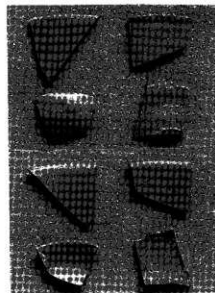
③

④

⑤

⑥

外



内

⑤

⑥

⑦

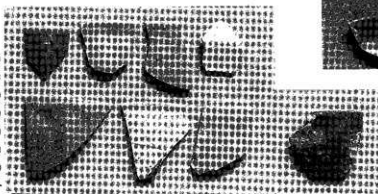
⑧

⑨

⑩

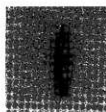
⑪

外



④

⑦



内

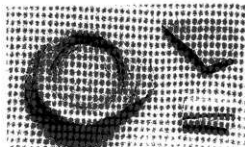


SK6

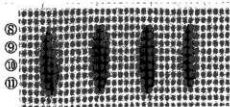
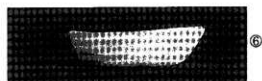
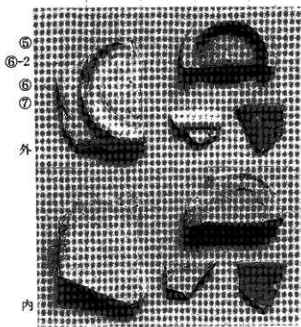
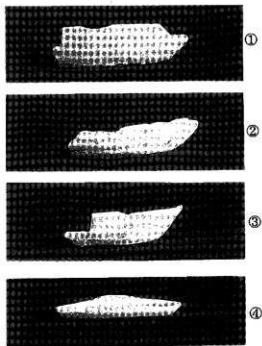
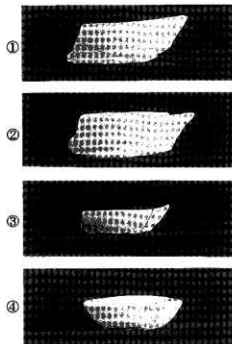
①

②

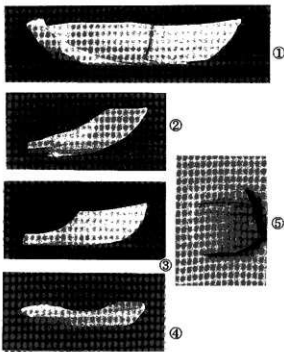
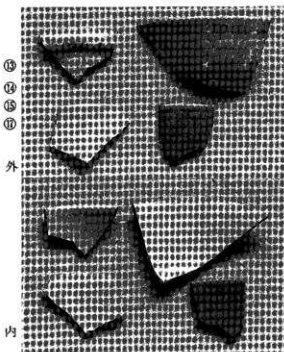
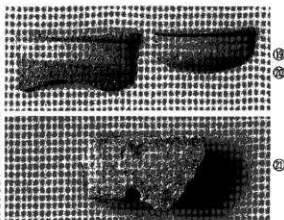
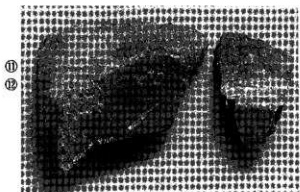
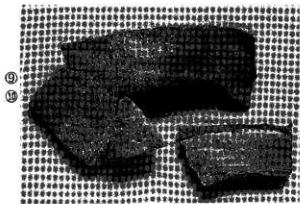
③



第40図版 遺物 SK 4(左)、5(右上)、6(右下)



第41图版 遺物 SK8(左)、SK9(右)



第42図版 遺物 SK9(左)、SK10(右)

あ　と　が　き

本渡市文化財調査報告書第6集として、本渡北土地区画整理事業に伴い発掘調査を実施しました浜崎遺跡の調査報告書をお届けします。

近年、本渡市内におきましても大規模な区画整理や圍場整備、開発や造成が計画・実施されております。

今回の調査は、このような現状の中、浜崎遺跡が工事のため影響を受ける区域について調査し、記録としてまとめたものです。今後、開発と文化財保存の調整につきましては、関係各位の一層のご理解をお願いします。

最後に、この調査に際しご協力いただきました多くの方々に感謝とお礼を申し上げます。

本渡市教育委員会
文 化 課

本渡市文化財調査報告書 第6集

浜崎遺跡調査報告書

(平成2年度～3年度 本渡北土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書)

発行/平成6年3月31日

発行者/本渡市教育委員会

〒863 熊本県本渡市東浜町8番1号

☎ (0969) 23-1111

印刷/印刷センター